

鳥羽僧正

三七八

名は覺猷。源隆國の子。大僧正となりて鳥羽に居る。戲畫を善くす。保延六年九月寂す。年八十五。

供米の不法………

橘成季

鳥羽僧正は。近き世には並びなき繪畫なり。法勝寺金堂の扉の繪畫きたる人なり。いつ程の事にか。供米不法の事ありける時繪に畫かれける。辻風の吹きたるに米の俵を多く吹き上げたるが。塵灰の如くに空に上がるを。大童子法師ばら走り散りて取り留めむとしたるを。様々に面白う筆を揮ひて書かれたりけるを。誰か知りたりけむ。其の繪を院御覽じて御入興ありけり。其の心を僧正に御尋ありければ。餘りに供米不法に候ひて。實の物は入り候はで糟糠のみ入りて軽く候ふ故に。書きて候ふと申されければ。比興の事なりとて。其より供米の沙汰嚴しくなりて。不法の事なかりけり。

(古今著聞集)

えさいかさいとりふすま………

作者不詳

法輪院大僧正覺猷(鳥羽僧正)と云ふ人おはしけり。其の甥に陸奥前司國俊。僧正の許へ行きて。参りてこそ候へと云はせければ。唯今見参らすべし。其方に暫しおはせとありければ待ち居たるに。二時ばかりまで出で合はねば。なま腹立だしう覺えて。出でなむと思ひて。共に具したる雜色を呼びければ。出で來たるに。沓もて來と言ひければ。持て來たるを穿きて。出でなむと云ふに。此の雜色が云ふやう。僧正の御房の。陸奥殿に申したれば。疾う乗れとあるぞ。其の車率⁺て來とて。小御門より出でむと仰せ事候ひつれば。やうぞ候ふらむとて牛飼載せ奉りて候へば。待たせ給へと申せど。時の程ぞあらむする。頓て歸り來むするぞとて。早う奉りて出でさせ給ひ候ひつるに。今は斯うて一時には過ぎ候ひぬらむと云へば。和雜色は不覺の奴かな。御車を斯く召し候ふはと。我に云ひてこそ貸し申さめ。不覺なりと云へば。うち差し除きたる人にもおはしませず。頓て御知り切り奉りて。きときと能く申したるぞと仰せ事候へば。力及ばず候はざりつると云ひければ。陸奥の前司歸り上りて。如何にせむと思

鳥羽僧正

三七九

ひ廻すに。僧正は定まりたる事にて。湯槽に薬を細々と切りて。一はた入れて其が上に筵を敷きて。歩き廻りてはさうなく湯殿へ行き。裸になりて。えさいかさいとりふすまと云ひて。湯槽にさくと仰ウツさまに伏すことをぞし給ひける。陸奥前司。よりにて筵を引き上げて見れば。實に薬を細々と切り入れたり。其を湯殿の垂布を解き下して。此の薬を皆取り入れて能く包みて。其の湯槽に湯桶を下に取り入れて。其が上に圍碁盤を裏返して置きて。筵を引き掩ひて。さりけなくて。垂布に包みたる薬をば大門の脇に隠し置きて待ち居たる程に。二時餘ありて。僧正小門より歸る音しければ。違ひて大門へ出で。歸りたる車呼び寄せて。車の尻に此の包みたる薬を入れて。家へはやかに遣りて。下りて。此の薬を牛の遠近歩き困じたるに食はせよとて。牛飼童に取らせつ。僧正は例の事なれば。衣脱ぐ程もなく例の湯殿へ入りて。えさいかさいとりふすまと云ひて。湯槽へ躍り入りて仰ウツさまにゆくりもなく臥したるに。碁盤の脚のいかりさし上りたるに尻骨を荒う突き。年高うなりたる人の。死に入りて差し反りて臥したりけるが。其の後音なかりければ。近う仕ふ僧寄りて見れば。目をかみに見つけて死に入りて寝たり。此は如何にと云へど答イラもせず。寄りて顔に水吹きなどして。

とばかりありてぞ息の下におろおる言はれける。此の悪戯アクギ最はしたなかりけるにや。

(宇治拾遺物語)

覺 鑊 上 人

肥前の人。興福寺の慧曉法師に依りて唯識論を習ひ。保安二年仁和寺に圓りて密灌を受く。後高野に入り。定尊阿闍梨に侍して密乗の蘊奥を極む。康治二年寂す。年四十九。

我も佛にならん……………作者 不詳

康和四年。彌千歳(覺鑊童名)年甫めて九歳。舍兄上人材答房に尋ね問ふ。此の莊は本家仁和寺成就院大僧正の御領なり。此の大僧正に超ゆる尊貴人御座候歟。兄聖人答へて云はく。大日本國々王とておはします。彼の僧正の御房も。其の御祈勤の仕人なり。又問うて云はく。國王にも超ゆる人おはすか。答へて云はく。佛なり。又問うて云はく。佛にも高下次第御座候歟。答へて云はく。爾なり。大日如來は。佛の中の王

に御座すなり。又問うて云はく。此の童も亦其の所謂佛と成るべく候哉。答へて云はく。花を摘み香を焼き。旦暮に難行苦行し。而して佛道を欣ぶの後。出家して眞言教に入り。大阿闍梨に遇ひ奉り。入壇灌頂を遂げぬれば。即ち萬徳圓滿の佛と成る。是を即身成佛と謂ふなりと云々。彌千歳之を聞き。さらば我も其の佛に成るべしとて。後夜に起き花を捧げて佛に供し。水を汲みて壇に備へ。曙けぬと急ぎ暮れぬと勤む。又此の小兒幼少の身に穀味を斷ち。難行苦行し。靈驗所に籠り。晝夜精勤す。然るに父此の小兒を見るに。難行に依つて羸衰の貌有り。父悲んで云ばく。幼者に無用の事を聞かしめ。疲衰今の如くならば。此の小兒存命難かるべし。我奇兒を失ふべし。悲歎の至り不便なり。所詮兄聖を殺して恨念を散ぜん。自ら劍を取つて威し向ふの處。彌千歳父に取り付き。愚を仰せ候哉。兄聖人は我を佛に成さんとし給ふ人にて候。我が子を失はんとする人を害せんと仰せ候はゞ。兄の聖も又即ち我が子なるを御失ひ候にては無く候や。我若し佛に成り候はゞ。父の御爲には猶吉き御子を御持ち候ものをとて。聲を揚げて泣き給へば。父道理に伏し物ものたまはず。良ありて云はく。理なり。とく佛に成れよとて許されけり。

(大傳法院本願聖人御傳)

密嚴院の籠居……………同

長承三年四年の比より。上人密嚴院に籠居して。偏に入定前儀を修作し給へり。晝の間。本尊不動明王に對し。香花を備へ法施を捧げ。禮拜恭敬し奉り。夜に入りては。上人不動三摩地に入りて安坐し給へば。不動明王又起座すること先の如し。上人香花を備へ。禮拜恭敬し給ふこと晝夜を替ふ。明王上人と相互に恭敬を作し給ふ。遙に旬月を送り。此の如く修行し給ふに依つて。門外に出で給ふこと之無し。他門の衆禪堂に入らせず。之に依つて金剛峯寺の衆偏執を成し。群議して云はく。高野山に於て弘法大師の御入定は。既に天下無雙の奇特。海内無二の勝事なり。茲に覺鑊上人大傳法院を建て。金剛峯寺に比し。禪堂を造りて奥院に擬す。大師入定して龍花の三庭を待つ。覺鑊座禪して慈尊の下生を期す。每事大師に相比し。入定を擬作す。然れば早く大勢を率ゐて密嚴院に亂入し。上人を引き出して入定を妨ぐべしと云々。茲に上人の御弟子達。金剛峯寺の惡徒種々の偏執を成し。無窮の僻見を致すの上は。只時々入室有り。寺中御經廻然るべしと申されければ。元より覺鑊事は。更に意曲無しとて。保

延五年四月二日。傳法大會の開白御聽聞の爲。御參堂ありけり。去りながら其の後又籠居し給ふ。其の比傳法院金剛峯寺相賀境論の事出來す。是れ御手印縁起を改めて相賀堺を掠め申す事篇々なり。此の事左右に寄らす。保延六年庚申。于時十二月七日。金剛峯寺の衆徒蜂起を企て。政所の所司等を召し上げ。同八日早朝。密嚴院に打ち入り。上人を追ひ出し奉らんと欲するの處。内陣に入りて堂内を見廻すに。上人更に見え給はず。壇上同體の不動尊二體相比び同座に御座す。亂入の惡僧共迷惑して何れを本尊とも何れを上人とも。實否更に知り難し。茲に或惡僧の云はく。本尊不動は木像。上人は肉身なり。膝を刺して血の出でたらんを上人と知るべしとて。實否を知らんが爲に矢の根を抜いて先づ不動の御膝を鑽り奉る處。木像不動尊の御膝より血流れ出でたり。是れ。明王の眞體と成つて血を出し。上人に替り給ふ事を上人思召し。我こそ憂き目には遇はずして。御過なき本尊うき目にあはせ申す哉と悲み給ひ。即ち出定して本身に復し。本の御容貌に成り給ひ。密嚴院を出で。涙を流し直ちに根來寺に入り給ひ畢んぬ。

(大傳法院本願聖人御傳)

平 忠 盛

正盛の子。長承元年鳥羽上皇の命を奉じ。得長壽院を創し。功に依て但馬守となり。尋て刑部卿に擢てられ内昇殿を聽さる。仁平三年卒す。年五十八。

殿上の闇討

信濃前司行長(俗傳)

忠盛いまだ備前守たりし時。鳥羽院の御願得長壽院を造進して。三十三間の御堂を建て一千一體の御佛を居る奉らる。供養は天承元年三月十三日なり。勸賞には國國を賜ふべき由仰せ下されける。折節但馬の國のあきたりけるをぞ下されける。上皇尙御感の餘に内の昇殿を聽さる。忠盛三十六にて始めて昇殿す。雲の上人はを猜み憤り。同じ年の十一月二十三日五節豊明の節會の夜。忠盛を闇討にせむとぞ議せられける。忠盛此の由を傳へ聞きて。我右弼の身にあらず。武勇の家に生れて今不慮の恥に會はむこと家の爲身の爲心憂かるべし。詮ずる所身を全うして君に仕へ奉れと云ふ本文あり。

りとして。豫ねて用意を致す。參内の始より大なる鞘巻を用意し。束帶の下にしどけな
けに差しほこらし。火のほの暗き方に向つて。やはら此の刀を抜き出して鬢に引き當
てられたりけるが、餘所よりは氷などの如カクにぞ見えける。諸人目をすましけり。又忠
盛が郎等。本は一門たりし平の木工助貞光が孫。新シニの三郎大夫家房が子に左兵衛尉家
貞と云ふ者あり。薄青の狩衣の下に萌黄威の腹巻を著。絃袋つけたる太刀脇挟んで殿
上の小庭に畏つて候ひける。貫首以下奇オヤシみをなして。うつほ柱より内。鈴の綱の邊に
布衣の者の候ふは何者ぞ狼藉なり。疾う疾う罷り出でよと。六位を以て言はせられた
りければ。家貞畏つて申しけるは。相傳の主備前守殿の今夜闇討にせられ給ふべき由
承つて。其の成らむ様を見むとて斯くて候ふなり。えこそ出でまじとて又畏つてぞ候
ひける。是等をよしなしと思はれけむ。其の夜の闇討なかりけり。忠盛又御前の召
に舞はれけるに。人々拍子を替へて。伊勢瓶子は醜襲なりけりとぞ囃されける。かけ
まくも忝く。此人々は柏原(桓武)天皇の御末とは申しながら。中頃は都の住まひも疎
疎しく地下にのみ振舞なつて伊勢國に住國深かりしかば。其國の器物ウツモノ、コトヨに託せて伊勢平
氏とぞ囃されける。其上忠盛の目の眇メカまれたりける故にこそ。斯様には囃されけるな

れ。忠盛如何にすべきやうもなくして。御遊も未終らざる前に御前を罷り出でらるゝ
とて。紫宸殿の御後にして人々の見られける所にて。横たへさゝれたりける腰の刀を
ば。主殿司に預け置きてぞ出でられける。家貞待ちうけ奉つてさて如何候ひつるやら
むと申しければ。斯くとも謂はましようは思はれけれども。正しう云ひつる程ならば頓
て殿上までも斬り上らむする者の面魂オモダマシヒにてある間。別の事なしとぞ答へられける。
(中略)案の如く五節果てにしかば。院中の公卿殿上人一同に訴へ申されけるは。それ
雄劍を帶して公宴に列し。兵仗を賜ひて宮中を出入するは。皆是格式の例を守る論命
由ヨある先規なり。然るを忠盛の朝臣。或は年來の郎徒と號して布衣の兵を殿上の小庭
に召し置き。或は腰の刀を横たへさいて節會の座に列なる。兩條希代未聞かざる狼藉
なり。事既に重疊せり。罪科尤遁れ難し。早く殿上の御簡ツグを削つて闕官停任行はるべ
きかと。諸卿一同に訴へ申されければ。上皇大に驚かせ給ひて。忠盛を御前へ召して
御尋あり。陳じ申されけるは。先づ郎徒小庭に伺候のよし全く覺悟仕らず。但近日人
々相企まる旨仔細あるかの間。年來の家人事を傳へ聞くかに依つて。其の恥を扶けむ
が爲に。忠盛には知らせずして竊に參候の條力及ばざる次第なり。若し咎あるべくば

彼の身を召し進すべきか。次に刀の事は主殿司に預け置き候ひ畢んぬ。是を召し出され。刀の實否に依つて咎の左右行はるべきかと申されたりければ。此の儀尤然るべしとて。急ぎ彼の刀を召し出して觀覽あるに。上は鞘卷の黒う塗りたりけるが。中は木刀に銀箔をぞ押いたりける。當座の恥辱を遁れむが爲に刀を帶する由顯はすと云へども。後日の訴訟を存じて木刀を帶しける用意の程こそ神妙なれ。弓箭に携はらむ程の者の謀には最斯うこそあらまほしけれ。兼ねては又郎徒小庭に伺候の事。且うは武士の郎等の習なり。忠盛が咎にはあらずとて。却つて觀感に預つし上は。敢へて罪科の沙汰は無かりけり。

(平家物語)

源 爲 義

義親の子。保元元年崇徳上皇の召に應じて白河殿に赴く。戦利あらず。髪を削りて善法と改め。義朝に依りて罪を宥められんことを請ふ。許されず。六條磔に斬らる。六十一。

比 叡 の 別……………作者不詳

さる程に六條判官(爲義)竝に子供尋ね進らすべき由播磨守(清盛)に仰せ付けらる。十六日(保元元七月)清盛三百餘騎にて如意山を越えて三井寺を求むれども無し。東坂本に在る由聞えて大和の莊泉辻イヅミノツジと云ふ所を追捕す。(中略)爲義は直河と云ふ所より木工モクの神主が許に隠れ居たりけるが。官軍向ふと聞きて。三河三郎大夫近末と云ふ者の家に行きて。其より東國へ下らむとしけるが運や盡きたりけむ。忽に重病を受けて心身苦痛せられければ。氏神八幡大菩薩にも離され給ひけりとて。郎等共も落ち失せて纜に子供の外十八人許ぞ残りける。とかくして馬に勞イタはり乗せて衰浦の方へ行き船に乗らむとする處に。誰とは知らず兵三十騎許追ひ來り撃たむとしければ。頼賢以下身命を捨て、防ぎ戦うて追ひ散してけり。其の時残る兵も行方知らずなりにけり。其より彌頼少なになり果て、心細きのみならず。判官は重病に煩ひ給ふ。其の上海道も塞がり關々も堅く守ると聞えければ。中々東國へ下らむことも適ひ難しとて。復三郎大夫が家に立ち歸りて。日暮れしかば山上に登り其の夜は中堂に通夜して。殊に重

病失除の悲願を憑みて終夜祈誓せられたり。明くれば十七日。西塔の北谷黒谷と云ふ所に二十五三昧行ふ所に行きて。出家を遂げ法名を義法房とぞ附かれける。月輪房の賢者の許より墨染の衣袈裟を奉りて。沙彌の形になり給ふ。此の爲義は十四歳にて。叔父美濃の前司義綱其の子美濃三郎義明を伐つて。其の時の勸賞ゲシヤウに左兵衛尉になされけり。本は陸奥四郎とぞ申しける。十八歳永久元年四月。清水寺別當の事に就きて。南都の大衆朝家を恨み奉りて。國民を催し春日の神木を先として栗栖山まで來りしを。馳せ向つて追ひ返しき。其の勸賞に左衛門尉になる。二十八歳にて檢非違使五位尉になる。日比中御門中納言家成卿に就きて。陸奥守を望み申しけるに。祖父伊豫入道頼義此の受領に任じて。貞任宗任が亂に依つて前九年の合戦ありき。八幡太郎義家又彼の國の守になりて。武衡家衡を攻むるとして後三年の兵亂ありき。然れば尙意趣殘る國なれば。今爲義陸奥守になりたらししかば。定めて基衡を亡さむと云ふ志あるべきか。旁不吉の例なりとて御聽ユカされなかりしかば。爲義然らば自餘の國守に任じて何かはせむとて。今年六十一まで終に受領もせざりけり。日來より地下の檢非違使にてありけるが。由なき新院の御謀叛ウツに與し奉り。年來の本望をも達せずして出家人道してける。

こそ無念なれ。義法房子共に向つて宣ひけるは。我が身が合期したらばこそ各引き具して山林にも立ち隠れめ。我は唯義朝を憑んで都へ出でむと思ふなり。諸も今度の勳功に申し替へても命ばかりは助けこそせむすらめ。但恣に院方の大將軍を承りたれば。勅命重くして助かり難からむか。其亦力なき事なり。齡既に七旬に及び惜むべき身にあらず。萬一マンイチ効なき命助かりたらば。何ナニにもして汝等をも助くべし。面面は先づ如何ならむ木の蔭岩の間にも隠れ居て。事靜まらむ程を待つべしと宣へば。爲朝聞きも敢へず。此の儀然るべからず候ふ。縦ひ下野守殿義朝こそ親子の間なれば。助けむとし給ふとも天氣よも御免し候はじ。其の故は新院崇徳は正しく主上後白河の御兄にて渡らせ給はずや。左府頼長亦關白殿忠通の御弟ぞかし。豈親とて罪科なからむや。義朝何ナニに申さるゝとも立ち難くこそ覺え侍れ。御所勞直りおはしまさば唯何ともして關東に赴き。今度の合戦に上り合はぬ三浦介義明。畠山莊司重能。小山田別當有重等を相語らひて。東八箇國を管領して暫しもおはしますべし。若京都より討手下らば。爲朝一方承つて思ふ任マカに合戦して。適はずば其の時討死すべし。などか暫く支へざらむと申しければ。其は東國へ下著しての事ぞかし。落人オチウロとなりぬれば何事も思

ふに適はぬものなれば降参せむと宣ひて。既に山より出で給へば。子供も泣く泣く供しつゝ。西坂本下松サガリマツを下りしかば。東雲漸う明け行きて。鳥の聲々告げ渡り。峯の横雲晴れければ。入道疾く疾く何方へも落ち行くべしと宣ひて。都の方へ赴き給ふを。暫く御待ち候へ。申すべき事候ふと聲々申せば。何事にやとて立ち歸り給へば前後左右に立ち圍みて泣くより外の事ぞなき。實に唯今を限にて又逢ふべきことならねば。名残を惜むも道理なり。入道今度老の頭に冑を戴きて合戦を致すこと。全く我が身の榮花を期するにあらず。若打ち勝つて運を開かば汝等を世に在らせむと思ふ爲なり。今義朝を憑みて出づるも。我もし安穩ならば其の蔭にて各をも助けばやと思ふ故なり。汝等を捨て、我一人助からむとや思ふらむ。齡既に致仕に餘れば身の幾何の後榮をか期せむ。何ならむ所にも深く隠れて侍るべし。疾く疾くとて下られけるが。斯くて心強くは宣ひしかども。さすが名残や惜しかりけむ。又立ち歸りて。頼賢よ頼仲よ。言ふべきことあり歸れと宣へば。各喚ばれて立ち歸る。實には異なる事なけれども。飽かぬ別の悲しさに。又喚び下し給ひける恩愛の程こそ哀なれ。斯くの如く互に別を慕へども。さてあるべきにあらざれば。面々は散り散りにこそ別れ行く。落つる涙に道

昏れて。行く先更に冥々たり。悲しきかな人界に生を受けながら。鳥にあらねども四鳥の別を致し。哀なるかな廣劫の契空しくして。魚にはなけれども釣魚の恨を含む。涙瀾下として魂飛揚すと見えて哀なりし有様なり。子供は小原靜原芹生の里。鞍馬の奥貴舟の方さまへ思ひ思ひに落ち行けば。深山隠れの秋の空露も時雨も争ひて。我が袖の涙も更に眞柴とる山路の奥を辿りつゝ。人里遠く分け入れば。峯の巴猿一度叫び行人の裳を濕せば。谷の牡鹿の妻戀に旅客の夢も覺めぬべし。さて入道は賀茂川を渡り。糺の森より雑色花澤を義朝の許へ遣して。是まで遁れ來れる由を申されければ。左馬頭(義朝)夜に入つて輿を奉り。竊に判官殿を迎へ取り給ひけり。(保元物語)

藤原頼長

太政大臣の子。久安五年左大臣となり。尋て太政大臣にのほり從一位に敘す。保元元年崇徳上皇を勸めて亂を作さしめ。軍敗れて死す。

惡 左 府

作者不詳

藤原頼長

三九三

宇治左大臣頼長と申すは。知足院禪閣殿下忠實公の二男にておはします。入道殿の公達の御中に殊更愛子にておはしましけり。人柄も左右に及ぼぬ上。和漢共に人に勝れ禮儀を調へ自他の記録に暗からず。文才世に知られ諸道に淺深を探る。朝家の重臣攝籙の器量なり。されば御兄の法性寺殿(忠通)の詩歌に巧にて御手跡の美しくおはしますをば貶り申させ給ひて。詩歌は閑中の弄なり朝家の要事に非ず。手跡は一旦の興なり。賢臣必しも是を好むべからずとて。我が身主と全經を學び。信西を師として靜に學窓に籠りて仁義禮智信を正しくし。賞罰勳功を別ち政務を疏通キリトホシにして上下の善惡を正されければ。時の人惡左大臣とぞ申しける。諸人斯やうに恐れ奉りしかども。眞實の御心向は極めて麗はしくおはしまして。怪しの舍人牛飼なれども。御勳當を蒙る時道理を立て申せば。細々と聞しめして罪なければ御後悔ありき。又禁中陣頭にて公事を行はせ給ふ時。外記官吏等を諫めさせ給ふに。過たぬ次第を辨へ申せば。我が僻事と思しめす時は忽に折れさせ給ひて。御怠狀を遊ばして彼等にたぶ。恐をなして給はらざる時は。我が能く思しめす怠狀なり。唯賜はり候へ。一の上の怠狀を以下の臣下取り傳ふる事家の面目にあらずやと仰せられければ。畏りて賜はりけるとかや。實

に是非明察に善惡無二におはします故なり。世も是をもてなし奉り。禪閣殿下も大切の人に思し召しけり。久安六年九月二十六日。氏の長者に補し。同じき七年正月十日内覽の宣旨蒙らせ給ふ。攝政關白を闕きて三公内覽の宣旨是ぞ始なると人々傾き申されけれども。父の殿下の御計らひの上は君も強アツガチに仰せらるゝ仔細もなし。此の大臣とても必しも世を知し召すまじきにもなければ。諸臣も之を許し給ひけり。

左大臣殿失せ給ひて後は職事辨官も故實を失ひ。帝闕も仙洞も朝儀廢れなむとす。世以て惜み奉る。實に累代攝籙の家に生れて萬機内覽の宣旨を蒙り。器量人に越え才藝世に聞え給ひしが。如何ありけむ氏の長者たりながら。神事疎略にして威勢を募れば我伴はざる由春日大明神の御託宣あり。神慮の末こそ恐しけれ。此の左府未弱冠の御時。仙洞にて通憲入道と御物語の序に。入道攝家の御身は朝家御鑑にておはしませば御學文あるべき由勸め申しけり。是に依て信西を師として讀書ありて螢雪の功をぞ勵み給ひける。其の後左府御病氣の由聞えしかば。入道訪問トウラヒの爲に宇治殿へぞ参りたりける。聊御心地宜しくおはしませしかば臥しながら文談し給ひけるに。龜のトと易のトとの淺深を論じ給ひけり。左府龜のト深しと宣へば。通憲易のト深しと申すに依

つて。御問答事廣くなりて良久し。互に多くの文を引き數多の文を開き給へり。人道終に負け奉りて。今は御才學既に朝に餘らせおはします。此の上は御學文あるべからず。若尙爲させ給はゞ御身の崇となるべしと申して出でにけり。御心も此の事いみじと思しめしけるにや。自御日記に遊ばしたる語コトバに曰はく。先年院に於て學文すべき由誂へる事予二十歳なり。今病席の論二十四歳なり。中僅に四年の中才智既に彼の許可を蒙る。都て四年學文の間書卷彼が諾を聞く毎に忘るゝ事なし。今感涙を拭つて此の事を記すと侍り。實に信西の申されける詞は掌を指すが如し。才に誇る御心まませばこそ御兄法性寺殿を。詩歌は閑中の弄能書は賢才の好む所に非ずなどとして直下と思しめされけめ。弟子を見ること師に如かずと云ふこと眞に明けし。是御學文を止め申すに非じ。才智に誇り給ふ所をぞ誠め進らせけむ。充御心誠に心ありて麗はしき御心ばせの上の御學文こそ然るべけれ。何か都て内外の鑽仰唯一心の爲なり。調達が八萬藏を諳する終に奈落の底に墮す。隋の煬帝の才能人に勝れたりしも國を亡す基たり。學者の心を用ゐること唯此の處に在るべし。されば孔子の語にも古の學者は己が爲にす。今の學者は人の爲にすと宣へり。夏桀殷紂は儒道に憎む輩文書に貶る所なり。然

れども能藝優長にして才智人に勝れたり。依つて之を戒むる詞に。智は能く諫を拒ぐに足り。言は則ち非を飾るに足り。人臣に矜るに能を以てし。天下に高ぶるに名を以てすと云へり。斯様の先言を思ふに。俊才におはしましゝかども。其の心根に違ふ所のあればこそ祖神の冥慮にも違ひて身を滅し給ひけれ。

(保元物語)

信西入道

鳥羽崇徳近衛三朝に歴史し。博學を以て知らる。藤原信賴と隙あり、平治の亂。源光泰の爲に斬らる。本朝世紀。法曹類林等の著あり。

安祿山の繪卷

作者不詳

其の頃少納言入道信西と云ふ者あり。山井三位永賴卿八代の後胤越後守季綱が孫。鳥羽院の御宇進士藏人實兼が子なり。儒胤を受けて儒業を傳へすと雖も。諸道兼學して諸事に暗からず九流百家に至る。當世無雙の宏才博覽なり。後白河上皇の御乳母紀

伊の二位の失たるに依つて。保元元年より以來は天下の大小事を心の任に執り行つて。絶えたる跡を繼ぎ廢れたる道を興し。延久の例に任せて大内に記録所を置き理非を勅決す。聖斷私なかりしかば人の恨も残らず。世を淳素に歸し君を堯舜に致し奉る。延喜天曆の二朝にも恥ぢず。義悻惟成が三年にも超えたり。大内は久しく修造せられざりしかば。殿舎傾危し樓閣荒廢して牛馬の牧雉兔の伏所となりたりしを。一兩年の内にて造畢して遷幸なし奉る。外廓重疊たる大極殿。豐樂殿。諸司八省。大學寮。朝所に至るまで。華樓雲のかた大厦の構成風の功年を経ずして不日になりしかども。民の煩もなく國の費もなかりけり。内宴相撲の節久しく絶えたる迹を興し。詩歌管絃の遊折に觸れて相催す。九重の儀式音を恥ぢず萬事の禮法古きが如し。去んぬる保元三年八月十一日主上(後白河)御位を退らせ給ひて。御子の宮に譲り申させ給へり。二條院是なり。然れども信西が權位も彌威を振ひて飛ぶ鳥も落ち草木も靡くばかりなり。又信賴卿の寵愛も尙彌珍らかにして。肩を雙ぶる人もなし。されば兩雄は必諍ふ習なる上。如何なる天魔か二人の心に入り替りけむ。其中悪しくして殊に觸れて不快の由聞えけり。信西は信賴を見て。如何さまにも此の者天下をも危め國家をも亂らむする

人よと思ひければ。如何にもして失はざやと思へども。當時無雙の寵臣なる上人の心も知り難ければ。うち解けて申し合すべき輩もなし。序あらばと躊躇ひ居たり。信賴も亦何事も心の任なるに。此の入道我を拒みて恨を結ばむ者彼なるべしと思ひてければ。如何なる謀をも廻して失はむとぞ工みける。或時信西に向つて上皇仰せなりけるは。信賴が大将を望み申すは如何に必ずしも重代清華の家に非ざれども。時に依つて爲さるゝこともありけるとぞ傳へ聞しめすと仰せられければ。信西。すは此の世の中今はさてと。歎かはしくて申しけるは。信賴などが大将になりなば誰か望を懸け候はざらむ。君の御政は京官を以つて先とす。敍位除目に僻事出で來ぬれば。上天の巍巍に背き下人の貶を受けて世の亂るゝ端なり。其の例漢家本朝に繁多なり。さればにや阿古丸大納言宗通卿を白河院大将になさむと思しめしたりしかども。寛治の聖主(堀川)御許されなかりき。故中御門藤中納言家成卿を舊院(鳥羽)大納言になさばやと仰せられしかども。諸大夫の大納言になることは絶えて久しく候ふ。中納言に至り候ふだに過分に候ふものをと。諸卿皆諫め申されしかば思し召し止みぬ。せめての御志にや。歳の始の勅書の裏書に。中御門新大納言殿へと遊ばされたりける。是を拜見して。

實に成され進らせたるにも尙過ぎたる面目かな。御志の程忝しとて。老の涙を拭ひ兼ねけるとぞ承り候ふ。大納言尙以て君も執し思し召し。臣もユルガセ忽にせじとこそ諫め申し。況や近衛大將をや。三公には列すれども大將をば經ざる臣のみあり。執柄の息英才の輩も此の職を先途とす。信賴などが身を以つて大將を汚さば。彌奢を極めて謀逆の臣となり天の爲に亡され候はむこと。いかでか不便に思しめされて候ふべきと諫め申しけれども。實にもと思しめしたる御氣色もなし。信西餘りの勿體なさに。唐の安祿山が奢れる昔を繪に書きて。卷物三卷を作りて院へ進らせけれども。君は尙けにもと思し召したる御事もなく天氣他に異なり。信賴卿は通憲ミチノリ(信西)入道が散々に申しけることを漏れ聞きて安からぬ事に思ひければ。常に所勞と號し出仕もせず。伏見源中納言師仲卿を相語らうて。彼の在所に籠り居て。馬に乗り馳引早足力持など偏に武藝をぞ稽古せられける。是併ながら信西を失はむ爲とぞ聞えける。(平治物語)

自ら埋む

作者不詳

さる程に通憲入道を尋ねられけれども行方を更に知らざりけり。彼の信西と申すは。

南家の博士長門守高階經敏が猶子なり。大業も遂けず儒官にも入れられず。重代に非ざるなりとて辨官にもならず。日向守通憲とて何となく御前にて召し仕はれけるが。出家しける故は。御所へ參らむとて鬢を梳きけるに。鬢水に面相を見れば。寸の首劍の前に懸りて空しくなると云ふ面相あり。驚き思ひける頃宿願あるに依りて熊野へ參りけり。切部の王子の御前にて相人に行き逢ひたり。通憲を見て相して曰く。御邊は諸道の才人かな。但寸の首劍の先に懸りて露命を草上に曝すと云ふ相のあるは如何にと云ひて。一々に相しけるが。行く末は知らず。來し方は何事も違はざりければ。通憲もさ思ふぞとて歎きけるが。其をば如何にして遁るべきと云ふに。いざ出家してや遁れむすらむ。其も七旬に餘らば如何あらむとぞ云ふ。さてこそ下向して御前へ參り。出家の志候ふが。日向入道と呼ばれむは無下に憂ウツクてしう覺え候ふ。少納言を御許蒙り候はばやと申しければ。少納言は一の人もなりなどして左右なく取り下さぬ官なり。如何あらむと仰せられけるを。様々に申して御許されを蒙り。頓て出家して少納言入道信西とぞ云ひける。子供或は中少將に至り。或は七辨に相並びてゆゝしかりしが。終に墨染の袖に身を替へても露命を野邊の草に置き兼ねしは。昨日の樂今日の悲諸行

無常は唯目前に現れたり。吉凶は糾へる繩の如しと云ふぞ道理なる。信西九日午の刻に。白虹天を貫くと云ふ天變を見て。今夜御所へ夜討入るべしとは知りたりけるにや。此の様申し入れむとて院の御所へ参りたれば。折節御遊にて子供御前に伺候したりしかば。其の興を醒し進らせむも無骨なれば。或る女房に仔細を申し置きて罷り出でにけり。宿所に歸り紀伊の二位に。斯かる事あり子供にも知らせ給へ。信西は思ふ旨あつて奈良の方へ行くなりと云ひければ。尼公も同じ道にと歎かるれども漸うにこしらへ留めて。侍四人相具し。秘藏せられたる桃花毛ツキダの馬に打ち乗りて。舍人成澤を召し具し南都の方へ落ちられけるが。宇治路へ懸り田原が奥大道寺と云ふ所領にぞ行きにける。石堂山の後信樂シガラキの峯を過ぎ遙分け入るに。又天變あり。木星壽命冢に在り大伯經典に侵す時は忠臣君に代り奉ると云ふ天變なり。信西大に驚き。本より天文淵源を究めたりければ。自是を考ふるに。强者弱く弱者強しと云ふ文なり。是君奢る時は臣弱く。臣奢る時は君弱くなると云へり。今臣奢つて君弱くならせ給ふべし。忠臣君に代ると云ふは恐らくは我なるべしと思ひて。翌くる十日の朝。右衛門尉成景と云ふ侍を召して。都の方に何事かある。見て歸れとて差し遣す。成景馬に打ち乗つて馳せ行

く程に。小幡峠にて入道の舍人武澤と云ふ者。御所に火懸けて後。禪門奈良へと聞きしかば此の事申さむとて走りけるに行き逢ふ。然々の由を語り姉小路の御宿所も焼き拂はれ候ひぬ。是は右衛門督殿左馬頭殿を語らひ。入道殿の御一門を滅し給はむとの謀とこそ承り候へ。其の由を告げ進らせむとて奈良へ参り候ふと申せば。下藤におはす所知らせては悪しかりなむと思へば。汝いしく参りたり。春日山の奥しかじかの所なりと教へて。成景は京へ上る由にて田原の奥に歸り。入道に此の由を申せば。さればこそ信西が見たらむことはよも違はじと覺えつるぞ。忠臣君に代り奉るとあれば。如かじ命を失ひて御恩を報じ奉らむには。但息の通はむ程は佛の御名を唱へ参らせむと思へば。其の用意せよとて。穴を深く堀り四方に板を立て竝べ。入道を入れ奉り。四人の侍髻切りて。最後の御恩には法名を賜はらむと各申せば。左衛門尉師光は西光。右衛門尉成景は西景。武者所師清は西清。修理進清實は西實とぞ附けられける。其の後大なる竹の節フサを通して入道の口に當て。髻を具して堀り埋む。四人の侍墓の前にて歎きけれども適ふべきことならねば。泣く泣く都へ歸りけり。

(平治物語)

源義朝

四〇四

爲義の子。保元の亂。禁裏に赴き。左馬權守と爲る。平治の亂。信賴に黨し。敗れて尾張に奔り。長田忠致の爲に殺さる。時に永曆元年一月三日。年三十八。

昇

殿

作者不詳

さる程に。内裏は高松殿なりしかば。分内狭くして便宜悪しかりなむとて。俄に東三條殿へ行幸なる。主上(後白河)は御引直衣にて腰輿に召さる。神璽寶劍を取りて御輿に入れ進らせらる。其の時義朝御前に召さる。赤地の錦の直衣に折烏帽子。引き立て。脇立ばかりに太刀帶いたり。少納言入道(信西)を以て軍の様を召し問はる。義朝畏つて申しけるは。合戦の術さまざまに候へども。即時に敵を従へ。立ち所に利を得る事。夜撃に過ぎたること候はず。就中南都より衆徒大勢にて。吉野十津河の者共を召し具して。千餘騎にて今夜宇治に著き。明朝入洛仕るよし聞え候ふ。敵に勢の著か

ぬ前に押し寄せ候はむ。内裏をば清盛などに守護せさせられ候へ。義朝は罷り向つて。忽に勝負を決し候はむとぞ勧めける。信西御前の床に候ひけるが。殿下(忠通)の御氣色を承つて申しけるは。此の儀尤然るべし。詩歌管絃は臣が家の弄ぶ所なりと雖も其れ尙昧し。況んや武藝の道に於てをや。一向汝が計らひたるべし。實に先んずる時は人を制す。後にする時は人に制せらると云へば。今夜の發向尤なり。然らば清盛を留めむことも然るべからず。武士は皆々罷り向ふべし。朝威を輕しめ奉る者。豈天命に背かざらむや。早く兇徒を追討して逆鱗を休め奉らば。先づ日來申す所の昇殿に於ては疑あるべからずと。申されければ。義朝合戦の場に罷り出で、何ぞ餘命を存ぜむ。唯今昇殿仕つて冥途の思出にせむとて押して階上へ昇りければ。信西此は如何と制しけり。主上是を御覽じて御入輿ありけるとなり。十一日(保元元年七月)の寅の刻に。官軍既に院(崇徳)の御所へ押し寄する。折節東國より軍勢上り合ひて義朝に相従ふ兵多かりけり。

(保元物語)

左馬頭

作者不詳

源義朝

四〇五

子の刻ばかりに及んで武士の勳賞行はる。安藝守清盛をば播磨守に任じ。下野守義朝は左馬権頭になる。陸奥新判官義康は藏人になされて即ち昇殿を許さる。義朝申しけるは。此の官は先祖多田満仲法師始めてなりたりしかば。其の跡芳ばしく候へども。本は左馬助なり。今権頭に任ずる條。莫大の勳功に更に面目とも覺えず。朝敵を伐つ者は半國を賜はる。其の功世々に絶えずとこそ承れ。其の上今度は嚴親を背き兄弟を捨て。一身御方に参つて合戦を致すこと自餘の輩に超えたり。是勅命の重きに依つて。背き難き父に向つて弓を引き矢を放つ。全く希代の珍事なり。然れども身の不義を忘れ君命に従ふ上は。人に勝ぐるゝ恩賞何ぞ無からむやとぞ申しける。此の條尤道理なりとて。中御門藤中納言家成卿の子息隆秀朝臣。左馬頭たりしを左京大夫に移されて。義朝を左馬頭にぞなされける。

(保元物語)

内海……………

作者不詳

さる程に。左馬頭は。堅田の浦へうち出で、義隆の首を見給ひ。八幡殿の御子の名残には此の人ばかりこそおはしつるに。後れ奉りては彌力なくこそ覺ゆれとて。泣く泣

く念佛申し弔ひて。湖へ馬の太腹涵るまでうち入れ。此の首を深く收められけり。やがて舟を尋ねて渡らむとせられけれども。折節波風烈しくして適はざりしかば。其より引き返し。勢多を指して落ちられけるが。此の勢一所にては適ふまじ。道を替へて落つべし。志あらば東國にて必ず参會すべし。暇取らする兵共と宣へば。各何處までも御供仕りてこそ何ともなり候はめと申せども。存する旨あり。疾く疾くと宣へば。力及ばずして二十餘人暇賜はり。思ひ思ひに國々へ下りけり。

義朝はとかくして。美濃國青墓の宿に著き給ふ。彼の長者大炊が娘延壽と申すは。頭殿御志淺からずして女子一人おはしましけり。夜叉御前とて十歳になり給ふ。來年の御宿なれば其に入り給へば。斜ならずもてなし奉る。さる程に。義朝が大炊が許におはしゝが。斯くてもあるべきならねば。頓て立ち出で給ふ。大炊は是にて御年を送り。閑に御下り候へと申しけれども。茲は海道なれば悪しかりぬべし。朝長をば見續ぎ給へとて出でむとし給ふ處に。宿の者共聞きつけて二三百人押し寄せたり。佐渡式部大輔是を見て。茲をば重成撃死して通し進らせ候はむとて。或家に走り入り馬引き出しうち乗つて。狼藉なり雜人どもとて。散々に蹴散らして。子安の森に馳せ入り。

向ふ敵十餘人射殺し。左馬頭義朝自害するぞ。我が手に懸けたりなど論ずべからずとて。先づ面の皮を削り。腹十文字に掻き切つて。二十九と申すに終に空しくなりけり。皆是を大將と思ひて歸りければ。夜に入りて宿を出で給ふ。(中略)其の後平賀四郎にも暇賜ひて。勢を附けて攻め上り給ふべき由宣へば。さて何處を指して御下り候ふぞと申されければ。先づ尾張の野間に行き。忠致に馬物の具請うて通らむすると宣へば。平賀四郎。長田は大徳人にて世を伺ふ者なれば。落人隠し奉らむこと如何と申しければ。されども鎌田が舅なれば何事かあらむと宣へば。さては義信は御上りに参り逢ひ奉らむとて別れけり。義朝鎌田を召して。海道は宿々通り得難きなる。是より内海へ著かばやと思ふは如何にと宣へば。鷺栖の玄光と申すは大炊が弟なり。隠れなき強盗名譽の剛の者にて候ふ。頼みて御覽候へと申せば。然るべしとて此の由を仰せらるゝに。玄光悦びて。是れならずば何事か頭殿の御用あるべきとて。小舟にて下る處に。府津に鬮居ゑて舟をも搜しければ。此の舟をも寄せよとて。何舟ぞと尤むれば。玄光ぞかすと云ふ。玄光ならむには如何に夜は行くぞと云へば。今日明日ばかりの年の内なれば。夜もえ休まぬぞとて漕ぎ通る。同じき二十九日(平治元年十二月)に尾張國知

多郡野間の内海に著き給ふ。長田莊司忠致請け取り奉りて。様々にもてなし申せども御馬を進らせよ。急ぎ御通りあるべしと宣ひければ。せめて三日の御祝過ぎてこそ御立ち候ふべけれど。頗に留め奉れば。力なく逗留し給ふ。さる程に。長田莊司子息先生景致を近づけて。さても此の殿をば通しや奉る。是にて撃ち申すべきか。如何にといふに。景致申しけるは。東國へ下り給ふとも人よも助け進らせじ。人の高名になさむよりも。是にて撃ち奉りて平家の見参に入れ。義朝の知行分をも申し給はらば。子孫繁昌にてこそ候はむすれと云ひければ。尤然るべし。但名將の御事なれば。小勢なりとも撃ち奉らむこと大事なりと申せば。御湯ひかせ給へとて。湯殿へ賺し入れ奉りて。橘七五郎は近國に無雙の大力なれば。組手なるべし。彌七兵衛。濱田三郎は手利なれば。刺し殺し進らすべし。鎌田をば内へ召されて酒を強ひ伏せ。軍の様を問ひ給へ。頭殿撃たれ給ひぬと聞きて走り出でば。妻戸の陰に待ちかけて景致斬り伏せ候はむ。金玉丸と玄光法師をば。外侍にて若者共の中に取り籠め。引つ張つて刺し殺し候はむに。何の仔細候ふべきと計らへば。湯殿設らひて。正月(永曆元)三日に。莊司御前に参り。都の御合戦。道すがらの御辛勞に。御湯召され候へと申せば。然るべし

とて頓て湯殿へ入り給へば。三人の者隙を伺ふに。金丸御剣を持ちて御垢に参りければ。すべて撃つべきやうぞなき。程經て御帷子進らせよと云へども人もなき間。金丸腹を立て走り出でける其の隙に。三人の者共走り違ひてつと入り。橘七五郎むすと組み奉れば。心得たりとて取つて引き寄せ。押し伏せ候ふ所を。二人の者左右より寄りて。脇の下を二刀づゝ刺し奉れば。心は猛しと申せども。鎌田はなきか金丸はとて。終に空しくなり給ふ。金丸走り歸つて是を見て。悪い奴ばら一人も餘すまじとて。三人ながら湯殿の口に斬り伏せたり。鎌田兵衛は忠致に向ひて酒を飲みけるが。此の由を聞きて突い立つ所を。酌取りける男刀を抜いて飛びかゝる。正家取つて引き寄せ。其の刀を以て二刀刺す所を。後より景致もと首を撃ちて打ち落す。鎌田も今年三十八。頭殿と同年にて失せにけり。

(平治物語)

源義平

義朝の子。一に惡源太といふ。平治の亂。待賢門を守り重盛と戦ふ。後平

氏の爲に逢阪山中に捕へられ。六條河原に斬らる。年二十六。

待賢門

中井積徳

初め信賴岸然として自ら大にし。盛氣下を馭す。義朝等の桀驁を以て。皆騙使せらる。乃ち以爲へらく以て大事を濟すに足ると。官軍の呼躁の聲を聞くに及び。乍ち氣索き色廢し。股栗して階を下る能はず。左右扶掖して馬に上す。方に跨つて而して墜つ。既にして待賢門に向ふ。重盛五百騎を以て門す。號んで之を挑む。信賴應ずるに及ばず。馬を回して退き。唯言ふ兵善く之を拒けと。兵の爲に鬪ふもの無し。重盛門を排して信賴に従ふ。義朝之を望み。忿つて曰く。豎子既に事を敗る。惡源太いづくにか在る。胡ぞ狙いて敵を攘はざると。義平聲に應じ。正清等十六騎と大に叫んで之に赴く。官軍勢沮む。義平號んで曰く。敵を殺さば寧ろ將を殺せ。緋甲にして黃馬なるものは將なりと。騎皆物色して重盛を追ふ。重盛之を逃る。樹を繞る三匝。引いて出で。騎を更へて復入る。義平曰く。騎は皆新なるも將は仍故のごとしと。短兵疾撃して。又之を敗る。北ぐるを追ふ數百歩。重盛急にして。其の軍と失ひ。獨り兩騎と

走る。義平正清之を躡ふ。正清重盛を射る。一矢は肩に中り。一矢は脊に中る。甲堅くして旨入らず。馬を射る。馬倒る。及ぶ焉。其の騎留まつて之に死す。重盛其馬を取りて。馳せて其の軍に入る。

(漢語)

夜叉女

義朝の女。母長者大炊の娘延壽。兄頼朝捕へらるゝに及び。身を株瀬川に投じて死せり。

株瀬川の藻屑

作者不詳

義朝は。とかくして義濃の國青墓の宿に著き給ふ。彼の長者大炊が娘延壽と申すは。頭殿御志淺からずして女子一人おはしましけり。夜叉御前として十歳になり給ふ。斯かる處に同じき(永暦元)二月九日。義朝の三男前右兵衛佐頼朝。尾張守の手より生け捕りて六波羅に著き給ふ。同じき次男中宮大夫進朝長の首をも奉らる。其の時延壽腹の姫君の。兵衛佐の召し捕られ給ひて都へ上られければ我も義朝の子なれば女子

なりとも終にはよも助けられじ。一人一人失はれむよりは。佐殿と同道にこそせめてならめとて。伏し沈み給ひけるを。大炊延壽色々に慰めて取り留め奉りけり。其の瀬過ぎければ。さりともと思ひ。心緩しけるにや。二月十一日の夜。夜叉御前唯一人青墓の宿を出で。遙隔たりたる株瀬川に身を投けてこそ失せ給へ。十一歳とぞ聞えし。武士の子はなか幼き女子も武かるらむとて。哀を催さぬ者もなかりけり。

(平治物語)

藤原忠通

關白忠實の子。保安二年關白となり。近衛帝立つに當て攝政となる。長寛二年薨す。年六十八。世に法性寺關白とよぶ。

傳

作者不詳

近くおはしまし、法性寺の大臣(忠通)は富家の入道大臣(忠實)の御子におはします。御母六條の右の大臣(顯房)の御女。仁和寺の御室(覺法法親王)と申し、一つ御同

夜叉女 藤原忠通

胞におはしまし、かば。其の北の政所昔は白河の院にも参り給ひけるにこそ仁和寺の法親王をば師子王の宮とぞ世には申し。御母の童名にやおはしけむ。さて此の大臣仁和寺の宮と親しく申し交し給ひき。さて住み給ひける程に先は姫君生み給ひ。又此年の歳關白にならせ給ふ。御年二十五にぞおはしまし。同じき四年正月に讃岐の帝(崇徳)位に即かせ給ひしかば攝政と申しき。帝大人オホナに成らせ給ひて。關白と申し、程れさせ給ひて。此の一院(後白河)位に即かせ給ひしにも又關白にならせ給ひしかば。四代の帝の關白にて再び攝政と申しき。昔も最類なき事にこそ侍りけめ。太政大臣オホキオトメにも再びなり給へりし最有り難く侍りき。藤氏の長者妨げられ給ひしも。左の大臣(賴長)の事に遇ひ給ひしかば。保元元年七月に更に復り成らせ給ひにき。同じき三年八月十六日二條の帝位に即かせ給ひし時。今の殿(基房)の御兄におはしまし、右の大臣オホイマウチキミ(基實)に關白讓り聞えさせ給ひて大殿とておはしまし、に。應保二年に御髮下させ給ひてき。御年六十六とぞ承りし。長寛二年二月十九日六十八と聞えさせ給ひし年薨れ

させ給ひにき。昔まだ幼くおはしまし、時春日の祭の使させ給ひしに。内侍周防の御参りて行事の辨の爲高に申し送りけり。

いかばかり神も嬉しと三笠山二葉の松の千代のけしきを

其の返しは劣りたりけるにや聞え侍らざりき。祈り奉りたる驗ありてめでたく久しくせさせ給ひき。法性寺の御堂の御所など造りて貞信公(忠平)の御堂の側に住ませ給ひしかば。法性寺殿とぞ申すめる。昔より攝政關白續きておはしませど。身の御才は類なくおはしましき。才學も優れておはしましける上に。詩など作らせ給ふことは古の宮帥殿などにも劣らせ給はずやおはしけむ。歌詠ませ給ふ事も心高く昔の跡を願ひ給ひたる態なりけり。管絃の方心にしめさせ給ひて。箏の琴を宗と御遊などにも彈かせ給ふとぞ聞き侍りし。父大臣ばかりはおはしまさずやありけむ。手書かせ給ふ事は昔の上手にも恥ぢずおはしましけり。眞字も假字も好もしく今めかしき方さへ添ひて優れておはしましき。内裏の額ども古きをば寫し。失せたるをば更に書かせ給ふとぞ承りし。院宮の御堂御所など色紙形は如何ばかりかは多く書かせ給ひし。御願より始めて寺々の額など數知らず書かせ給ひて。横川の花臺院などは古き所の額も。迎講勸

めける聖の申したるとて書かせ給へりとぞ山の僧は申し。又人の仁和寺とかより頼
 申したりければ書かせ給ひける程に。奥のえびす基衡とか云ふが寺なりと聞かせ給ひ
 て。陸奥へ取り返しに遣したりけるを返し奉らじとしけるを。女の心賢くやありけむ。
 返し奉らざらむは痴事なりと諫めければ返し奉りけるに。御既舍人とか遣したりける
 御使の心や猛かりけむ。三つに打割りてぞ持て上りける。柱を睨みけむにも劣らぬ使
 なるべし。夷までも躰き奉りけるにこそ。又孰の御願とかの繪に。飯室の僧正尊くお
 はする事書くとて冷泉院の御太刀拔かせ給へるに。僧正遁け給へる跡に留れる三衣篋
 の本にて帝の物の怪うたせ給ひたる所の色紙形。是はえ書かじとて文字も書かれて未
 だ侍るなり。御手並びなく書かせ給へどもさやうの用意は有り難き事ぞかし。まだ幼
 くおはしましたし時より歌合など朝夕の御遊にて。基俊俊頼など云ふ時の歌人共に。人
 の名匿して判ぜさせなどせさせ給ふこと絶えざりけり。御歌など多く聞き侍りし中に。
 わたの原漕ぎ出で、見れば久方の雲居にまがふ沖つ白波
 など詠ませ給へる御歌は。人丸が鳥隠れ行く舟をしぞ思ふなど詠めるにも恥ぢずやあ
 らむとぞ人は申し侍りし。

吉野山峯の櫻や咲きぬらむ籠の里に匂ふ春風

など詠ませ給へるも心も詞も妙にして。金玉集などに選り載せられたる歌の列になむ
 聞え侍るなる。唐の文作らせ給ふことも斯くぞありける。されば文の心ばへ知らせ給
 ふこと深くなむおはしける。白河の院にも三卷の詩選びて奉り給ひ。基俊の君にも唐
 日本のをかしき言の葉どもをぞ選り遣はさせ給ひける。斯様の事ども多くなむ侍るな
 る。又作らせ給へる唐の詞ども。御集とて唐の白氏の文集などの如くに。事好む人弄
 ぶとぞ承る。斯く才もおはしまして日記なども鏡を懸けておはしませば。右大辨爲隆
 と云ひし宰相は。日本はゆゝしく不調法なる國かな。前の關白を一の人にて此の大臣
 花園の大臣二人若き大臣よく仕へぬべきを。うちはへつゝ公事も勤めさせで。此の殿
 一の人なれば徒らに足引き入れて居給へるこそ惜しけれとぞ云はれけるとなむ聞え侍
 なりし。

(續世繼物語)

源爲朝

保延五年生まる。源爲義の八男。鎮西八郎と號す。嘉應二年伊豆の大島に

軍

議

作者不詳

西の門をば六條判官爲義承りて父子六人して固めたり。其の勢百騎ばかりには過ぎさりけり。是こそ猛勢なるべきか。嫡子義軌に附いて多分は内裏へ参りけり。茲に鎮西八郎爲朝は。我は親にも連れまじ兄にも具すまじ。高名不覺も紛れぬやうに唯一人如何にも強からむ方へ差し向け給へ。縦令千騎もあれ萬騎もあれ。一方は射拂はむするなりとぞ申しける。由つて西河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衛門大夫家弘承つて子供具して固めたり。其の勢百五十騎と聞えし。抑、爲朝一人として殊更大事の門を固めたること武勇天下に許されし故なり。件の男器量人に超え心飽くまで剛にして大力の強弓矢次ぎ早の手利なり。弓手の肘馬手に四寸伸びて。矢束を引くこと世に超えたり。幼少より不敵にして兄にも所を置かず傍若無人なりしかば。身に添へて都に置きなば悪しかりなむとて。父不興して十三の歳より鎮西の方へ追ひ下すに。豊後國に居住し尾張權守家遠を傳とし。肥後の國阿曾平四郎忠景が子三郎忠國が

塔に成つて。君よりも給はらぬ九國の總追捕使と號して筑紫を従へむとなしければ。菊地原田を始として所々に城を構へて立て籠れば。其の儀ならばいで落して見せむとて。未勢も附かざるに忠國ばかりを案内者として。十三の歳の三月の末より十五の歳の十月まで。大事の軍をすること二十餘度城を落すこと數十箇所なり。城を攻むる謀敵を伐つ術人に勝れて。三年が内に九國を皆攻め落して自ら總追捕使に押し成つて悪行多かりけるにや。香椎宮の神人等都に上り訴へ申す間。往にし久壽元年十一月二十六日徳大寺中納言公能卿を上卿として。外記に仰せて宣旨を下さる。

源の爲朝久しく宰府に住して。朝憲を忽諸にし。咸く論言に背き。梟惡類に聞え狼藉尤甚し。早く其の身を禁め進らすべし。宣旨に依つて執達件の如し。

然れども爲朝尙參洛せざりければ。同じき二年四月三日父爲義を解官せられて前檢非違使に成されけり。爲朝之を聞きて。親の科に當り給ふらむこそ淺ましけれ。其の儀ならば我こそ如何なる罪科にも行はれむすとて急ぎ上りければ。國人共も上洛すべき由申しけれども。大勢にて罷り上らむこと上聞穩便ならずとて。形の如くに附き隨ふ兵計召し具しけり。傳子の箭前拂の須藤九郎家季。其の兄隙間數の惡七別當。手取

の與次。同じき與三郎。三町礫の紀平次大夫。大矢の新三郎。越矢の源太。松浦の二郎左中次。吉田兵衛。打手の紀八。高間三郎。同じき四郎を始として二十八騎をぞ具したりける。よつて去年より在京したりしを。父不興を赦して今度の御大事に召し具しけるなり。爲朝は七尺許なる男の目角二つ切れたるが。紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に八龍と云ふ鎧を似せて。白き唐綾を以て威したる大荒目の鎧。同じき獅子の金物打つたるを著るまゝに。三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞘入れ。五人張の弓長さ七尺五寸にて鉄打つたるに。三十六差したる黒羽の矢負ひ。冑をば郎等に持たせて歩み出でたる體。樊噲も斯くやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも劣らざれば堅き陣を破ること吳子孫子が難しとする所を得。弓は養由をも恥ぢざれば天を翔る鳥地を走る獸怖れずと云ふことなし。上皇を始め參らせて有らゆる人々。音に聞ゆる爲朝見むとて舉り給ふ。左府(頼長)則合戦の趣計らひ申せと宣ひければ。畏つて。爲朝久しく鎮西に居住仕つて九國の者ども從へ候ふに附いて大小の合戦數を知らず。中にも折角の合戦二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて強陣を破り或は城を攻めて敵を止すにも。皆利を得ること夜撃に若くこと待らず。然れば唯今高松殿に押し寄せ。三

方に火を懸け一方にて支へ候はむに。火を遁れむ者は矢を免るべからず。矢を恐れむ者は火を遁るべからず。主上の御方心憎くも候はず。但兄にて候ふ義朝などこそ駈け出でむすらめ。其も眞中指して射通し候ひなむ。まして清盛などがへろへろ矢何程の事が候ふべき。鎧の袖にて拂ひ蹴散らして捨てなむ。行幸他所へ成らば御許されを蒙つて御供の者少く射むする程ならば。定めて駕輿丁も御輿を捨て、逃げ去り候はむすらむ。其の時爲朝參り向ひ行幸を此の御所へ成し奉り。君を御位に即け進らせむこと掌を反す如くに候ふべし。主上を迎へ進らせむこと爲朝矢二つ三つ放さむするばかりにて。未天の明けざらむ前に勝負を決せむ條何の疑か候ふべきと。憚る所もなく申したりければ。左府。爲朝が申す様以ての外の荒儀なり。歳の若きが致す所か。夜撃など云ふ事汝等が同士軍十騎二十騎の私事なり云々と仰せられければ。爲朝上には承伏申して御前を罷り立ちて眩きけるは。和漢の先蹤朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば。合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに。道にもあらぬ御計らひ如何あらむ。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば。定めて今夜寄せむとぞ仕り候ふらむ。明日までも延べばこそ吉野法師も奈良大衆も入るべけれ。唯今押し寄せて風上に火を懸けたらむに

は。戦ふともいかでか利あらむや。敵勝つに乗る程ならば誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかなとぞ申しける。

(保元物語)

本の鎮西八郎……

作者不詳

十一日(保元元年七月)の寅の刻に。官軍既に院の御所(白河殿)へ押し寄する。(中略)白河殿には。斯くとも知しめさざりしかば。左大臣殿(頼長)武者所の親久を召されて。内裏の様見て参れと仰せければ。親久即ち馳せ歸り。官軍既に寄せ候ふと申しも果てねば。先陣既に馳せ来る。其の時鎮西八郎申しけるは。爲朝が千度申しつるは爰候ふ爰候ふと。忿りけれども力及ばず。爲朝を勇ませむ爲にや。俄に除目行はれて。藏人たるべき由仰せけり。八郎是は何と云ふ事ぞ。敵既に寄せ来る。方々の手分をこそ爲られんすれ。唯今の除目物騒なり。人々は何にもなり給へ。爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせむ。只本の鎮西八郎にて候はむとぞ申しける。

(保元物語)

弓

勢……

作者不詳

新院の御所にも。敵既に西南の河原に鯢波を作つて攻め來れば。爲義以下の武士。各固めたる門々より駆け出でけり。判官(爲義)が手には。四郎左衛門頼賢と八郎爲朝と先陣を争ひて。既に珍事に及ばむとす。頼賢思ひけるは。今子供の中には我こそ兄なれば。今日の先陣をば誰かは駆けむと云ふ。爲朝は又。恐らくは弓矢取りても打物取りても。我こそあらめ。其の上判官も軍の奉行を仕らせらるゝ上は。我こそあらめと論じけるが。暫く思案して。兄達をも蔑にするえせ者とて。親に不興せられしが。偶勘當赦されたる身の。父の前にて兄と先を論ぜむこと悪しかりなむと思ひければ。所詮誰々も駆けさせ給へ。強からむ所をば幾度も承りて支へ奉らむとぞ申しける。

安藝守(清盛)は二條川原の東堤の西に向ひて控へたり。其の勢の中より五十騎ばかり先陣に進んで押し寄せたり。爰を固め給ふは誰人ぞ名のらせ給へ。斯う申すは守藝の守殿の郎等に。伊勢の國の住人古市伊藤武者景綱。同じき伊藤五伊藤六とぞ名のりける。八郎是を聞き。汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども。時代久しくなり下れり。源氏は誰かは知らぬ。清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代。八幡殿の孫六條判官爲義が八男鎮西八郎爲朝ぞ。景綱な

らば引き退けとぞ宣ひける。景綱下藤の射る矢立つか立たぬか御覽ぜよとて。能つ引いて。射たれども。爲朝是を事ともせず。合はぬ敵と思へども。汝が詞の優しきに矢一つ給はらむ。受けて見よ。且は今生の面目。又は後生の思出にもせよとて。三年竹の節近なるを少し押し磨いて。山鳥の尾を以て作きたるに。七寸五分の丸根の篋中過ぎて篋代のあるを打ち食はせ。暫し保つてひようと射る。真先に進んだる伊藤六が胸板かけず射透し。餘る矢が伊藤五が射向の袖に裏返してぞ立つたりける。六郎は矢場に落ちて死にけり。伊藤五此の矢を折りかけて。大將軍(義朝)の前に参つて。八郎御曹子の矢御覽候へ。凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬと申せば。安藝守を始めて。此の矢を見る兵共。皆舌を振つてぞ恐れける。

(保元物語)

遠

慮

作者不詳

爲朝寶莊嚴院の西裏にて返し合せて。火出づる程ぞ戦うたる。大將は赤地の錦の直衣に。黒絲威の鎧に鍬形打つたる冑を着。黒馬に黒鞍置いて乗つたりけり。鎧踏ん張り突つ立ち上り。大音揚げて。清和天皇九代の後胤下野守源義朝。大將軍の勅令を蒙

つて罷む向ふ。若し一家の氏族ならば。速に陣を開いて退散すべしとぞ宣ひける。爲朝聞きも敢へず。嚴親判官殿院宣を蒙り給ひて。御方の大將軍たる其代官として。鎮西八郎爲朝一陣を承つて堅めたりとぞ答へける。義朝重ねて。さては遙の弟ござんなれ。汝兄に向つて弓引かむこと冥加なきにあらずや。且は宣旨の御使なり。禮儀を存せば弓を伏せて降参仕れとぞ申されける。爲朝又。兄に向つて弓引かむが冥加なしとは理なり。正しく院宣を蒙つたる父に向つて弓引き給ふは如何にと申されければ。義朝道理にや詰められけむ。其の後は音もせず。武藏相模のはやり男の者どもが。驀地に撃つてかゝるを。爲朝暫し支へて防ぎけるが。敵は大勢なり。驅け隔てられては判官の爲悪しかりなむと思ひて。門の中へ引き退く。敵是を見て防ぎ兼ねて引くとや思ひけむ。勝つに乗つて門の隙まで攻めつけて。入れ替へ入れ替へ揉うたりけり。爰に爲朝敵の勢ごしに見れば。大將義朝大の男の大なる馬には乗つたり。人に勝れて軍の下知せむとて突つ立ち舉りたる内冑。實に射能けに見えければ。願ふ所の幸得たりと悦んで。件の大矢を打ち交ひ。唯一矢に射落さむと打ち舉げけるが。待て暫し。弓矢取る身の謀。汝は内の御方へ参り。我は院方へ参らむ。汝負けば憑め。助けむ。我負

けば汝を憑まむなど約束して。父子立ち別れてかおはすらむと思案して。交ひたる矢を差し脱す。遠慮の程こそ神妙なれ。惣べて八郎の矢に中る者。助かる者ぞなかりける。

(保元物語)

横 笛

横笛と齋藤瀧口時頼と相思ふ。時頼の父茂頼之を惡む。時頼遂に出家す。横笛之を戀ひ。時頼入道を嵯峨に訪ふ。入道會せずして高野に入る。横笛思慕して遂に死す。

嵯峨のあくがれ

信濃前司行長(俗傳)

三條の齋藤左衛門茂頼モチヨリが子に。齋藤瀧口時頼とて。本は小松殿の侍たりしが。十三の年本所へ参りたり。建禮門院の雜司横笛といふ女あり。瀧口是に最愛す。父この由傳聞て。世にあらん者の婚子ムコゴにもなし。出仕などををも。心安うせさせんと思ひ居たれば。由なき者を思初てなど。強ツナガチに諫めければ。瀧口申けるは。西王母と謂し人も。昔

は有て今は無し。東方朔と聞し者も。名をのみ聞て目には見ず。老少不定の境は。唯石火の光に異らず。縦ひ人長命といへ共。七十八をば過ぎず。其の中に身の盛なる事は。僅に二十餘年なり。夢幻の世の中に。醜き者を片時も見て何かせん。思はしき者を見んとすれば。父の命を背くに似たり。是善智識なり。しかず浮世を厭ひ。實の道に入なんとて。十九の年髻切りて。嵯峨の往生院に行澄してぞゐたりける。横笛此由傳へ聞て。我をこそ捨め。様をさへ變へけん事の恨めしさよ。縦ひ世をば背く共などかは角と知らせざらん。人こそ心恐く共。尋ねて恨んと思ひつゝ。或暮方に都を出で。嵯峨の方へぞあくがれける。此は二月十日餘りの事なれば。梅津の里の春風に餘所の匂ひなつかしく。大井河の月影も。霞にこめて朧なり。一方ならぬ哀さも。誰故とこそ思ひけめ。往生院とは聞つれ共。さだかに何れの坊共知らざれば。爰に徘徊ヤスラひ彼カレコにイみ。尋ね兼るぞ無慚なる。住荒したる僧坊に。念誦の聲しけるを。瀧口入道が聲と聞澄して。御様の變りて坐すらんをも見もし見えまらせんが爲に。わらはこそ是迄參て候へと。具したる女に言はせければ。瀧口入道。胸打騒ぎ。淺ましさに。障子の隙より覗きて見れば。裾は露。袖は涙に打萎れつゝ。少し面瘦たる顔ばせ。誠に

尋ね兼たる有様。如何なる大道心者も。心弱うなりぬべし。瀧口入道。人を出いて。全く是にはさる人なし。若門違へにてもや候らんと言はせたりければ。横笛情なう恨めしけれ共力及ばず。涙を抑へて歸りけり。其後瀧口入道。同宿の僧に語りけるは。是も世に閑シヅカにて。念佛の障碍は候はね共。あかで別れし女に。此栖居を見えて候へば。縦ひ一度は心強く共又慕ふ事あらば。心も動き候なんす。暇申すとて。嵯峨をば出て高野へ上り清淨院に行ひ澄してぞるたりける。横笛も聽て様を變ぬる由聞えしかば。瀧口入道一首の歌をぞ送りける。

そる迄は恨みしか共梓弓まことの道に入ぞ嬉しき

横笛が返事に。

そるとても何か恨みん梓弓引きとむべき心ならねば

其後横笛は。奈良の法華寺に有けるが。其思ひの積りにや。幾程なくて遂にはかなく成にけり。

(平家物語)

池 禪 尼

從四位上少納言藤原宗兼の女。刑部卿平忠盛の後妻となりて。家盛頼盛を生めり。

愛 念 慈 念

作者 不詳

さる程に兵衛佐(頼朝)は未だ宗清が許におはしければ。尾張守(頼盛)より丹波の藤三國弘と云ふ小侍一人隨けられけり。既に今日明日誅せられ給ふべしと聞えしかば。宗清御命助からむとは思しめし候はずやと申せば。左殿。去ぬる保元に多くの伯父親類を失ひ。今度(平治)の合戦に父討たれ兄弟皆失せぬれば。僧法師にもなりて父祖の後世を弔はゞやと思へば。命は惜しきぞと宣へば。宗清も哀に覺えて。尾張守の母池の禪尼と申すは清盛の爲には繼母にておはせども。重く執し給へば。彼の方などにつきて申させ給はゞ。若し御命助かりおはしますことも候ふべきものを。彼の尼は若きより慈悲深き人にて御渡り候ふ。其の上一日参りて候ふ時。おのれが許に頼朝があなる。如何なる者ぞと問はせ給ひしかば。御年の程より殊の外穩順オトナしやかに候ふ。其の姿右馬の助(家盛)殿に甚く似まるらせ給ひて候ふと申しゝかば。世に床しけに思しめ

したる御氣色にてこそ候ひしかと語り申しければ。其も誰人か申して給ふべきと宣へば。さも思しめし候はゞ。適はぬまでも某申して見候はむとて池殿へ参り。何者か申して候ふやらむ。上の大慈悲者にておはしますとて。あはれ頼朝が命を申し助けさせ給へかし。父の後世弔はむと申され候ひしが痛はしく候ふ。然るべきやうに御計らひ候へかしと申せば。そも頼朝に尼を慈悲者とは誰か知らせける。いざとよ。故刑部卿(忠盛)の時は多くの者を申し赦しゝが。當時は如何侍らむ。さても右馬の助に甚く似たらむ無慙さよ。家盛だにあらば。鳥になりて雲を凌ぎ魚になりて水にも入り。實に來世にても逢ふべくは唯今死しても行かむと思ふぞとよ。さて何日斬るべきに定まりたるぞと宣へば。十三日とこそ聞え候へと申せば。適はぬまでも申してこそ見めとて。小松殿(重盛)其の時の勳功に伊豫守になり給ひしが。正月より右馬の頭に轉じ給へるを呼び奉りて。頼朝が尼に就きて。命を申し助けよ父の後世を弔はむと申すなるが。餘りに不便に侍る。宜きやうに申して給へ。殊に家盛が幼だちに少しも違はずと聞かば懐かしくこそ侍れ。右馬の助は其の御爲にも叔父ぞかし。頼朝を助けて家盛が紀念に尼に見せ給へと宣ひければ。重盛参りて父に此由申されけり。清盛聞きて。池殿の

御事は故殿(忠盛)の渡らせ給ふと思ひ奉れば。如何なるあま逆さまの仰なりとも違ふまじとこそ存ずれども。此の事はゆゑしき重事なり。伏見中納言越後の中將などがやうなる者をば何十人助け置きたりとも大事あるまじ。大抵弓矢取る者の子孫は其には異なるべき上。義朝などが子供幼けれども仔細あるべき者を。殊に頼朝は官加階も兄に超ゆるはゆゑしき所があるにや。父も見咎め侍ればこそ重代の中にも取り分き秘藏の物の具など與へけめ。旁助け置き難きものをとて以ての外の氣色なり。左馬の頭歸り参りて。適ひ難き題目なるよし申されければ。池殿涙を流して。あはれ戀しき者かな。忠盛の時ならば是程に軽くは思はれ奉らじ。一門の源氏皆滅び侍り。彼の幼き者一人助け置かれたりとも如何ばかりの事か侍らむ。前世に頼朝に助けられける故やらむ。聞くより痛はしく不便に侍るぞとよ。御身を疎とは思ひ奉らねども。一つは使がらと申す事の侍れば。など忠實にうち口説きて尙適はずして終に失はれば。尼が効なき命生きて何かせむ。其の上右馬の助が面影に似たりと聞くより何時しか家盛が事思はれて。はたと胸塞がり湯水も快く飲まれねば。自ら久しかるべしとも覺え候はず。あはれ尼が命を生かさむと思しめさば。兵衛佐を助けて給へかしと歎き給へば。重盛

も惑迷せられけるが。涙を抑へて。さ候はゞ今一度御説の趣を申してこそ見候はめ。同じく尾張殿をも添へ申され候へ。諸共に仰の由委しく語り候はむとて。頼盛と共に重ねて此の山を申されければ。清盛もさすが岩木ならねば案じ煩はれけるに。重盛女性の弱き御心に思ひ沈みて申させ給ふことを。さのみは如何仰せ候ふべき。然るべき御計らひも候はずば御怨深く候ふべし。彼の頼朝一人誅せられ候ふとも。盡きむ御果報の長久なるべきにあらず。當家の運末にならば諸國の源氏孰か敵ならざらむ。又助け置かれたりとも榮耀後輩に及ぶべくは何の恐か候ふべきと。理を盡して申されければ。先づ十三日をば延べられて。確の返事はなかりけり。(中略)宗清感じ奉りて小卒都婆百本造りて奉る。自ら遣立書寫して或る僧に註へて。形の如く供養の儀を遂けられける。池殿斯様の事どもを聞き給ひて。彌痛はしく思しめしければ。さまざまに申されて流罪にぞ定まりける。さても頼朝は伊豆國へ流されければ。池殿兵衛佐を召されて。泣く泣く宣ひけるは。昨日までも御事故に心を碎きつるが。配州定まりて流され給ふべきなり。尼は若きより慈悲深き者にて。多くの者ども申し助けたりしかども。今は斯る老尼の申すこと適ふべしとも覺えざりしが。左馬頭によく申されて。既に命

の助かり給ふことの嬉しさよ。今生の喜之に過ぎたることなしと口説き給へば。頼朝御恩に依りて效なき命を助けられ進らせ候ふ事。生々世々にも報じ盡し難くこそ候へ其に就きて遙々と罷り下り侍らむ道すがら。我方さまの者一人も候はねば如何仕るべきと申されければ。誠に其も痛はし。親祖父の時より召し仕はるゝ者も。世に恐れてこそ隠れ居てこそ侍らめ。今は宥められぬと披露をなして御覽せよかしと。計らはれしかば頓て其の由風聞するに。侍少々出で來たり。(中略)永暦元年三月二十日。既に伊豆の國へ下られければ。池の禪尼へ暇申しに參られけり。禪尼倩御覽じて。不思議の命を助け奉る志思ひ知り給はゞ。尼が詞の末を少しも違へず。弓箭太刀刀。獵漁など云ふこと耳にも聞き入れ給ふべからず。人の口は善悪なきものなれば。御身も二度事に遭ひ。尼にも重ねて憂き耳聞かせ給ふなど細々と宣へば。頼朝も今年十四なれば。云へば幼稚なれども。人の志の眞實なるを思ひ知りて。涙に咽び袖も絞るばかりにておはしけるが。稍ありて。父母に後れ候ひて後は哀をかくべき人も侍らぬに。懇の御志有り難くこそ候へとて。頻に泣き沈み給へば。禪尼も眞にさこそと心中推し量られて。人は能く親の孝養志深きが冥加もあり。命も長らふべきことにてあるぞとよ。經

をも讀み念佛をも申して。父母の後世を弔ひ給ふべし。尼は子と思ひて斯やうにも申すなり。其の故は尼が子に右馬助家盛とて候ひしぞとよ。其が佛に能く似給ひたれば。いとほしく思ふなり。何事につきても思ひ出さぬ時もなきに。御事さへうち添へて涙を流し心を盡しつるに。先嬉しくこそ侍へ。御身は行末遙なり。尼は明日をも知らぬ身なれば。名残こそ惜しく侍へと心苦しけにうち歎き給へば。佐殿も忠實なる志の程を思ふにも。如何にして此の恩を報せむとも覺えず。終夜泣きこそ明されけれ。三月二十一日の曉池殿を出でて東路遙に下られけり。

(平治物語)

平重盛

清盛の子。清盛上皇を幽せんとす。重盛諫めて之を止め。遂に官を辭し。

死を熊野に祈る。薨ずる時年四十三。時人稱して小松殿又は小松内府といへり。

熊野詣

信濃前司行長(俗傳)

同じき(治承三)夏の頃。小松の大臣は斯様の事共に萬心細くや思されけむ。其の頃熊野參詣の事ありけり。本宮證誠殿シモツシヤウヂの御前にて靜に法施參らせて。終夜敬白せられけるは。親父入道相國の體を見るに。惡逆無道にして動もすれば君を惱まし奉る。其舉動フルマヒを見るに一期の榮華尙危し。重盛長子として頻に諫を致すといへども。身不肖の間彼以て服膺せず。枝葉連續して親を顯し名を揚げむこと難し。此の時に當つて重盛苟イヤしうも思へり。怒に列して世に浮沈せむこと敢て良臣孝子の法にあらず。如シかす名を遁れ身を退いて今生の名望を投げ捨て、來生の菩提を求めむに。但凡夫薄智是非に惑へるが故に志を尙恣にせず。南無權現金剛童子。願はくは子孫繁榮絶えずして仕へて朝廷に交るべくば。入道の惡心を和けて天下の安全を得しめ給へ。榮耀又一期を限つて後昆恥に及ぶべくば。重盛が運命を縮めて來世の苦輪を助け給へ。兩箇タツツの求願偏に冥助を仰ぐと。肝膽を摧いて祈念せられければ。燈籠の火のやうなる物の。大臣の御身より出で、はつと消ゆるが如くして失せにけり。人數多見奉りけれども恐れて是を申さず。大臣下向の時岩田河を渡られけるに。嫡子權亮少將維盛已下の公達。淨衣ジヤウイの下に薄色の衣を着て。夏の事なれば何となう水に戯れ給ふ程に。淨衣の濡れて衣に

映りたるが偏に色の如くに見えけるを。筑後守貞能是を見咎めて。何とやらむ彼の御淨衣の世に忌はしけ見えさせましまし候ふ。急ぎ召し更へさるべうもや候ふらむと申しければ。大臣。さては我が所願既に成就しにけり。敢て其の淨衣改むべからずとて。岩田河より熊野へ別して悦の奉幣をぞ立てられける。人怪しと思へども尙其の心をば得しめ給はず。然るに此の公達程なく頓て。眞實の色を著給へるこそ不思議なれ。大臣下向の後幾くの日數を経ずして病つき給ひぬ。權現既に御納受あるにこそとて。療治をもし給はず。況て祈禱をも致されず。其頃宋朝より勝れたる名醫渡つて本朝に徘徊ふことありけり。折節入道相國は福原の別業におはしけるが。越中前司盛俊を使者にて小松殿へ宣ひ遣されけるは。所勞彌大事なるよし其の聞あり。兼ねては又宋朝より勝れたる名醫渡れり。折節是を悦とす。仍つて彼を召し請じて醫療を加へしめ給へと宣ひ遣されたりければ。大臣扶け起され。盛俊を御前へ召して對面あり。先醫療の事畏つて承り候ひぬと申すべし。但汝も能く承れ。延喜の帝はさばかりの賢王にて渡らせ給ひしかども。異國の相人を都の中へ入れられたりし事をば。末代までも賢王の御誤本朝の恥とこそ見えたれ。況や重盛程の凡人が異國の醫師を王城へ入れむこと全

く國の恥に非ずや。漢の高祖は三尺の劍を提けて天下を治めしに。淮南の黥布をちし時流矢に中つて疵を被る。后呂太后良醫を迎へて見せしむるに。醫の曰く。此の疵治しつべし。但五十斤の金を與へば治せむと云ふ。高祖曰く。我守強かつし程は。多くの鬪に逢うて疵を蒙りしかども其の痛なし。運既に盡きぬ。命は則天に在り。扁鵲と云ふとも何の益かあらむ。然れば又金を惜むに似たりとて。五十斤の金を醫師に與へながら遂に治せざりき。先言耳に在り今以て甘心す。重盛苟くも九卿に列し三台に昇る。其の運命を計るに以て天心に在り。何ぞ天心を察せずして愚に醫療に痛はしうせんや。所勞若定業ならば醫療を加ふるとも益なからむか。又非業たらば療治を加へずとも助かることを得べし。彼の耆婆が醫術及ばずして大覺世尊減度を跋提河の邊に唱ふ。是則ち定業の病癒さざる事を示さむが爲なり。治するは佛體なり療するは耆婆なり。定業若醫療に拘はるべう候はゞ豈釋尊入滅あらむや。定業尙治するに堪へざる旨明けし。然れば重盛が身佛體にあらず名醫亦耆婆に及ぶべからず。縱令四部の書を鑑みて百療に長すと云ふともいかでか有待の穢身を救療せむ。縱令又五經の説に詳にして衆病を癒すと云ふも豈先世の業病を治せむや。若彼醫術に依つて存命せば本朝の

醫道なきに似たり。醫術效驗なくば面謁所詮なし。就中本朝鼎臣の外相を以て異朝富有の來客に見えむこと。且うは國の恥且うは道の陵遲なり、縱令重盛命は亡すと云ふともいかでか國の恥を思ふ心を存せざらむ。此の由を申せとこそ宣ひけれ。盛俊泣く泣く福原へ馳せ下り此の由を申しければ。入道相國。國の恥思ふ大臣上古に聞えず。況て末代にあるべしとも覺えず。日本に相應せぬ大臣なれば如何やうにも今度失せられなむすとて。急ぎ都へ上られけり。七月二十八日小松殿出家し給ひぬ。法名は淨蓮とこそ附き給へ。頓て八月一日の日臨終正念に住して失せ給ひぬ。御年四十三。世は盛とこそ見えつるに哀なりし事どもなり。入道相國のさしも横紙を破られしにも。此の人のおはして様々に宥め宣ひつればこそ世は今日までも穩しかりつれ。此の後天下に如何許の事か出で來むすらむとて上下皆歎き合へり。又前右木將宗盛卿の方さまの人人。世は唯今大將殿へ参りなむすとて勇み悦び合はれけり。人の親の子を思ふ習は愚なるが先立つだにも悲しきぞかし。況んや是は當家の棟梁當世の賢人にてまませば。恩愛の別家の衰微悲んで尙餘あり。されば世には良臣を失へることを歎き。家には武略の廢れぬることを悲む。凡は此の大臣文章麗しうして心に忠を存し。才藝勝れて詞

に徳を兼ね給へり。

(平家物語)

源 頼 政

兵庫頭仲政の子。薙髮して眞蓮と改め。源三位入道とよぶ。以仁王に説きて令旨を四方に發して平氏を討ち。事泄れ。戰敗れて宇治平等院に自殺す。

武

技

………信濃前司行長(俗傳)

抑此の源三位入道頼政は攝津守頼光に五代。參河守頼綱が孫兵庫頭仲正が子なりけり。保元の合戦の時も御方にて先を懸けたりしかども。させる賞にも預らず。又平治の逆亂にも既に親類を捨て参じたりしかども恩賞是疎略なりき。大内守護にて年久しうありしかども昇殿をば許されず。年闋け齡傾いて後述懐の和歌一首詠みてこそ昇殿をばしたりけれ。

人知れず大内山の山守は木隠れてのみ月を見るかな

是に依て昇殿聽され。正下の四位にて暫くありしが。尙三位を心にかけてつゝ。

源頼政

四三九

上るべき便なき身は木の下にしるを拾ひて世を渡るかな

四四〇

さてこそ三位はしたりけれ。やがて出家して源三位入道頼政とて今年は七十五にぞなられける。此の一人一期の高名と覺しき事は多き中にも。殊には仁平の比ニホホ近衛院御在位の御時。主上夜々魘えさせ給ふことありけり。有驗の高僧貴僧に仰せて大法秘法を修せられけれども其の驗なし。御惱は丑の刻許の事なるに。東三條の森の方より黒雲一叢立ち來て御殿の上に覆へば必ず魘えさせ給ひけり。是に依て公卿會議ありけり。去ぬる寛治の比堀川院御在位の御時主上然の如く魘え魂ぎらせ給ひけり。其の時の將軍義家朝臣南殿の大床に候はれけるが。御惱の刻限に及んで鳴弦すること三度の後。高聲に前陸奥國守源義家と名のりたりければ。聞く人身の毛豎コガつて御惱必怠らせ給ひにけり。然れば則先例に任せて武士に仰せて警固あるべしとて。源平兩家の兵の中を選ませられけるに此の頼政をぞ選び出されたりける。其の時は未兵庫頭にて候はれけるが申されけるは。昔より朝家に武士を置かるゝことは。反逆の者を退け違勅の輩を亡さむが爲なり。目にも見えぬ變化の物仕れと仰せ下さるゝ事未承り及ばすと申しながら。勅宣なれば召に應じて參内す。頼政憑みきつたる郎等遠江國の住人猪早太に。

母衣の風切作いだりける矢負はせて唯一人ぞ具したりける。我が身は二重の狩衣に山鳥の尾を以つて作いだりける鋒矢トガ二筋滋藤の弓に取り添へて南殿の大床に伺候す。頼政矢二つ手挟みけることは。雅頼卿其の時は未左少辨にておはしけるが。變化の物仕らむする仁ニは頼政ぞ候ふらむと選び申されたる間。一の矢にて變化の物射損する程ならば二の矢には雅頼の辨のしや頸の骨を射むとなり。案の如く日來人の申すに違はず。御惱の刻限に及んで東三條の森の方より黒雲一叢立ち來て御殿の上に黓クいたりたり。頼政きつと見上げたれば雲の中に怪き物の姿あり。射損する程ならば世に在るべしとも覺えず。さりながら矢取つて番ひ南無八幡大菩薩と心の中に祈念して。能引ヨッピいてひやうと放つ。手答してはたと中る。得たりやおうと矢叫をこそしてんけれ。猪早太つと寄り落つる所を取て押へ。柄も拳も透れ透れと續けさまに九刀ぞ刺いたりける。其の時上下手々に火を點トキして之を御覽じ見給ふに。頭は猿軀は狸尾は蛇手足は虎の如くに鳴く聲鶴にぞ似たりける。怖しなどもおろかなり。主上御感の餘に獅子王と申す御劍を下さる。宇治左大臣殿頼長是を賜はり次で頼政に賜はむとて。御前の階を半許ナカウ下りさせ給ふ折節。比は卯月十日餘のことなれば雲居に郭公二聲三聲音信て通りけれ

源頼政

四四一

ば。左大臣殿。

四四二

郭公名をも雲居にあぐるかな

と仰せられかけたりければ。頼政右の膝をつき左の袖を廣げて月を少し傍目にかけてつ。

弓はり月のいるにまかせて

と仕り御剣を賜はりて罷り出づ。此の頼政卿は武藝にも限らず歌道にも亦勝れたりとぞ時の人々感じ合はれける。俣彼の變化の物をば空船ウツボネに入れて流されけるとぞ聞えし。又應保の比コホホヒ二條院御在位の御時。鶴と云ふ化鳥禁中に鳴いて屢宸襟惱し奉る事ありけり。然れば先例に任せて頼政をぞ召されける。比は五月二十餘日まだ宵の事なるに。鶴唯一聲音信て二聲とも鳴かざりけり。目指すとも知らぬ闇ではあり姿形も見えざりければ。矢所ヤツボを何處とも定め難し。頼政が計略ハカリゴトに先大鎬取つて番ひ。鶴の聲したりける内裏の上へぞ射上げたる。鎬鶴の音に驚いて虚空に暫しひゝめいたる。次に小鎬取つて番ひ。ひいふつと射切つて鶴と並べて前にぞ落したる。禁中ざゝめき渡つて頼政に御衣を被けさせおはします。今度は大炊御門右大臣公能公是を賜はり次で頼政に被

けさせ給ふとて。昔の養由は雲の外の鴈を射き。今の頼政は雨の中を鶴を射たりと感ぜられける。

五月闇名をあらはせる今宵かな

と仰せられかけたりければ。頼政。

たそがれ時も過ぎぬと思ふに

と仕り御衣を肩に懸けて罷り出づ。其の後伊豆國賜はり子息仲綱受領になし。我が身三位して丹波の五個の庄若狭の東宮河を知行してさておはすべかりし人の。由なき謀叛起いて宮をも失ひ參らせ我が身も子孫も亡びぬるこそうたてけれ。(平家物語)

文

事

葉室時長(俗傳)

殊に名を揚げ面目を施しける事は。鳥羽院の御内に菖蒲前とて世に勝れたる美人あり。心の色深うして容貌カタチ人に超えたりければ。君の御いとほしみも類なかりけり。雲客卿相始は艶書を遣し情をかくること隙なかりけれども。心に任せぬ我身なれば一筆の返事何方へもせで過ぐしける程に。或時頼政菖蒲を一目見て後は。何時も其の時の

源頼政

四四三

心ちして忘るゝ事なかりければ。常に文を遣しけれども一筆一詞の返事もせず。頼政懲りすまに又遣し遣しななどする程に年も三年になりにけり。如何にして漏れたりけむ此の由を聞しめすに依て。君菖蒲を御前に召し。實や頼政が申言の積るなると論言ありければ。菖蒲顔うち赤めて御返事詳ならず。頼政を召して御尋あらばやとて御使ありて召されけり。比は五月の五日の片夕暮計なり。頼政は木賊色の狩衣に華やかに引き繕ひて參上。縫殿の正見まかの板に畏つて候す。院は良暫くして御出ありけるが。實法の者には物仰せ悪ければとて殊に笑を含みておはします。何事を仰せ出されむするやらむと思ふ所に。眞か頼政菖蒲を忍び申すなると御説あり。頼政大に色を失ひ恐れ畏つて候ひけり。院は憚り思ふにこそ勅説の御返事は遅かるらめ。但菖蒲をば黄昏時の虚目か。又立ち舞ふ袖の追風を餘所ながらこそ慕ふらめ。何かは近づき其の驗をも辨ふべき。一目見たりし頼政が眼睛を見ばやとぞ思しめしける。菖蒲が年長色貌少しも替らぬ女二人に菖蒲を具して。三人同じ装束同じ襲かみになり見すまさせて出されたり。三人頼政が前に列み居たり。梁の鸞の竝べるが如く窓の櫻の綻びたるに似たり。頼政よ。其の中に忍び申す菖蒲侍るなり。朕思し召す女なり。御免あるぞ相具して罷

り出でよと論言ありければ。頼政いと色を失ひ額を大地につけて實に畏り入りたり。思ひけるは。十善の君量なく思し召さるゝ女を凡人いかでか申し寄るべかりける。其の上縦雲ウツクモの上に時々ヨリヨリなると云ふとも愚なる眼睛マナコ及びなむや。況して餘所ながら仄見たりし貌なり。何を驗何ぞなるらむとも覺えず。論言を蒙り。賜はざるも尾籠なり。見紛ひつゝ他の袂を引きたらむもをかしかるべし。當坐の恥のみに非ず累代の名を下し果てむ事心憂かるべきにこそと。歎き入りたる氣色顯なりければ。重ねて勅説に。菖蒲は實に侍るなり疾く給はりて出でよとぞ仰せ下されける。御説終らざりける前に掻き繕ひて頼政かく仕る。

五月雨に沼の石垣水こえていづれか菖蒲引きぞ煩ふ

と申したりけるこそ。御感の餘に龍眼より御涙を流させ給ひながら。御座を立たせ給ひて女の手を御手に取りて引き立ておはしまし。是こそ菖蒲よ。疾く汝に給ふなりとて頼政に授けさせ給ひけり。是を賜はつて相具して仙洞を罷り出でければ。上下男女歌の道を嗜まむ者尤斯くこそ徳をば顯すべけれと各感涙を流しけり。實に頼政と菖蒲とが志水魚の如くにして無二の心中なりけり。三年の程心長く思ひし情の積りにやと

優しかりし事どもなりければ。京童申しけるは。二人の志わりなかりけるこそ道理なれ。媒が甚く見苦しくもなければとぞ咲ひける。伊豆守仲綱は即彼の菖蒲が腹の子なり。

(源平盛衰記)

平 清 盛

忠盛の子。從一位太政大臣に至り。入道して淨海と呼ぶ。養和元年熱病に罹りて薨す。年六十四。

信.....源 光 圀

平清盛は刑部卿忠盛の長子なり。母は白河帝の宮女なり。帝出して忠盛に賜ふ。清盛を生む。長じて穎悟。姿貌美はし。忠盛後藤原宗兼の女を娶りて子有り。故を以て清盛出で、宗兼の甥藤原家成に依る。大治四年從五位下に叙し。左兵衛佐に任ぜらる。保延中中務大輔に遷り。肥後守を兼ね。從四位上に累進す。久安二年正四位下に進み。安藝守に任ず。將に熊野の社に詣でんとす。路伊勢阿濃津を經。鱸魚有り躍つて舟中

に入る。人之を賀して曰く。昔白魚周武の舟に入り。以て嘉瑞と爲す。今公之を獲たり。豈神の眷佑する所に非ずやと。清盛喜び手自ら之を割き。從者と共に食ふ。保元元年上皇の兵を白河北殿に集むるや。清盛叔父右馬助忠正及び源爲義召に應ず。初め鳥羽帝豫め亂の作るを知り。親ら下野守源義朝以下十人の姓名を書し守禦に備ふ。清盛其の父上皇の命を奉じ妻をして重仁親王を乳養せしむるの故を以て預らず。然れども其の彊宗世將たるを以て。美福門院遺詔と稱して之を召す。乃ち義朝と兵を帥ゐて北殿を攻む。北殿敗るゝに及び。清盛に勅して爲義を捕ふ。清盛搜索未だ得る能はず。爲義忠正窘迫して出で降る。忠正清盛に就いて死を宥さるゝを乞ふ。清盛雅モトより之と協はず。且つ其意に以爲らく。我忠正を斬らば。朝廷必義朝をして爲義を斬らしめん。朝議若し之を宥さば。我則ち叔父を斬るを以て固く争はんと。遂に忠正を殺す。義朝も亦爲義を殺せり。清盛功を以つて播磨守に任ず。尋いで太宰大貳に叙せらる。平治元年冬。右衛門督藤原頼胤を作す。義朝清盛と隙有るを以て。誘はれて謀主と爲る。清盛の熊野に詣づるをウカ伺ひ。兵を發して皇居を犯す。清盛切部に至る。子弟六波羅より使を聘せて變を告ぐ。清盛將に京師に歸らんとす。兵士の寡弱なるを患ひ。使を熊

野別當湛増及び湯淺宗重に遣はして兵を徵す。伊勢の伊藤加藤の族兵を率ゐて來り迎ふ。安部野に遇ふ。衆皆踊躍して遂に京師に入る。先づ稻荷社に詣で、衆をして杉枝を折り鎧袖に挿さしむ。已に六波羅に至る。時に信賴入つて禁内に居り。將士を分つて宮門を守る。清盛名簿を信賴に致し。伴りて他志無きを示す。檢非違使別當藤原惟方。非藏人藤原尹明を遣はして陰に清盛と謀る。夜火を二條大宮に放つ。賊兵宮門を棄て、去き救ふ。是に於いて帝潛に婦人の車に乗じて。藻壁門を出で。六波羅の第に幸す。清盛騎兵三百餘を遣はして乘輿を迎ふ。公卿百官相踵いで至る。關白基實亦至る。基實は信賴の妹婚なり。人皆之を疑ふ。藤原公教清盛を顧みて曰く。關白來る。之を如何と。清盛曰く。攝籙の臣、來らずんば則ち召す可し。今其の來る。固より其れ宜なりと。衆皆其の對を善とす。帝清盛を召し諭して曰く。今宮城新に成る。汝將士をして伴り走つて弱を示さしめよ。賊必兵を悉くして出で、鬪はん。因つて速に入つて之に據り。宮城をして兵燹に罹らしむる無れと。清盛曰く。信賴逆賊。臣の掌握に在り。其の兵燹の若きは則ち奈何ともす可き無し。然るに聖旨嚴重なり。敢て力を罄さずんばあらずと。乃ち重盛頼盛等を遣はし。兵を將ゐて之を撃つ。戰酣にして引

き退く。賊果して兵を悉くして之を追ふ。官軍遂に宮城に入る。信賴狼狽出走す。義朝兵を回して更に六波羅を攻む。清盛遽に兜鍪を著す。誤つて倒まに之を戴く。左右之を言ふ。清盛詭辭應じて曰く。至尊此に在り。我之に背くを欲せざるのみと。乃ち北臺に登つて士卒を指麾す。賊兵急に攻む。矢下ること雨の如し。官軍退縮す。清盛叱して曰く。賊をして此處に薄らしむ。何ぞ其の恥無きやと。軍を整へて徐に出で。躬自ら之に當り。士卒をして更に進んで遮戦せしむ。賊軍敗走す。清盛禁内に入り名簿を收めて曰く。昨日は予へぬ今日は取ると。大笑して出づ。信賴既に誅に伏す。帝清盛の子弟の官爵を進む。義朝尾張に走り。平忠致の殺す所と爲る。清盛其の諸子を搜索して。頼朝義經等を獲。之を斬らんと欲す。既に皆之を赦す。是の歳日向太郎通良肥前に反す。清盛勅を奉じて備前平家貞を遣はして之を討つ。永暦元年前後の功を以つて正三位に敘し。尋いで參議に任す。應保長寛の間。右衛門督檢非違使別當を兼ね。權中納言と爲り。從二位に敘し。皇太后宮權大夫兵部卿を兼ね。永萬元年權大納言に任す。此の秋延暦興福の二寺兵を構ふ。京師訛言す。上皇密に詔して清盛を討つと。清盛兵を聚めて守備す。上皇大いに驚き六波羅に幸し。躬自ら開諭す。清病と伴り

出でず。上皇宮に還り。近臣に謂つて曰く。浮言一たび出で。京師動搖す。未だ審にせず言ふ者の誰たるかをと。嬖臣西光進んで曰く。天言ふこと無し。民をして之を言はしむ。驕つて禮無き者は。天の惡む所なり。平氏其れ亡びんかと。坐者默然たり。高倉帝位に即ぐ。其の幼冲なるを以て。上皇復庶務を親らす。清盛の妻は平時子皇太后の姉なり。故を以て勢焰益熾んなり。上皇稍之を惡む。然れども制するを得ず。積憤雍髮し。専ら佛教に歸す。清盛心竊に喜ぶ。仁安元年正二位に敘し内大臣に拜せらる。二年從一位太政大臣に陞り。隨身兵仗を賜はり。輦車して宮中に出入するを聽さる。左右大臣を歴ずして。直ちに太政大臣爲る者は。此より前藤原信長一人に止まる而已。何くも無く上書して太政大臣兵仗輦車を辭す。之を許す。勅して播磨印南野肥前杵島郡肥後御代南郷土比郷等を賜うて。大功田と爲し。之を子孫に傳へ。世々絶ゆる無からしむ。三年疾病。詔して非常の赦を行ふ。剃髮す。法名は清蓮。尋いで淨海と改む。世太政入道と稱す。嘗て別館を西八條に造り。土木を殫し極む。其第多く蓬を藪ゆ。因て蓬壺と號す。又別莊を攝津の福原に營む。亭榭風流。以て四時の觀を窮む。天下の政事一に其の手に出づ。放濫驕溢。上下之を苦む。自ら己を議する者有る

を知り。童子三百人を選び。以て耳目と爲す。髮を截り詭服し。梅枝を執り。小鳥を臂にし。翼に赤幟を著け。禁門に出入して姓名を通ぜず。街市に填滿し。隱伏を伺察す。凡そ見聞する所。皆歸りて之を報す。清盛其の言を聽信し。淫刑濫罰頗る多し。一時之が爲に震懾す。京師の騎乗する者。皆望んで之を避く。孫資盛塗に攝政基房に遇うて車を下らず。基房の從者其の無禮を責めて之を辱しむ。清盛大いに怒つて曰く。攝關の貴と雖。何ぞ我に憚る無きやと。乃ち甲士を路に伏せ。基房の出づるを覘ひ。撃つて其の車を破り。從者の髻を截り以て之に報ゆ。承安元年。清盛其の女徳子を進めて女御と爲す。既にして立つて中宮と爲る。是を建禮門院と爲す。治承元年重盛宗盛兄弟。並びに左右近衛大將と爲る。時に上首者皆怏々として不平なり。法皇の執事權大納言藤原成親亦之を企覲す。得る能はず。因つて西光と謀り。法皇の密旨を以つて。源行綱。平康頼。法勝寺の執行俊寛等と約結して。俊寛の鹿谷の山莊に會し。平氏を滅さんことを謀る。法皇亦之に臨まんと欲す。法印靜賢諫めて止む。初め西光の子藤原師高加賀守たり。孫師經涌泉寺を燒く。白山の僧徒延曆寺に就いて之を訴ふ。法皇座主明雲をして之を和解せしむ。僧徒聽かず。朝議已むを得ず師高等を流す。法

皇悦ばず。西光隙に乗じて明雲を讒して流に處す。清盛嘗て菩薩戒を明雲に受け。約して師弟と爲る。故を以て延曆寺僧徒救を清盛に乞ふ。清盛奏請して之を留めんと欲し。至れば則ち法皇見えす。明雲遂に配所に赴く。僧徒追つて之を奪ふ。法皇怒つて將士に命じて延曆寺を討たしむ。清盛肯て命を奉ぜず。法皇特に成親に勅して兵を集む。成親竊に清盛を討つを謀る。未だ發せず。源行綱約に背き。馳せて福原に詣りて之を告ぐ。清盛大いに驚き。急に京に歸り。檢非違使阿部資成を法住寺殿に遣はし。大膳大夫藤原信業に就き。奏して曰く。成親等臣の家を滅して天下を亂さんと欲す。此れ陛下の知る所に非ざれば。臣將に此の徒を逮捕して事情を窮問せんとすと。法皇錯愕。少くして曰く。朕の知る所に非ざるりと。清盛乃ち西光を收めて拷治し。具に其の實を得たり。使を遣はして成親を誘致す。戎衣を著け。眉尖刀を操り。平貞能に謂つて曰く。我嫉を人に取る。豈官階の分に踰ゆるを以てか。夫れ田村麻呂は苅田麻呂の子なり。然るに東征功を建て。陞つて近衛大將と爲る。其餘軍功を以つて賞を得る者多からずと爲さず。豈我一人のみならんや。昔保元の亂。右馬助已下の親族。多く新院の召に應ず。且つ一言は則ち故刑部卿の奉する所なり。我亦^カ忽然たる能はず。

然るに故院の遺詔を以て。身禁旅に先んじ。禍亂を裁定せり。平治の亂。信賴義朝の兇鋒熾銳なり。此の時に當りて。我が身を忘れ公に奉するに非ざるよりは。國家殆ど危し。亂を撥し難を靖んじ。官家をして今日有らしむる。是れ誰の力ぞや。若此の功を録せば。則ち恩資宜く子孫に及ぶべし。況や我が身に於いてをや。今偏に成親等の讒を信じ。遽に我が門を滅さんと欲す。向に行綱微りせば。我豈晏然を得んや。法皇舉措輕躁此くの如し。他時再び姦計を進むる者有りて。院宣一たび出でなば。則ち我賊名を得。之を悔ゆるとも及ぶ無からん。事に先だち之を圖るに如かず。我今法皇を鳥羽の宮に徙さんと欲す。然らざれば則ち吾が第に幸せしめん。宿衛の士或は枝梧有らば。汝宜く士卒に號令して警備を爲さしむべしと。是に於いて闔族咸く戎服を著し。將士警至す。清盛以謂らく重盛必ず己に従はずと。之を召すを欲せず。然も父子の故を以て乃ち告ぐるに其計を以てす。重盛切に諫む。事遂に寢む。既にして西光を斬り。成親父子及び其の黨を流し。皆遠惡の處に置く。幾くも無く人を遣はして成親を殺さしむ。二年中宮身める有り。是より先清盛其の男を生むを冀りて嚴島社に禱る。月に一たび造る。一夜夢に神后に寶劍を賜うて。其の懷に納れ。復妻時子に授く。清盛大い

に悦ぶ。世其の榮を貪るを疾み。門に榜して之を誘る。清盛以爲らく。文才有る者の所爲と。差差形迹に渉る者一千三百餘人を録して。北野社前に按問す。竟に主名を獲ず。是の冬。皇子生る。清盛喜び極まつて泣く。人以て不祥と爲せり。初め中宮産難し。時に法皇將に新熊野に幸せんとす。先づ産室に入り。誦經護持。既にして分娩す。清盛砂金富士綿各一千兩を獻じて之を謝す。法皇其の嘸物に似たるを怒つて曰く。朕は驗者爲るも。亦以て一身を活すに足ると。三年重盛薨す。法皇關白基房と謀り。其の領する所の越前を收む。一故攝政基實の妻薨す。又其の莊園を收む。基房奏請し子師家を以て次を超えて中納言と爲す。基房の兄の子基通は清盛の女婚なり。亦清盛に因て之を請ふ。因つて爲に懇請して得ず。是の冬清盛兵士數千騎を率ゐて福原より至る。京師驚擾す。清盛子重衡をして帝に白さしめて曰く。臣時勢を觀るに心自ら安からず。若一旦罪を得ば。悔ゆとも及ぶ無し。今當に骸骨を乞うて遐徼に竄匿すべし。願はくは東宮を奉じて以て往かんと。帝大いに驚き。中使を遣はして慰諭し。即日基房父子の官職を停め。基通を以つて關白と爲す。基房清盛の京師に抵るを聞き。法皇に謁して曰く。臣嘗て資盛の事を以て清盛の怒りに遭ふ。重盛の營救に因つて免るを得たり。

今重盛歿し。清盛復憚る所無し。臣に甘心せんと欲せば。臣必遠竄せられん。永く左右に奉ずるを得ずと。因て嗚咽泣下る。法皇愀然として曰く。朕亦自ら安んぜざるなりと。靜賢を遣はして清盛に諭すに。爾後萬機に於いて言ふ所有る無きを以てす。靜賢家臣に就き命を傳へて曰く。頃年朝廷寧からず。人心動搖す。惟公は上下の倚賴する所。其の人を制する能はざる尙可なり。何ぞ自ら不靖を爲すに至るや。聞く公朕に憾む有りと。豈間言に由つて然るを致すか。公兵を擁して京に入る。朕其の謂れを知らず。宜く恟幅を披陳すべし。若他故無くんば當に令を下して以て騷擾を靖んずべしと。清盛出で、命を拜せず。日將に暮れんとす。靜賢歸るを請ふ。之を久うして清盛子知盛をして對へしめて曰く。淨海老耄。自ら揣るに復院中に侍する能はずと。靜賢將に出でんとし呼んで曰く。賢相名臣。天にセツ、マ躡り地にヌキヤレ踏すと。清盛乃ち呼んで之を還し。艱然として曰く。成親の奸を謀るに方り。卿能く事機を覺りて鹿谷の御幸を止む。是れ我が卿に面する所以なり。夫れ保元平治の亂。家を忘れ王に勤め。逆を討ち難を靖んず。是皆人の知る所なり。然るに舊勳を遺れ。動すれば輒ち猜忌して。近習を輕信し。我が門を滅さんと欲す。命運未だ衰へず。幸に禍機を脱る。重盛歿して

未だ七七を過ぎざるに。遽に八幡の御遊及び法住寺殿の御會有る若きに至る。疎薄何ぞ甚しき。且つ重盛の忠義は。時人の知る所なり。向に越前を賜ふや。命じて之を子孫に傳ふ。然り而て歿後輒ち削奪せらる。死者何の罪あつて。遽に此に至るか。中納言缺くるに及び。吾基通の爲に請ふ。而るに更に師家を以て之と爲す。我の請ふ所縱にして例據無きも。應に特恩を以て聽さるべし。況や夫の基通は宗嫡を以て官中將に至る。此の拜に於いて何か有らん。竊に聞く^{サキ}選に院内の近習共に不良を謀る。實は院の叡慮に出づと。縦ひ吾罪有るも。當に七世の宥を蒙るべし。齡七旬に垂んとして屢將に誅戮せられんとす。我が身且つ保つ能はず。子孫復朝に立つを得ん哉。老いて子を喪ふ。猶朽木の枝無きごとし。重盛歿後。自ら衰運を知る。宜なり其の脊遇を失し。人望に背くこと。縦ひ忠勤を盡すも。豈聖者に副はんや。殘喘幾くも無し。望みを世に絶てり。不孝の子父母尙之を惑む。況や重盛忠孝才行兼備なるをや。老いて至痛に罹る。何ぞ少く憫恤を賜はざる。故に吾謂らく院中に近侍するも益無きのみと。言訖つて泣下る。靜賢亦歎歎す。少選^{シヤウセン}くあつて爲に逆順を説き。多方開諭す。清盛意稍釋く。禮して之を遣る。俄にして公卿以下北面に至るまで。法皇に親近する者三十九人

の官職を奪ひ。基房を出して太宰權帥と爲し。前太政大臣師長を尾張に流し。權大納言源資賢を關外に逐ふ。是に於いて宗盛を遣はし法住寺殿を圍ましめ。法皇を鳥羽の宮に幽す。又宗盛をして帝に白さしめて曰く。今よりして後事巨細と無く。一に聖心に決せよと。是の日福原に往く。幾ほども無くして八條の第に還る。皇太子方忌を八條の第に避く。宋人齋す所の太平御覽三百卷を獻す。四年清盛皇太子を奉じて位に即く。是を安德帝と爲す。上皇尙春秋に富む。また他故有るに非ず。而るに遽に位を去る。人其の専恣を惡む。上皇清盛が嚴島の神を崇信するを以て。臨幸して以て其歡心を得んと欲し。先づ旨を清盛に諭す。清盛大いに悦ぶ。遂に幸す。四月源賴政以仁王を勧め。平氏を滅するを謀る。乃ち源行家をして令旨を齋し。東國を歴説し。諸源と約結せしむ。行家先づ伊豆に至り。源賴朝をして兵を起さしむ。初め行家匿れて熊野の新宮に居る。東國に赴くに及び。那知新宮の僧徒と約し。兵を起して相應せしむ。本宮別當湛増平氏と好み有り。其の徒を率ゐて那知を攻む。反つて敗る所と爲る。使を遣はして之を福原に告ぐ。清盛六波羅に還り。廷臣と議し。檢非違使を遣はして以仁王を襲ふ。清盛初め未だ事の賴政に出づるを知らず。賴政の子兼綱亦遣中に在り。

故に頼政先づ之を知り。王をして園城寺に遁れしむ。延暦興福の二寺之れに應ず。清盛大いに將士を集めて計議す。上總介藤原忠清の計を用る。米絹を以て延暦寺に啗はす。延暦寺の僧徒果して畔く。頼政王を奉じて奈良に赴く。清盛子弟を遣はし。二萬騎に將として之を平等院に追撃す。王及び頼政敗死す。清盛常に叡山奈良の僧徒の屢京師を犯すを惡み。都を福原に遷して之を避けんと欲す。是の歲六月遂に徙る。宮殿未だ成らず。權に弟頼盛の別莊を以つて宸居と爲せり。既にして復車駕を己の第に徙す。人情崩駭。物議紛紜たり。此に至つて法皇を三間の板屋に幽す。是より先宗盛の諫を以て鳥羽宮より八條烏丸に徙す。稍其の禁を寬くす。以仁王の事起るに及び。禁防益密なり。膳を進むる朝夕に止まるのみ。人呼で牢御所と曰ふ。清盛大内裏を新都に造らんと欲し。大納言藤原實定。參議源通親等をして輪田を相攸し。廣袤を規度せしむ。而るに土地狹隘なり。議者或は昆陽野に營まんと欲す。或は曰く印南野可なりと。未だ決せず。乃ち前權大納言藤原邦綱をして周防に課し。假りに皇宮を營み。稱して里内裏と爲す。是の月清盛及び妻時子三宮に準ず。年官年爵を賜ふ。私第に直する者。服飾院宮上日の儀の如し。遷都以來。朝野怨讟。訛言屢行はる。或は云く源仲

綱等以仁王を擁して伊豆に走り。潛匿して甲斐に在りと。是に於いて園城寺の莊園を收め。圓慧法親王帶ぶる所の天王寺の檢校職を罷め。僧正房覺以下十三人を考治し。二會講師圓全寺の公請を停め。堂衆筒井明秀等三十餘人を流す。九月相模の人大庭景親告げて曰く。伊豆の流人源頼朝。一院の詔暨び高倉宮の令旨を承けたりと稱し。兵を發し攻めて目代平兼隆を殺し。石橋山に據る。景親兵を聚め撃つて之を破りしに。頼朝杉山を逃竄し。其の之く所を知らず。或は曰く水に赴けりと。或は曰く自ら瘞死せりと。清盛大いに悦び。景親等を賞す。既にして清盛の族黨東國に在る者頻りに告げて曰く。頼朝石橋に死するといふ者は妄なり。北條佐々木三浦等皆之に屬し。伊豆駿河甲斐信濃の將士雲集し。兵勢大いに振へり。早く誅せずんば恐らくは及ぶ無けん。清盛悔恨して曰く。東國の人士。多くは是れ爲義の門族臣孥なり。我が慮此に及ばずして。頼朝を東國に放てり。彼をして擁戴して我が門を滅さしむる。譬へば猶盜に鑰を授け。虎を野に放つがごとし。曩きに尼池の營救に頼り。首領を全うするを得て。今忽ち舊恩を忘れて。弓を我に關く邪と。乃ち上皇に請うて頼朝を討つの勅を下す。上皇曰く。宜しく之を法皇に奏すべしと。清盛愠つて曰く。方今天子幼沖なり。

事陛下に決せずんばある可からず。何爲ぞ踰えて法皇に請はん。聖慮其れ源氏に與する邪と。上皇笑つて之に従ふ。官符を東海東山二道に下し。頼朝を討つ。孫維盛。弟忠度。子知度を以つて追討と爲す。源義仲亦兵を信濃に起して頼朝に應ず。是の月上皇又嚴島に幸す。清盛扈從す。人を屏けて迫り請うて曰く。既に賊を討つの勅を下せり。復陛下を疑ふ無し。然れども願はくは誓書を賜へ。而して源氏に與せざるを明かにせよ。否らざれば則ち陛下を此に放たんと。上皇曰く。朕年來公に於いて何ぞ負かん。而して朕を疑ふこと此に至る。請ふ所の如きは則ち何の難きことか之れ有らん。宗盛紙筆を進む。清盛其の辭を口占して上皇の書を請ふ。書成つて之を賜ふ。上皇竊に侍臣と與に語り。歔歔流涕す。清盛嚴島より還り。心稍解く。宮を夢野に造りて。復法皇を徙せり。十月維盛富士川に抵る。軍夜驚き潰ゆ。十一月新都の宮成る。帝徙御す。延曆寺屢狀を上りて舊京に還るを請ふ。清盛百官を集め。兩都の利害を言はしむ。衆皆意を承け。盛に新都の美を稱す。左大辨藤原長方獨抗議して以て不便と爲す。清盛擇ばずして而して罷む。俄に公卿を移して舊京に還す。是より先福原の第屢怪有り。夜物有りて人面の如く。大いさ一室に充つ可し。又中夜聲有り。大木の僵るゝが如し。

而して空中哄然として大笑せり。又愛する所の駿驕を望月と曰ふ。一夜鼠尾に巢うて子を生子。又庭上に鬮腰數百有り。旋轉交錯し。聚つて一巨顛と爲る。高さ十餘丈。忽ち千萬眼を生ず。清盛之を惡む。維盛等の敗るゝより後。東海北陸諸源の兵勢益熾んなり。前右兵衛尉山本義經及び弟柏木義兼。亦兵を近江に起して頼朝に應ず。十二月知盛等を遣はして之を討たしむ。義經鎌倉に奔る。時に延曆寺の僧徒園城寺と連和して義經に應じ。園城寺に據る。兵を遣はして之を撃つ。延曆寺の僧徒山科に逆へ戦ふ。又子清房を遣はして園城寺を攻めしむ。火を放つて之を燒く。堂宇焚蕩遺るところ無し。初め興福寺の僧徒の以仁王を迎へんと欲するや。兵を發して木津川に至る。以仁王の敗るゝを聞きて還る。攝政基通氏院有宮別當藤原忠成を遣はして之を諭す。僧徒忠成を凌轢し。衣を褫うて之を逐ふ。再び右衛門督藤原親雅を遣はして其の形勢を偵はしむ。恐怖して還る。自後僧徒蠢動已まず。朝廷使を遣はして事由を詰る。僧徒曰く。他志有るに非ず。唯清盛を圖らんと欲する耳と。清盛之を聞き。瀬尾兼康を以て大和の檢非違使に補し。數百騎を率ゐて之に赴かしむ。發するに臨み之れを誡めて曰く。甲冑を著し弓矢を執りて。僧徒をして疑を致さしむる無れと。僧徒兼康の至るを聞き。

兵を率ゐて來り攻む。士卒多く死す。僧徒其の首を猿澤の池上に梟す。兼康僅に身を以て免る。是より先興福寺園城寺に牒を復し。清盛父祖の貴顯ならざるを譏嘲して曰く。平氏之糟糠。武家之塵芥と。西乗房信救之を草せり。清盛大いに怒り。索むること急なり。信救懼れ。身に漆して癩と爲りて亡け去る。後源義仲の書史と爲る。大夫坊覺明是なり。又木偶首を作り。號して太政入道の首と爲し。搗撃踏蹴す。清盛益怒り。重衡を遣はして兵數千に將として之を撃たしめ。東大興福の二寺を焚く。時に天下の諸道。平氏に叛く者日に相續ぐ。士卒多く逃亡す。清盛意頗沮喪し。法皇に請うて復政を院中に聽かしむ。法皇讓つて聽かず。固く請ふこと再三なり。既にして之に従ふ。美濃讚岐を獻じ。以て御分國と爲す。天下の事を以て專宗盛に委ぬ。是に至つて清盛悔心漸く生じ。法皇の意を慰めんと欲し。其の女を宮に納る。上皇晏駕して纔に旬餘なり。然れども法皇拒む能はず。

養和元年。清盛關東の兵の將に南海を経て京に入らんとするを聞き。兵を遣はして縁海の處所を守る。時に緒方惟能菊池隆直等西海に據り。河野通信南海に據り。俱に源氏の聲援を爲す。維盛知盛等兵を東北に出し。而して或は返撓し。或は病還す。清

盛忿恚す。時に宗盛院宣を奉じて將に東國に赴かんとす。未だ發せず。會清盛疾を得。身熱する火の如し。水を石槽に盛り。澡浴して以て冷を取る。病勢日に熾なり。妻時子二位尼と稱す。其の起つ可からざるを見て。言はんと欲する所を問ふ。清盛大息して曰く。平治以降。天下を掌握に運らし。官太政大臣に至り。身は國家の外祖爲り。奚の求むることか之有らん。たゞ恨むる所の者は頼朝の首を見ざるのみ。我没するの日。堂塔を造る無かれ。佛を供養する無かれ。願はくは頼朝の首を斬り。以つて墓上に懸けよ。凡そ我が子孫たる者は。宜しく是の心を體して敢て懈る勿れ。宛轉煩躁。七日にして薨す。歳六十四。愛宕に荼毗し。骨を經島に藏む。
(大日本史)

平 忠 度

忠盛の子。壽永二年一の谷に據り。西門を守り。岡部忠澄の爲に斬らる。
時に年四十一。

野もせの蟲……

藤原信實

薩摩守忠度と云ふ人ありき。或る宮ばらの女房に物申さむとて扇の上さまにて踏らひけるが。殊の外に夜更けにければ。扇をはらはらと使ひ鳴して聞き知らせければ。此の扇の心知りの女房。野もせにすだく蟲の音やと詠めけるを聞きて。扇を使ひ止みにけり。此の女房。扇をばなどや使ひ給はざりつるぞと云ひければ。いざかしがましとかや聞えつればと云ひたりける優しかりけり。

かしがまし野もせにすだく蟲の音よ我だに物は云はでこそ思へ (今物語)

雁山夕雲……

……信濃前司行長(俗傳)

薩摩守忠度は何處よりか歸られたりけむ。侍五騎童一人我が身共に混甲七騎取つて返し。五條三位俊成の卿の許におはして見給へば。門戸を閉ぢて開かず。忠度と名のり給へば。落人還り來れりとて其の内騒ぎ合へり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り。自ら高らかに申されけるは。是は三位殿に申すべき事ありて忠度が参つて候。縦ひ門をば開けられずとも此の際まで立ち寄り給へ。申すべき事の候ふと申されたりければ。俊成卿。其の人ならば苦しかるまじ。開けて入れ申せとて門を開けて對面ありけり。

事の體何となう物哀なり。薩摩守申されけるは。先年申し承けてより後は努々疎略を存せずとは申しながら。此の二三箇年は京都の騷國々の亂出で來。剩へ當家の身の上に罷りなりて候へば。常に参り寄ることも候はず。君既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命今日はや盡き果て候ふ。其に就き候ひては。撰集の御沙汰あるべき由承つて候ひし程に。生涯の面目に一首なりとも御恩を蒙らうと存じ候ひつるに。斯る世の亂出で來て其の沙汰なく候ふ條唯一身の歎と存じ候ふ。此の世靜つて撰集の御沙汰候はば。此に候ふ卷物の中にさりぬべき歌候はゞ。一首なりとも御恩を蒙つて草の蔭にても嬉しと存じ候はゞ。遠き御守とこそ成り参らせ候はむすれとて。日來詠み置かれたる歌どもの中に。秀歌と覺しきを百餘首書き集められたりける卷物を。今はとてうち立たれける時是を取つて持たれたりけるを。鎧ヒキアハセの引合より取り出で、俊成の卿に奉らる。三位是を開いて見給ひて。斯る忘形見どもを賜はり候ふ上は努々疎略を存じまじう候ふ。さても唯今の御渡りこそ情も深う哀も殊に勝れて。感涙抑へ難うこそ候へと宣へば。薩摩守。骸カハネを野山に曝さば曝せ。憂名を西海の波に流さば流せ。今は憂き世に思ひ置くことなし。さらば暇申すとて。馬に打ち乗り甲の緒を締めて。西を指して

ぞ歩ませ給ふ。三位後を遙に見送つて立たれたれば。忠度の聲と覺しくて。前途程遠し思を鴈山の夕雲に馳すと高らかに口吟ズみ給へば。俊成の卿もいと哀に覺えて。涙を抑へて入り給ひぬ。其の後世靜つて千載集を撰ぜられけるに。忠度のありし有様言ひ置きし言の葉今更思ひ出で、哀なりけり。件の卷物の中にさりぬべき歌幾らもありけれども。其の身勅勘の人なれば名字をば顯はされず。故郷の花と云ふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ。讀人知らずと入れられたる。

さゞ浪や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな

其の身朝敵となりぬる上は仔細に及ばずと云ひながら。恨めしかりし事どもなり。

(平家物語)

小宰相局

刑部卿藤原憲賢の女。上西門院の宮女なり。平通盛に配し。寵愛せらる。壽永中通盛淺川に戦死す。慟哭已まず。遂に海に投じて死す。

夫の著背長……………信濃前司行長(俗傳)

明くれば十四日(壽永三。正月)八島へ押渡る。宵うち過ぐるほどは臥し給ひたりけるが。更け行く儘に船の中靜まりければ乳母の女房に宣ひけるは。今朝までは三位(通盛)討たれにしとは聞きしかども實とも思はでありつるが。此の暮程より實グニさもあらむと思ひ定めてあるぞとよ。其故は皆人毎に湊河とやらむにて三位討たれにしとは言ひしかども。其の後生きて會うたりと云ふ者一人もなし。明日打出でむとての夜ツカ白地なる所にて行ひ逢ひたりしかば。何日イッよりも心細けにうち歎きて。明日の軍には必ず討たれむと覺ゆるはとよ。我如何にもなりなむ後人は如何はし給ふべきなど言ひしかども。軍は何もの事なれば一定さるべしとも思はで有りつる事こそ悲しけれ。其を限とだに思はましかば。など後の世と契らざりけむと思ふさへこそ悲しけれ。直タならずなりたる事をも日來は隠して言はざりしかども。餘に心深く思はれじとて言ひ出でたりしかば。斜ならず嬉しけにて。通盛三十になる迄子と云ふ者も無かりつるに。あはれ同じうは男子にてあれかし。浮世の忘形見にもと思ひ置く計なり。偕幾月にかなるら

む。心地は如何あるらむ。何となき波の上船の中の栖スレヒなれば。閑スレヒに身々とならむ時如何はし給ふべきなど言ひしは。儂ハカチかりし兼言かな。實マコトやらむ女はさやうの時十に九は必ず死ぬるなれば。恥がましうウツク變てき目を見て空しうならむも心憂し。靜シズカに身々となりて後少き者を育て、亡き人の形見にも見ばやとは思へども。其を見む度毎には昔の人のみ戀しくて思の数は増るとも慰む事はよもあらじ。終には遁れまじき道なり。若不思議に此の世を忍び過すとも。心に任せぬ世の慣は思はぬ外の不思議も有るぞとよ。其を思へば心憂し。目メ睡めば夢に見え。覺むれば面影に立つぞとよ。生きて居てとに斯に人を戀しと思はむより。水の底へも入らばやと思ひ定めてあるぞとよ。足下ソコに一人留つて歎かむ事こそ心苦しけれども。妾が装束のあるをば取りて如何ならむ僧にも奉り。亡人の御菩提をも弔ひ參らせ。妾が後生をも助け給へ。書き置きたる文をば都へ傳へてたべなど細々と宣へば。乳母の女房涙を抑へて。幼き子をも振捨て。老いたる親をも留め置き。遙々とは是迄附き參らせて候ふ志をば如何ばかりとか思召され候らむ云々とて。潛然サシムとかき口説きければ。北の方此の事悪しうも知らせなむと思はれけむ。是は心に代つても推量り給ふべし。大方の世の恨めしき人の別の悲しさにも。身

を投げむなど云ふは常の習なり。されどもさやうの事は有り難き様サマシぞかし。誠に思ひ立つ事あらば足下ソコに知らせずしてはあるまじきぞ。今は夜も更けぬ。いざや寢むと宣へば。乳母の女房。此の四五日は湯水をだに拂々しう御覽じ入れさせ給はぬ人の。斯様に細々と仰せらるゝは眞に思召し立つ事もやと悲しうて。凡は都の御事もさる御事にて侍へども。實思ゲニ召し立つ事ならば妾をも千尋の底までも引きこそ具せさせ給はめ。後れ參らせなむ後更に片時存ナガラふべしとも覺えぬものかなと申して。御傍に在りながら些目睡みたりける隙に。北の方やはらフナバタ航へ起き出で給ひて。漫々たる海上なれば何地を西とは知らねども。月の入るさの山の端を其方の空とや覺しけむ。閑スレヒに念佛し給へば。沖の白洲に鳴く千鳥。天の戸渡る櫂の音。折から哀や勝りけむ。忍聲に念佛百遍許唱へさせ給ひつゝ。南無西方極樂世界の教主彌陀如來。本願誤たず飽かて別れし妹背の中らひ必一蓮にと。泣く泣く遙にかき口説き。南無と唱ふる聲共に海にぞ沈み給ひける。一の谷より八島へ押渡らむとての夜半許の事なりければ。舟の中靜まつて人は是を知らざりけり。其の中に櫂取の一人寢ざりけるが此の由を見奉つて。彼は如何に。あの御船より女房の海へ入らせ給ひぬるはと呼はつたりければ。乳母の女房

うち驚き傍を搜れどもおはせざりければ。唯あれよあれよとぞ呆れける。人数多下りて取り上げ奉らむとしけれども。さらぬだに春の夜は習に霞むものなれば四方の叢雲浮かれ来て。潜けども潜けども月朧にて見え給はず。遙に程経て後取り上げ奉つたりけれども。早此の世に無き人となり給ひぬ。白き袴に練貫の二つ衣を著給へり。髪も袴も鹽垂れて取り上げけれども效ぞなき。乳母の女房手に手を取り組み顔に顔を押當て。などや是程に思召し立つる事ならば。妾をも千尋の底迄も引きこそ具せさせ給ふべけれ。恨めしうも唯一人留めさせ給ふものかな。さるにても今一度物仰せられて妾に聞かさせ給へとて。悶え焦れけれども。早此の世に亡人となり給ひぬる上は一言の返事にも及び給はず。纔に通ひつる息も早絶え果てぬ。さる程に春の夜の月も雲居に傾き霞める空も明け行けば。名残は盡きせず思へどもさてしも有るべき事ならねば。浮きも上り給ふと故三位殿の著背長の一領残りたるを引き纏ひ奉り。終に海にぞ沈めける。乳母の女房今度は後れ奉らじと續いて海に入らむとしけるを。人々取り留めければ力及ばず。せめての心の在られずさにや手づから髪を剪み下し。故三位殿の御弟中納言の律師忠快に剃らせ奉り。泣く泣く戒を保つて主の後世をぞ弔ひける。昔より

男に後るゝ類多しと云へども。様を替ふるは常の習身を投ぐるまでは有り難き様なり。されば忠臣は二君に仕へず貞女は二夫に見えずとも斯様の事をや申すべき。此の女房と申すは頭刑部卿範方の女。禁中一の美人。名をば小宰相殿とぞ申しける。上西門院の女房なり。此の女房十六と申し、安元の春の頃。女院法勝寺へ花見の御幸のありしに。通盛卿其の比は未中宮亮にて供奉せられたりけるが。見染めたりし女房なり。始は歌を詠み文を盡されけれども。玉章の數のみ積つて取り入れ給ふ事もなし。既に三年になりしかば通盛卿今を限の文を書きて小宰相殿の許へ遣す。剩へ取り傳へける女房にだに逢はずして使空しう歸りける。道にて折節小宰相殿は里より御所へぞ参られける。使空しう歸り参らむ事の本意なさに。傍をつと走り通る様にて小宰相殿の乗り給へる車の簾の中へ通盛卿の文をぞ投げ入れたる。供の者共に問ひ給へば知らずと申す。さて彼の文を開けて見給へば通盛卿の文なりけり。車に置くべきやうもなし。大路に捨てむも流石にて袴の腰に挟みつゝ御所へぞ参り給ひける。さて宮仕へ給ひし程に、所しもこそ多けれ御前に文を落されたり。女院之を取らせおはしまし。急ぎ御衣の袂に引き落させ給ひて、珍らしき物をこそ求めたれ。此の主は誰なるらむと仰せければ。

御所中の女房達萬の神佛に懸けて知らずとのみぞ申しける。其の中に小宰相殿ばかり顔うち赤めてつやつや物も申されず。女院も内々通盛卿の申すとは知し召されたりければ。儲此の文を披けて御覽すれば。綺爐の煙の匂殊に深きに筆の立ども尋常ならず。餘に人の心強きも今は中々嬉しくてなど細々と書きて。奥に一首の歌ぞありける。

我が戀は細谷川のまろき橋ふみ返されて濡る袖かな

女院是は逢はぬを恨みたる文なり。餘り人の心強きも中々今は怨となんなるものを。中頃小野小町とて眉目容美しう情の道有り難かりしかば。見る人聞く者肝魂を傷ましめすと云ふ事なし。されども心強き名をや取りたりけむ。終には人の思の積とて風を防ぐ便もなく雨を漏さぬ業もなし。宿に曇らぬ月星は涙に浮び。野邊の若菜澤の根芹を摘みてこそ露の命をば過しけれ。女院是は如何にも返事あるべき事ぞとて御視召し寄せて。忝くも自ら御返事遊ばされけり。

唯頼め細谷川のまろき橋ふみ返しては落ちざらめやは

胸の中の思は富士の煙に顯れ。袖の上の涙は清見が關の浪なれや。眉目は幸の花なれば三位此の女房を賜はつて互の志淺からず。されば西海の浪の上舟の中までも引き

具して。終に同じ道へぞ赴かれける。門脇中納言は。故三位殿の形見とも此の女房をこそ見給ふべきに。其さへ斯様になり給へば最ど心細うぞなられける。(平家物語)

木曾義仲

義賢の子。木曾冠者といふ。頼朝の兵を起すや。義仲も亦起り。壽永中平氏を篠原に破り。長驅して京に入る。元暦元年範頼義經の攻むる所となり。粟津に戦死す。年三十一。

猫間殿……………葉室時長(俗傳)

猫間中納言光隆卿宣ふべき事ありて木曾が許へおはして。まづ雑色して斯くと云ひ入れられたり。木曾が郎等にて根井と云ふ者聞き繼ぎて主に語りければ。木曾意得ずとて訛音にて。何猫の來た。猫とは何ぞ。鼠捕る猫か。旅なれば捕らすべき鼠もなし。猫は何の料に義仲が許へは來るべき。但人を猫間と云ふ事もあると云ひければ。根井も實に心得ずと思ひて立ち歸つて雑色に問ふやうは。抑猫殿とは鼠捕る猫か。人を猫

木曾義仲

殿と申すかと御料に意得ずと暎り給ふなりと云へば。雑色あな頑や教へむと思ひて。七條坊城壬生の邊をば北猫間南猫間と申す。是は北猫間におはします程に。在所につきて猫間殿と申すなり。譬へば信濃國木曾と云ふ所におはすれば木曾殿と申すやうに。是も猫間におはしませば猫間殿と申すなりと細々に教へければ。根井意得て此の様を申す。木曾も其の時意得て見參に入り奉られけれ。暫く物語し給ひて。木曾根井を招いて。や給へなんとまれ饗し申せと云ふ。中納言淺ましと思ひて。唯今宜ふことある可からざりけれども。いかゞ食時におはしたるに。物めさではあるべき。食ふべき折に食はざるは糧なき者となるなり。疾く急げ急げと云ふ。何も生しき物をば無鹽と云ふぞと心得て。無鹽の平茸もありつな。歸り給はぬさきに早めよ早めよと云ひければ。中納言は斯る由なき所へ來つて恥がましや。今更歸らむも流石なりと思ひて。宜ふべき事も携々しく仰せられず。興醒まして堅唾を呑んでおはしけるに。いつしか田舎合子の大に尻高く底深きに。生塗なるが所々剥けたるに。毛立したる飯の黒く糲交りなりけるを堆く盛り上げて。御菜三種に平茸の汁一つ折敷に居ゑて根井持ち來りて中納言の前にさし居ゑたり。大方とかく云ふばかりなし。木曾が前にも同じく供へたり。

木曾は箸取り食ひたれども。中納言は青く興醒ましてめさず。木曾是を見て。如何に猫殿は饗さざるぞ。合子を簡び給ふか。あれは義仲が随分の精進合子。徒にも人に賜ばす。無鹽の平茸は京都にはきと無き物なり。猫殿唯搔き給へ搔き給へと勧めたり。いと穢らはしく思ひ給ひけれども。物も覚えぬ田舎人。食はずして悪しき事もぞありと思はれければ。めす體に靴して中底に突き散し給へり。木曾は散飯の外には何も残さず食ひ畢んぬ。戯呼猫殿は少食にておはしけり。さるにても偶おはしたるに。今少し搔き給へかし搔き給へかしと申す。其の後根井猫間殿の下を取つて中納言の雑色に給ふ。雑色因幡心ざし腹を立て。我が君昔より斯る淺ましき物進らずとて。厩の角へ合子ながら抛け捨てたり。木曾が舍人是を見て。あな淺ましや。京の者はなどや上臈も下臈も物は覚えぬ。あれは殿の大事の合子精進をやとて取りてけり。

(源平盛衰記)

やれ健兒やれ………

同

是のみならずをかしき事ども多かりける中に。木曾我官をなしたり。さのみ引籠あ

るべきにあらず出仕せむとて。直垂を脱ぎ置きて狩衣に立烏帽子著て。初めて車に乗り院の御所へ参る。乗り習はざる車著知らざる装束なれば。立烏帽子の尖より指貫の裾まで頑カタクナなること云ふばかりなし。牛飼は平家内大臣の童を取つて使ひければ。高名の遣手なり。主の敵ぞかすと目覺ましく心憂く思ひける。木曾車に歪ユガみ乗りたる有様をかしなどは云ふばかりなし。左右の物見を開き前後の簾を揚げたり。牛小童が斯くはせぬ事に候ふと云ひければ。やをれ牛童よ。たまたま車に乗りたる時。人を見たりの人にも見ゆるぞかし。如何無念に車の内なればとて引き籠めてあるべき。且うは是程クボツカナ窄クボツカナき所に詰め居ることも忌々イタクしなど云ひてをかしかりけり。馬にうち乗り冑著たるには少しも似ず。ゆゝしく危けにぞ見えける。牛童車を門外に遣り出して。後れて一楯スハエ當てたれば、飼ひ立ちたる強牛の逸物なり。何の滞かあるべきなれば飛ぶ如く走る。木曾車の内に逆さまに轉ぶ。牛を留めむ爲に。やをら童々と叫びければ。留めよと云ふとは心得たりけれども。いと鞭を當てつ。牛はまひあがて躍る。起き上らむ起き上らむとすれども。なじかは起きらるべき。著習はざる装束なり。起くる暇はなし。蝶の羽を廣けたるが如に左右の袖を廣げ。足を捧けてやをれやをれと喚ウツきけれど

も。席ツラキ聞かすして六七町こそ足搔アガかせたれ。郎等共が馳せ付きて。如何に暫時留めよと仰のあるに斯くは仕るぞと云ひければ。牛童陳じ申しけるはやれ健兒コシイやれ健兒と候へば。初めて御車に召して面白しと思しめして。車を遣れ遣れと仰あると心得て仕りて侍り。其の上此の牛は鼻強く候ふと申して足を留めて後。木曾起き居たりけれども六七町は足搔かせぬ。著習はぬ狩衣の頸にて喉をば強く詰めたり。遍身に汗たり赤面してぬけぬけとあり。牛飼今は中直せむと思ひて。それに候ふ御手形に取り付かせ給へと教へければ。孰くを手形とも知らずけに見えける時に。其に候ふ方立の穴に取り付かせ給へと云ふ時。初めて取り付きて。あはれ支度や。是は和牛健兒が支度か。又主の殿の構コシラハかとぞ問ひたりける。院の御所にて車懸け外して下りむとしけるが。後より下りけるを。雉色車には後より乗つて前より下るゝ事にて候ふと申せば。如何車ならむからに忌々しく素通スドホリをばすべき。京の人は物に覺えずと覺ゆるとて。終に後より下りてけれ。院の御所へ指し入りければ。折節候相たりける公卿殿上人女房女童部に至るまで。すはや木曾が参るなるは。死生知らずの怖し者にてあるなるぞとて。局々に逃げ入り忍び隠れて。戸を細目に開き御簾の間ヒヤより覗きけり。木曾庭上を練り廻り

彼方此方を立ち渡りて。あな面白の大戸や背戸や。中戸にも繪畫きたり。下内にも唐紙押したりとぞ賞めたりける。殿上階下男女畏ろしさにえ咲はで忍音に咲壺に入りてぞ咲ひける。大方振舞ふと振舞ふ事。云ふと云ふ言は。哀中上下の物笑なり。

(源平盛衰記)

粟津驛

信濃前司行長(俗傳)

木曾もろは山の前。四宮河原に打出て見れば。兼平勢多を落ちて五十騎許にて旗を巻きて京の方へ入る。木曾今井と見てければ。急ぎ歩ませ寄り。轡を並べて打立たれども。夢の心地して物も言はざりけり。良久しく有りて。木曾。都にて討死すべかりつれども。今一度汝に見えもし見んとて思つて来る也と云へば。兼平。勢多にて討死す可く候つれ共。御行衛の覺束無さに。今一度見進らせんとて參て候とぞ申しける。

木曾今井に向つて云けるは。日比何とも思はぬ薄金の重く覺ゆるぞ。と云ひければ。今井が申けるは日比に金も増さず。別の物も附かず。何かは今にはじめぬ御幸背長の重く思し召され候べき。御身の疲にて渡らせ給ふらむ。勢無しと思し召して臆病にて

ぞ候らむ。兼平一人をば餘の者千騎と思し召され候べし。あれに見え候松の本へ打寄せて。靜に念佛申させ給ひて御自害候べし。射残して候矢七ツ八ツ候。防矢仕候べしと申て。粟津の松の本へ馳寄ける。去程に勢多の方より武者三十騎許出来る。是を見て。殿ははや松中へ入らせ給へ。兼平は此の新手に打向ひて。死なば力及ばず。生かば歸り參らむ。兼平が行衛を御覽じ果て、御自害候へ。とて懸けんとする所に。木曾申しけるは。都にて討死すべかりつるに。是迄來る事は。汝と一所にて死なんが爲なり。二騎になりて此彼にて死なん事こそ口惜けれ。とて馬の鼻を竝べんとす。今井申けるは。武者は死て後こそ核は固まるものにて候へ。年來日來は。如何なる高名をして候へども。最後の時不覺しつれば。長き世の疵にて候なりと云ふ。甲斐無き郎等共にこそ木曾殿は討れ給ひにけれと云はれさせ給はんことこそ口惜く候へ。と申ければ。道理とや思はれけむ。後合に馳せておはしけり。彼の松の本と申は。道より三町ばかり南へ入りたる所なり。それを守りて木曾落ち行く。こゝに相模國住人石田小次郎爲久と云ふ者追懸けて。大將軍とこそ見參らせて候へ。きたなしや源氏の名折に。返し合せ給へ。と云ひければ、木曾射残したる矢一ツ有りけるを取つて番ひて。おしひ

らいて射たりければ。石田が馬の太腹に篋少く立つたりけり。石田は眞逆様に落ちにけり。木曾立松の方へ落ち行く。此は元暦元年正月二十日の事なれば。粟津の下の廣囃の。馬の頭も埋もれる程の深田に。氷のはりたりけるを馳せ渡らんと打入れたりければ。馬も弱り働かず。主も疲れて身もひかず。さりとも今井は續くらんと思ひて。後を見返りたりけるを。爲久よつびいて射たりければ。木曾が内兜に射つたり。兜の眞向を馬の頭にあてようつぶしに伏したり。爲久が郎等二人馬より飛び下り。深田に下りて木曾が首を取る。今井は木曾討れぬと見て。新手に向ひ。命を惜まず戦ひけり。今井歩ませ出して申せるは。音にも聞き目にも見よ。信濃國住人木曾中三權守兼遠四男今井四郎兼平とは我が事ぞ。木曾殿には乳母子。鎌倉殿もさる者ありと知しめされたり。兼平が首取つて。あれがうの一處にもあへや殿原。とて數百騎の中へ喚いて駈け入り。縦横さまに散々にかけよれども。大力の剛の者なれば。寄りて組む者無かりけり。たゞ引詰めて遠矢にぞ射ける。されども鎧良ければ裏かゝず。あき間を射ねば傷も負はず。さる程に八ッの矢にて八騎の敵は射殺す。日本第一の剛の者。主の御供に自害する。見習へや八箇國の殿原とて。太刀を抜きて切先を啣へて。馬より前

に落ちて。貫かれてこそ死にけれ。太刀の先二尺許草摺のはづれに出でたりけり。

(平家物語)

平 教 經

教盛の子。能登守内藏人となる。壽永三年一の谷に據り。源氏の軍を拒ぐ。急に正二位大納言に拜せらる。受けず。壇の浦に自刃す。年五十七。

最 後 の 鬪

葉 室 時 長 (俗傳)

前能登守教經は。元來心剛に身健にして進む事あつて退く事なし。軍敗れぬと見えければ。思ひ切り死生知らず振舞ふ。是ぞ聞ゆる能登守とて我先我先にと争ひて懸りけれども。少しも面も振らず戦ひ。矢頃に廻る者をば指し詰め指し詰め射けるに、更に徒矢なし。近づく者をば引き寄せ投げて海へ抛け入れければ面を向け難し。太刀にて切るは少なく水に陥るは多し。前中納言知盛卿是を見て。由なき事し給ふ者かな。此の輩は皆歩兵にこそ侍るめる。強に目に立て給ふべきにあらず。自害をもし給へかしと宣へば。偕は九郎冠者に組めとにこそ。其は存する處なり。如何はせむと伺ひ廻る

處に。判官(義經)の船と能登守の船と摩り合せて通りけり。能登守然るべしとて判官の船に乗り移り。甲をば脱ぎ棄て大童になり。鎧の袖草摺チヂ振斷り捨て輕々と身を認め。何れ九郎ならむと馳せ廻る。判官兼ねて存知してとかく違つて組まじ組まじと紛れ行く。さすが大將軍と覺えて鎧に小長刀突いて武者一人あり。能登守目を懸けて。將軍義經と見るは僻事か。故太政入道の弟門脇中納言教盛の二男能登守教經と名のり。にこと笑み飛び懸る。判官は組んでは適はじと思ひて。尻足踏んでぞ休らひける。大將軍を組ませじとて郎等共が立ち隔て立ち隔てしけれども。除け奴ばら人々しきとて海の中へ蹴入れ取り入れつと寄る。既に判官に組まむとしければ。判官早技人に勝れたり。小長刀を脇に挟み。さし潜りて弓長二つばかりなる隣の船へつと飛び移り。長刀取り直して舩フネに莞爾ニッコと笑みて立ちたり。能登守は力こそ勝れたりけれども早業は判官に及ばねば。力なくして舟に留り。あゝ飛びたり飛びたりと嘆む。其の後能登守今を限と狂ひ廻りければ面を向け難し。爰に安藝太郎時家と云ふ者あり。是は安藝國住人にもなし。安藝守が子息にもあらず。阿波國の住人安藝大領と云ふ者が子なり。三十人が力持ちたりと聞ゆ。郎等二人あり。同じく三十人づゝ力あり。時家二人の郎等

に云ひけるは。我等三人心を一にして組まむには鬼神と云ふとも負けまじ。能登殿強しと云ふともやは三人には勝ち給ふべき。三人取つて合すれば九十人が力なり。私の力業は人の證據にたゝす。能登守に組んで力をも人に知らせ。剛の名をも極めむと思ふは如何にと云へば。郎等仔細にや及ぶべきとて。三人一度に鏝シコを傾け打つて懸る。能登守は源氏の郎等に名もあり力あればこそ教經には懸るらめ。是ぞ軍の最後なると思ひければ。閑々と相待つ處に。三人鼻を竝べ透間もなくつと寄る。一人をば海中へとうと蹴入れ。二人をば左右の脇に搔い挟んで一締締めて。いざおのれ等教經が御伴申せ。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛とて。海の底へぞ沈みける。

(源平盛衰記)

平 知 盛

清盛の子。從三位左近衛中將となる。賴政を滅し。山本義經を破り。行家を走らす。壽永元年大納言となる。戦敗れて壇の浦に自刃す。年三十四。

生きて後の涙……………信濃前司行長(俗傳)

新中納言知盛卿は生田杜の大將軍にておはしけるが。其の勢皆落ち失せ討たれにしかば。御子武藏の守知章。侍に監物太郎頼方主従三騎汀の方へ落ち給ふ處に。爰に見玉黨と覺しくて。團扇の旗差したる者共が十騎許。鞭鐙を合せて押し懸け奉る。監物太郎は究竟の弓の上手なりければ取つて返し。先眞前に進だる旗差が頸の骨をひやうつばと射て。馬より倒に射落す。其の中の大将と覺しき者新中納言に組み奉らむとて馳せ竝ぶる處に。御子武藏守知章。父を討たせじと中に隔たり。押竝べむづと組んでどうと落ち。取つて抑へて首を搔き立ち上らむとし給ふ處に。敵が童落ち合せて武藏守の首を取る。監物太郎落ち重り。武藏守討ち奉つたりける敵が童をも討ちてけり。其の後矢種のある程射盡し打物抜いて戦ひけるが。弓手の膝口を健シタカに射させ。立ちも上らで居ながら討死してけり。此の紛に新中納言知盛卿は其處をつと逃け延びて。究竟の息長き名馬には乗り給ひぬ。海的面二十餘町泳がせて大臣殿(宗盛)の御船へぞ參られける。船には人多く取り乗つて馬立つべきやうもなかりければ。馬をば渚へ追つ返さる。阿波民部重能。御馬敵の物になり候ひなむす。射殺し候はむとて片手矢番けて出でければ。新中納言。縦令何の物にもならばなれ。唯今我が命助りたらむする

者を、あるへうもなしと宣へば。力及ばで射ざりけり。此の馬。主の別を惜みつゝ暫時は船を離れもやらず沖の方へ泳ぎけるが。次第に遠くなりければ空しき渚へ泳ぎ還り。脚立つ程にもなりしかば。尙船の方を顧みて二三度までこそ嘶きけれ。其の後陸に上つて休み居たりけるを。河越小太郎重房取つて院へ參らせたり。本も此の馬院の御秘藏にて一の御廐に立てられたりしを。一年宗盛公内大臣になりて悅申のありし時下し賜はられたりしを。弟中納言に預けられたりしかば。餘に秘藏して此の馬の祈の爲にとて。毎月朔日毎に泰山府君をぞ奠られける。其の故にや馬の息も長う主の命をも助けしるこそめでたけれ。此の馬。本は信濃國井上だちにてありければ。井上黒とぞ召されける。今度は河越が取つて院へ參らせたりければ。河越黒とぞ召されける。其の後新中納言知盛卿大臣殿の御前におはして涙を流いて申されけるは。武藏守にも後れ候ひぬ。監物太郎をも討たせ候ひぬ。今は心細うこそ罷りなつて候へ。されば子はあつて父を討たせじと敵に組むを見ながら。如何なる父なれば子の討たるゝを助けずして是まで遁れ參りて候ふやらむ。あはれ人の上ならば如何ばかり可キ批ドしう候ふべきに。我が身の上になり候へばよう命は惜しいものにて候ひけりと。今こそ思ひ知られて候

へ。人々の思しめさむ御心の中どもこそ恥かしう候へとて。鎧の袖を顔に押し當て、
潜然と泣かれければ。大臣殿。實に武藏守の父の命に代られけるこそ有り難けれ。手
も利き心も剛にして好き大將軍にておはしつる人を。あの清宗と同年にて今年は十六
なとて。御子右衛門督のおはしける方を見給ひて涙ぐみ給へば。其の座に幾らも竝み
居給へる人々。心あるも心なきも皆鎧の袖をぞ濡されける。
(平家物語)

死の前の笑……………同

源平の國争今日を限とぞ見えたりける。さる程に源氏の兵共平家の船に乗り移りけ
れば。水主機取共或は射殺され或は斬殺されて。船を直すに及ばず船底に皆倒れ伏し
にけり。新中納言知盛卿。小船に乗つて急ぎ御所の御船へ參らせ給ひて。世の中は今
は斯と覺え候ふ。見苦しき物をば皆海へ入れて船の掃除召され候へとて。掃いたり拭
うたり。塵拾ひ艦舳に走り廻つて手づから掃除し給ひけり。女房達。やゝ中納言殿。
軍の様は如何にや如何にと問ひ給へば。唯今珍らしき吾妻男をこそ御覽せられ候はむ
ずらめとて。呵々と笑はれければ。何でふ唯今の戯ぞやとて聲々に喚き叫び給ひけり。

(中略)新中納言知盛卿は。見るべき程の事をば見つ。今は唯自害をせむとて。乳女子
の伊賀平内左衛門家長を召して。日來の契約をば違へまじきかと宣へば。さる事候ふ
とて中納言殿にも鎧二領著せ奉り。我が身も二領著て手に手を取り組み。一所に海に
ぞ入り給ふ。是を見て當座に在りける二十餘人の侍共續いて海にぞ沈みける。
(平家物語)

常磐

義朝の妾。平治の亂義朝敗走す。常磐三子を伴ひ龍門の里に匿る。清盛其
の母を捕へて。是を拘す。常磐自ら出て、刑を請ふ。清盛納れて妾とす。
後藤原長成に嫁せり。

龍門の里……………作者不詳

六波羅より左馬頭の子供尋ねられけるに。既に三人出で來たり。兄二人は早首を梟
けられぬ。頼朝も頓て誅せらるべし。此の外九條院の雜仕常磐腹に三人あり。皆男子

にてあなりと尋ねられければ。常磐之を聞きて。我故頭殿コカウツトに後れ奉つてせむ方なきにも。此の遺子ワスレガタミにこそ今日までも慰むに。若敵にも捕はれなば片時も堪へてあるべき心地もせず。さればとて拂々しく立ち忍ぶべき便もなし。身一つだにも隠し難きに。三人の子供引き具して誰かは暫し宿すべきと泣き悲みけるが。餘りに思ひ得る方もなき隨マに。年來頼み奉りたる観音にこそ歎き申さめとて。二月九日（永曆元）の夜に入りて三人の幼き人を引き具して清水寺へこそ参りけれ。母にも知らせじと思ひければ。乳人童の一人をも具せずして八つになる今若をば前に立て。六歳の乙若をば手を引き。牛若は二つになれば懷に抱きつゝ。黄昏時に宿を出で。足に任せて辿り行く心の中こそ哀なれ。佛前に参りても二人の子供を脇に居る。潜々と泣き居たり。終夜の祈請にも。妾九つの年より月詣を始めて十五になるまでは十八日毎に三十三卷の普門品を讀み奉り。其の年より毎月法華經三部。十九の年より日毎に此の三十三體の聖容を寫し奉る。此の如くの志大慈大悲の御誓にて照し知しめすならば。妾が事はとも斯くも。唯三人の子供の效なき命を助けさせ給へと口説きけり。實マコトに三十三身の春の花匂はぬ袖もあらじかし。十九説法の秋の月照さぬ胸もなかるべければ。さすがに千手千眼哀とは見

そなはし給ふらむとぞ覺えける。漸う曉にもなり行けば師の坊へ入りけるに。日頃は左馬頭の最愛の妻なりしかば。參詣の折々には供の人に至るまで清氣にこそありしが。今は引き替へて身を窶せるのみならず。盡きせぬ歎に泣き萎れたる姿目も當てられねば。師の僧餘りの悲しさに。年來の御情いかでか忘れ参らせむ。幼き人も痛はしければ暫しは忍びてましませかしと申せば。御志は嬉しく侍れども。六波羅近き所なれば暫くも如何侍らむ。眞に忘れ給はずは。佛神の御憐より外は頼む方も侍らねば。觀音に能く能く祈り申して給ひ給へとて。又夜中に出でければ。坊主泣く泣く。唐の太宗は佛像を禮して榮華を一生の春の風に開き。漢の明帝は經典を信じて壽命を秋の月に延ぶと申せば。三寶の御助空しかるまじく候ふと慰めけり。宇陀郡を志せば大和大路を尋ねつゝ南を指して歩めども。習はぬ旅の朝立に。露と争ふ我が涙。袂も裾も萎れけり。二月十日の事なれば餘寒尙烈しく。嵐に凍る道芝の氷に足は傷れつゝ。血に染む衣の裳子故餘所の袖さへ萎れけり。這ふ這ふ伏見の伯母を尋ね行きたれども。古源氏の大將軍の北の方など云ひし時こそ結びも親しみしが。今は謀叛人の妻子となれば煩ウツルさしとや思ひけむ。物語したりとて情ナツクなかりしかども。若やと暫しは待ち居つゝ。待

つ期も過ぎて立ち返れば。日も早頓て暮れにけり。又立ち寄るべき所もなければ。怪しけなる柴の戸に佇みしに。内より女立ち出で、情ありてぞ宿しける。世に立たぬ身の旅寢とて。浮節繁き竹の柱。有る效もなき命持ちて。獨歎くぞ菅の七ふと思ふ人はなし。されど今宵も三ふに唯。伏見の里に夜を明し。出づれば頓て木幡山。馬はあらばや徒歩にても。君を思へば行くごとよと。幼き人に語りつゝ誘ひ行けば。此の人々歩み疲れて平臥し給ふ。常磐一人を抱ける上に二人の人の手を引き腰を押へて。行き艱みたる有様目もあてられず。玉鉾の道行く人も怪めば。是も敵の方様の人やと肝を消す所に。旅人も哀に思ひければ。見る者毎に負ひ抱きて助け行く程に。泣く泣く大和國宇陀郡に龍門と云ふ所に尋ね到り。伯父を頼みてぞ隠れ居にける。(平治物語)

源義經

義朝の子。小字牛若。頼朝の兵を起す。行きて浮島ヶ原に會し。命ぜられて義仲を討ち。平氏を滅す。後頼朝と隙あり。陸奥に走り。泰衡の爲に殺さる。年三十一。

貴船宿

作者不詳

しやうもんに會ひ給ひて後は、學問の事あと形無く忘れ果て。明暮謀叛の事をのみぞ思召しける。謀叛を起す程ならば。早業をせでは叶ふまじ。先づ早業を習はんとて。此の坊は諸人の寄合所なり。如何にも叶ひ難きとて。鞍馬の奥に僧正が谷と云ふ處あり。昔は如何なる人の崇め奉りけむ。貴船の明神とて靈驗殊勝に渡らせ玉ひける。智慧有る上人も行ひけり。鈴の聲も怠らず。神主も有りけるが。御神樂の鼓の音も絶えず。あらたに渡らせ給ひしか共。世末になれば佛の方便も神の驗徳も劣らせ給ひて人住み荒らし。偏に天狗の住處となりて。夕日西に傾けば恠異の喚き叫ぶ。されば参り寄る人をも取り惱ます間。参籠する人も無かりけり。され共牛若かゝる所の有る由を聞給ひ。晝は學問し給ふ體にもてなし。夜は日頃一所にて兎も角も成り参らせんと申つる大衆にも知らせずして。別當の御護に参らせたるしきたいと云ふ腹卷に黄金作りの太刀佩きて。唯一人貴船の明神へ参り給ひ。念誦申させ給ひけるは。南無大慈の明神。八幡大菩薩。心を合せて源氏を守らせ給へ。宿願まこと成就あらば。玉の御寶

殿造り。千町の御所領を寄進し奉らんと祈誓して。正面より未申に向ひて立給ふ。四方の草木をば平家の一類と名付け。大木二本有りけるを。一本をば清盛と名づけ。太刀を抜きて散々に切り。懐中より毬杖キウシヤウの球のやうなる物を取り出し。木の枝に懸け。一をば重盛が首と名づけ。一をば清盛が首とて懸けられける。かくて曉にもなれば我が方に歸り。衣引被ぎて臥し玉ふ。

(義經記)

逆櫓論

葉園室 時長(俗傳)

大夫判官は大物の浦にて。大淀の江内忠俊を以て船揃して。軍の談議ありけるに。梶原平三景時申けるは。船に逆櫓と申物を立候て。軍の自在を得る様にし候はゞやと申けり。判官。逆櫓とは何と云事ぞ。と問ひ給へば。梶原は。逆櫓とは船艦に舳へ向けて櫓を立て候。其の故は陸地の軍は進退逸物の馬に乗りて心に任せて懸るべき處をば懸け。引くべき折は引くも易き事にて侍り。船軍は押早めつる後。押戻すは由々敷大事にて侍る可し。敵強からば舳の方の櫓を以て押戻し。敵弱からば元の如く艦の櫓を以て押渡し侍らばや。と申したりければ。判官。軍と云ふは大將軍が後にて。蒐けよ攻

めよと云ふだにも。引き退くは軍兵の習なり。況して豫て逃げ支度したらんに。戦に勝なんや。と宣へば。梶原。大將軍の謀の良きと申すは。身を全くして敵を亡す。前後をかへりみず。向ふ敵ばかりを打取らんとて。後を知らぬをば猪武者とて。危き事にて候。君は猶若氣にて斯様には仰せらるゝにこそと申す。判官少く色損じて。知らずとよ。猪鹿は知らず。義經は只敵に打勝ちたるぞ心地は好き。戦と云ふは家を出でし日より。敵に組み死なんとこそ存する事なれ。身を全くせん。命を死なじと思はんには。本より戦場に出でぬには若かず。敵に組んで死するは。武者の本なり。命を惜みて逃ぐるは人ならず。さらば和殿が大將軍承りたらん時は。逃儲ニゲマカして百挺千挺の逆櫓をも立給へ。義經が舟には忌々しければ。逆櫓と云ふ事。聞くとも聞かじ。と宣へば。あたり近き兵共。これを聞て。一度に哄と笑ふ。梶原よしなき事申出してけりと赤面せり。判官は。抑、景時が義經を向ふさまに。猪鹿に喩ふる條こそ奇怪なれ。若黨ども景時取つて引落せ。と宣へば。伊勢三郎義盛。片岡八郎。武藏坊辨慶等。判官の前に進み出で。既に取つて引張るべき氣になり。景時はを見て。戦談議に兵共が所存を述ぶるは常の習。よき義には同じ。悪きをば棄て。如何にも身を全うして平

家を亡すべき謀を申す景時に恥を與へんと宣へば。却つて殿は鎌倉殿の御爲には不忠の人や。但し年比は主は一人。今日又主の出でける不思議さよとて。矢さしくはせて判官に向ふ。子息景季景茂。續いて進む。判官腹を立て。刀を取つて向ふところを。三浦別當義澄。判官を抱き止め。畠山庄司次郎重忠。梶原を抱いて動かさず。土肥次郎實平は源太を抱き。多々良五郎能春は平次を懐く。各申けるは。此の條互に穩便ならず。友諒トモアラフヒ其の詮無し。平家の洩れ聞かんも。嗚呼がまし。又鎌倉殿の聞し召さるるも其の憚ある可し。當坐の興言苦み有る可からずと申しければ。判官實にもと思して鎮まれば。梶原も勝に乗るに及ばず。此の意趣を結びてぞ。判官終に梶原にはいよいよ讒せられける。

(源平盛衰記)

腰越状

作者不詳

御曹子(義經)壽永三年に上洛して平家を追ひ落し。一谷八島壇浦所々の忠を致し。先驅身を碎き終に平家を攻め滅して。大將軍前内大臣宗盛父子を生捕り。三十人具足して上洛し。院内の見參に入つて後。去ぬる元暦元年に檢非違使五位の尉になり給ふ。

大夫判官(義經)宗盛父子を具足して腰越に著き給ひし時。梶原申しけるは。判官殿こそ大臣殿父子を具足して腰越に著かせ給ひて候ふなれ。君は如何御計らひ候ふ。判官殿は身に野心を挟ヤシハツみたる御事にて候ふ。其の義いかにと申すに。一谷の合戦に城の三郎高家本三位の中將(重衡)以上取り奉り。三河殿(範頼)の手に渡り候ふを。判官大に怒り給ひて。三河殿は大方の事にてこそ。義經が手にぞ渡るべきものを。奇怪の者の舉動かな。寄せて討たむと候ひしを。景時が計らひに土肥の次郎が手に渡してこそ判官は靜まり給ひしなれ。其の上平家を打ち取つては關より西をば義經給はらむ。天に二の日なし地に二人の王なしと云へども。此の後は二人の將軍やあらむすらむと仰せ候ひしぞかし。斯くて武功の達者。一度も馴れぬ船戦にも風波の難を怖れず。船端を走り給ふこと鳥の如し。一谷の合戦にも城は無雙の城なり。平家は十萬餘騎なり。身方は六萬五千餘騎なり。城は無勢にて寄手は多勢こそ軍の勝負は決し候ふに。城は多勢。案内者。寄手は無案内の者共なり。容易く落つべきとも見え候はざりしを。鴨越とて鳥獸も通ひ難き巖石を無勢にて落し。平家を終に追ひ落し給ふことは凡夫の業ならず。今度八島の軍に大風にて波夥しくして船の通ふべきやうもなかりしを、唯舟

五艘にて駛せ渡し。僅に五千餘騎にて左右なく八島の城に押し寄せて。平家の數萬餘騎を追ひ落し。壇浦の詰軍までも終に弱けを見せ給はず。漢土本朝にも是程の大將軍いかでか有るべきとて。東國西國の兵共一同に仰ぎ奉る。野心を挟みたる人にておはすれば。人毎に情をかけ。侍までも目を懸けられし間。侍共あはれ頼むべき主かなと。此の殿に命を奉らむことは塵よりも惜しからじと申して心を懸け奉りて候ふ。其に左右なく鎌倉中に入れ參らせ給ひて御座候はむこといぶせく候ふ。御一期の程君の御果報なればさりともと存じ候ふ。御子孫の世には如何候はむすらむ。又御一言申しても何とか御座候はむと申しければ。君(頼朝)此の由を聞しめして。梶原が申す事は偽などはあらじなれども。一方を聞きて相計らはむ事は政道の瀆るゝ所なり。九郎が著きたるなれば明日是にて梶原に問答させ候ふべしと仰せられける。大名小名之を聞きて。今の御説の如くにてぞ判官元より過まり給はねば。若助かり給ふことも有りなむ。されども景時が逆櫓立てむとの論の止まざる所に。壇浦にて互に先がけ争ひて矢筈を取り給ひし其の遺恨に斯やうに讒言申せば。終には如何あらむすらむと申しける。召し合せむと仰せられ言ふ時に。梶原甘繩の宿所に歸りて。偽申さぬよし起請を書きて進

らせければ。此の上はとて大臣殿をば腰越より鎌倉に請取り。判官をば腰越に留めらる。判官先祖の恥を雪め。亡魂の憤を休め奉る事は本意なれども。随分二位殿(頼朝)の氣色に相適ひ奉らむとてこそ身を碎きては振舞ひしか。恩賞に行はれむするかと思ひつるに。向顔をだにも遂けられざる上は日來の忠も益なし。あはれ是は梶原めが讒言ござんなれ。西國にて切りて捨つべき奴を。哀憐を垂れて助け置きて敵となしぬるよと後悔し給へども效ぞなき。鎌倉には二位殿川越の太郎を召して。九郎が院の御氣色よき儘に世を亂さむと内々企むなり。西國の侍共附かぬ前に腰越に馳せ向ひ候へと仰せられければ。川越申されけるは。何事にも候へ君の御説を背き申すべきにては候はねども。且は知しめして候ふ如に。娘にて候ふ者を判官殿の召し置かれて候ふ間。身に取りては痛はしく候ふ。他人に仰せ付けられ候へと申し捨てゝぞ立たれける。道理なれば重ねても仰せ出されず。又畠山を召して仰せられけるは。川越に申し候へば親しくなり候ふとて適はじと申す。さればとて世を亂さむと振舞ひ候九郎を其の儘置くべきやうなし。御邊打ち向ひ給ひ候ふべし。吉例なり。さも候はゞ伊豆駿河兩國を奉らむと仰せられければ。畠山萬に憚らぬ人にて申されけるは。御説背き難く候へと

も。八幡大菩薩の御誓にも。人の國より我が國。他人よりも我が人をこそ守らむとこそ承り候へ。他人と親しきと云ひ比ぶれば譬ふる方なし。梶原と申すは一旦の便べんによりて召し使はるゝ者なり。彼が讒言により。年來の忠と申し御兄弟の御中と申し。假令御恨候ふとも九國にても參らせ給ひて。見參とて重忠に賜ひ候はむする伊豆駿河兩國を勸賞クニシヤウの御引出物に參らせ給ひ。京都の守護に置き參らせ給ひ候うて。御後を守らせ給ひて候はむ程の御心安き事は何事か候ふべきと。憚る所なく申し捨てゝ立たれける。二位殿道理と愚し召しけるにや。其の後は仰せ出さるゝ事もなし。腰越に此の事を聞き給ひて。野心を挾まざる旨。數通の起請文を書き進じられけれども。尙御承引なかりければ。重ねて申狀をぞ進らせられける。

源義經恐ながら申し上ぐる意趣は。代官の其の一に選ばれ勅宣の御使として朝敵を傾け會稽の恥辱を雪ぐ。勳功に行はるべき處に思の外虎口の讒言によつて莫大の勳功を黙シガせられ。義經犯すこと無うして咎を蒙り。功ありて謬なしと云へども御勳氣を蒙るの間空しく紅涙に沈む。讒者の實否ジツブを正されず鎌倉中へだに入れられざるの間。素意を述ぶるに能はず徒に數日を送る。此の時に當て永く温顔を拜し奉らず。

骨肉同胞の義既に絶え。宿運極めて空しきに似たるか。將又前生の業因を感ずるか。悲しきかな。此の條故亡父の尊靈再誕の縁にあらずんば誰人か愚意の悲歎を申し披かむ。何れの輩か哀憐を垂れむや。事新しき申し狀述懐に似たりと雖ども。義經才體髮膚を父母に受け。幾何イッダクの時節を経ずして故頭殿御他界の間。孤となつて母の懷中に抱かれて大和國宇多の郡龍門の牧に趣きしより以來。一日片時も安堵の思に任せず。效カヒなき命を存すと云へども。京都の經廻ツクシ難治の間。身を在々所々に隠し。邊土邊國を栖スミカとして土民百姓等に服仕せらる。然れども交契忽に順熟して平家の一族追討の爲に上洛せしむる手合に。先木曾義仲を誅戮の後。平家を攻め傾けむが爲に。或時は峨々たる巖石に駿馬を鞭つて敵の爲に命を滅さむことを願す。或時は漫々たる大海に風波の難を凌ぎ身を海底に沈めむことを痛まずして。屍を鯨鯢アキトの腮アキトに懸く。しかのみならず甲冑を枕とし弓箭を業とする本意。併しながら亡魂の憤を休め奉り。年來の宿望を遂げむと欲する外は他事なし。剩へ義經五位の尉に補任せらるゝの條。當家の重職何事か是に若かむ。然りと雖ども今愛深く歎切なり。佛神の御助に非ざるより外は争でか愁訴を達せむ。之に依つて諸寺諸社の牛王寶印の裏を以て全く野

心を挾まざる旨。日本國中大小の神祇冥道を請じ驚かし奉りて。數通の起請文を書き進ずると云へども尙以て御宥免なし。夫吾國は神國なり。神は非禮を享け給はず。頼む所他にあらず。偏に貴殿廣大の御慈悲を仰ぎ。便宜を窺ひ上聞に達せしめ。秘計を廻し誤なき旨を宥せられ放免に預らば。積善の餘慶家門に及び榮華を永く子孫に傳へ。仍つて年來の愁眉を開き一期の安寧を得む。書紙に盡さず。併しながら省略せしめ候ひ畢んぬ。義經誠恐謹言。

元曆二年六月五日

源 義 經

進上 因幡守(大江廣元)殿

とぞ書かれたる。之を聞きしめして。二位殿を始め奉りて御前の女房達に至るまで涙をぞ流されける。儲こそ暫くさし置かれけれ。判官は都に院の御氣色よくて。京都の守護には義經に過ぎたる者あらじとの御氣色なり。萬事仰ぎ奉る。斯くて秋も暮れ冬の初にもなりしかば。梶原が愼安からずして頻に讒言申しければ。二位殿さもとや思はれける。

(義經記)

西 行 法 師

在俗の日は佐藤義清又憲清といふ。左衛門尉康清の子。鳥羽上皇に事へて北面の士となり。左兵衛尉に任ぜらる。後出家して西行といふ。和歌を善くす。集を山家集といふ。建久元年二月十六日卒す。年七十三。

出 家

作者 不詳

憲清(西行俗名)次の朝憲康を誘はんとて。大宮にうち寄りたりければ。門の邊に人多くたち騒ぎ。内にもさまんに悲しむ聲聞のれば。怪しと思ひて急ぎ進みより。何事ならんと思へば。殿は今宵寢死に死なせ給ひぬとて。十九になる妻。七十有餘なる母。あと枕に倒れ伏して泣き悲しむ。これを見るにかきくらす心地して。斯くあらんとて。思はざる外の世の慕なき事を語りけるならんとて。思ふにも。始めて驚くべき事ならねども。あやなしといふも愚なり。我が身も身と覺えず。いとどうとましき方のみしけて。朝に紅顔有りて世路に誇り。夕に白骨と成りて荒原に朽つと口すさび。

西行法師

小水の魚に心を澄し。屠所の羊に思を懸け。やがてこゝにてモトツリ髻切らまほしく思へども。今一度龍顔をも拜し。御暇をも申さんと思ひて。駒に鞭をすゝめて参りけり。抑も此の人は。憲清には二年の兄にて二十七ぞかし。老少不定の習とはいひながら。あはれに覺えて。

越えぬればまたも此の世にかへりこぬしでの山路ぞ悲しかりける

世の中を夢と見る／＼はかなくも猶おどろかぬ我がこゝろかな

とし月を如何で我が身に送りけんきのふ見し人今日はなき世に

秋も空しくのがれぬ。願はくば三寶。この度の出家障あらせ給ふなと祈り申しかへりけり。夕におよび宿所に差し入れば。年頃いとほしく思ふ娘の四つになるが。ふり分髪も肩過ぎぬ程にて。よにらうたけなる有様に。何心なく椽に走り出で。父のおはします嬉しさよ。何とや遅く御かへりありける。君の御ゆるし無かりけるにやなどいひて世にいたいけなき撫子の姿にて。狩衣の袂にすがりけるを類なく愛しくイトホは思へども。過ぎにしかた出家を止まりしも此の娘故なり。されば第六天の魔王は。一切衆生の佛になる事を支へんが爲に。妻子といふきづなをつけおき。出離の道をさまたぐ

といへり。これを知りながら如何で愛著の心をなさんや。これこそ陣の前の敵。煩惱のきづなを切る始なりと思ひて。此の娘を情なく椽より下へ蹴落したりければ。小き手を顔におほひ。猶父を慕ひ泣きければ。これにつけても心苦しくは思へども。聞き入れぬ様にて内へ入りぬ。傍の女房下部に至るまで。世にあひなき事に思ひて。こは如何なる事やらんと騒ぎ合へり。然れども彼の女房は。兼てより父の出家の志ある事を知りたりけん。娘の泣き悲しむをも驚く色なし。これにつけても哀に覺えて。

露のたま消ゆればまたもあるものをたのみもなきは我が身なりけり

月既に半に更けて。峯の嵐軒の松に響き。よその砧の聲愁ひ。霜にまじる蟲の音枕に弱り。よろづ心細からずといふ事なし。此の時に當りて。年頃の妻に向ひて。あるべき事どもさまざまに契れども。返事にも及ばず。只泣くより外の事ぞなき。昔阿難尊者アトワカニョ。麻登加女といふ外道の娘に逢ひ。既に禁戒を犯さんとし給ひしを。佛神通を以て見給ひて。文珠に仰せて佛頂神咒を充て給ひしかば。愆心やうやう失せて戒を破り給ふ事なし。これ一世二世の契にあらず。五百生の縁なりと佛説き給ひき。これらを思ふに。此の世一つにあらず。後世には必ず一つ蓮の身となり。共に無生忍ムシヤウニを證すべ

じと様々に語れども。猶返事もせず。大かた本意なくは思へども。とどまるべき道ならねば。心強く思ひ切りて。自ら髻を切りて持佛堂に投げ入れ。門の外へ出でけるが。さすが二十五年の間住みなれし宿なれば。只今ばかりと思ふにも心の内かきくらし。そのほか契をかうばしくせし妻。四つになる娘の事。かたぐせんかた無くて。思の涙は袖に餘り。道芝の露もあらそふばかりに覚え侍りけり。年頃西山のふもとに。相知りたりける聖のもとに走りつき。曉がたに及びて。遂に出家を遂げにけり。

(西行物語)

度

女

同

既に都に歸り上りて。昔のかりありし人の許へ尋ね行きて。夜もすがら古今の事ども語りて。互に袖をしほりけるに。主の語りいふやう。さてもさばかり愛イトホしがらせ給ひし姫君の事のいとほしさよ。御出家の後。やがて母御前も様かへて。一二年は姫君と一所におはせしが。九條の刑部卿の姫。冷泉殿の御局と申し。御子にしまるらせて。世にいとほしくしまるらせ給ひ候ひき。其の後母御前は高野の麓の天野といふ所に。

行ひておはしき。この七八年は。かりそめの音づれもなし。この程冷泉院殿むかへ腹の御娘に。伯耆の三位殿と申す人を婿にとりて。此の姫御前を上臈女房にし參らせて侍り。たゞ明暮は。神佛に御宮つかへをのみ祈り申して。今生にて父の御行衛を知らさせ給へとて。泣き給ふより外の御事なしと語りければ。西行聞き入れぬさまにもてなして歸りけり。かくて彼の娘をよびければ。我が父こそ。さやうに道心おこし給ひたることを聞きしかと思ひて。急ぎ行きて見れば。墨染の衣に瘦せし給ひたる有様。見もならはぬ心地してけれども。我が父と聞くからに。涙もとどまらず。西行もありし花のすがたにも似ず。世にけ高くもねびたる物かなと哀に覚え侍り。西行申しけるは。年頃は互に行衛も知らざりしに。今こそ見奉れ。抑も親となり子となる事。先世の契浅からず。されば我が教訓につき給ひてんやといふ。親にて渡らせ給へば。いかでか違ひ奉るべきといへば。悦びて。未だいとけなかりし時は。心ばかりは如何にも。もてなしかしづきて。院内へも參らせんなどこそ思ひしに。我が身かやうになる上は力及ばず。さればかく捨てながらも。常に心の亂るゝ時は。たゞ御上なり。さしもなき宮仕は人に侮らるゝ事なり。この世は。思へば夢幻の如し、若く盛なるもの。

老い衰ふるに程もなし。たゞ尼になりて。母と一所にて後世を助かり給へ。我極樂に詣でなば。急ぎ迎へ奉るべしといへば。暫しうち按じて涙を抑へ。我幼きよりして父母にもそひ奉らず。よろづ賤しき身となり侍る。されば如何ならんたよりもがな。さまかへんと思ひ侍りつるにといへば。西行喜びて。しかくの日。乳母の許へとぞ契りて歸りける。其の日にもなれば。髪など洗ひて待つ程に迎への車寄せたりけれ。既に出でんとしたりけるに。いかゞ思ひけん。暫くとて内へ入り。冷泉殿を。つくぐとまもりて。涙ぐみて出でにけり。さて待ち兼ねて冷泉殿より迎へにやつたりければ。早さまかへて出でにけりと聞きて。このちご六つの年より。片時立ちはなるゝことなくて。たぐひなくこそ思ひしに。我が思ふ程はなかりけりと恨み給ひにけり。たゞ出でざまに。我をつくぐとまほりし事こそ哀なれとて。泣き悲しみ給ひけり。

消えにけるもとの雪を思ふにもたれかは末の露の身ならぬ

(西行物語)

藤原師長

頼長の子。保元の初。父の事に座して土佐に流され。長寛二年赦されて還

る。安元中内大臣に進み。治承元年太政大臣に拜せらる。三年平清盛の爲に尾張に流され。建久三年薨す。

玄上の琵琶

……葉室時長(俗傳)

さる程に師長は武佐寺に著き給ふ。峰の嵐夜更くる程に身に入みて。都には引きかへて枕に近き鐘の聲曉の空に音信^{ナリ}れて。彼の遺愛寺の草庵の寢覺も斯くやと思ひ知られつゝ蒲生原をも過ぎ給へば。老會社の杉村に梢に白く懸る雪朝立つ袖に拂ひ敢へず。音に聞えし醒井の暗き岩根に出る水。柏原をも過ぎぬれば。美濃國關山にも懸りつゝ。谷川雪の底に聲咽び。嵐松の梢に時雨つゝ。日影も見えぬ木の下路心細くぞ越え給ふ。不破の關屋の板廂年經にけりと見置きつゝ妹瀬川にも留り給ふ。比は霜月二十日に及ぶことなれば。皆白妙の晴の空清き河瀬に映りつゝ。照る月波も澄み渡り二千里の外古人の心思ひやる旅の哀さ最深し。さる程に尾張の井戸田の里に著き給ふ。保元の昔は西海土佐の畑に遷されて愛別離苦の怨を含み。治承の今は東關尾張の國へ流され怨憎會苦の悲を含み給ふ。但心ある人は皆罪なくして配所の月を見むと願ふことなれば。

藤原師長

五〇七

大臣彼の唐太子の賓客白樂天の。元和十五年の秋九江郡の司馬に左遷せられ。潯陽の江の側に遊覽し給ひける古き事に思ひ慰みて。嗚海瀉汐路遙に遠見して。常は明月を望み浦吹く風に嘯きつゝ。琵琶を弾じ和歌を詠じて等閑に日を送り給ひけり。或夜當國第三宮熱田の社に詣で給へり。年經たる森の木間より漏り來る月のさし入りて。赤の玉垣色を添へ。和光利物の榭葉に引き立つ木綿四手ユウシテのとにかくに風に亂るゝ状態アリサマ。何事につけても神さびたる氣色なり。此の宮と申すは素戔嗚尊是なり。始は出雲國に宮造して八重立つ雲と云ふ三十一字の言葉は此の御時より生まれり。景行天皇御宇に此の砌に跡を垂れ給へり。師長公終夜神明納受の爲。初には法施を手向け奉り。後には琵琶をぞ弾じ給ひける。調彈數曲を盡し。夜漏深更に及んで流泉啄木楊眞藻の三曲を弾じ給ふ處に。本より無智の俗なれば情を知る人稀なり。邑老村女漁人野叟參り乗り頭を低れ耳を欽つと雖ども。更に清濁を分ち呂律を知ることとはなけれども、瓠巴琴を彈ぜしかば魚鱗踊り躍りき。虞公詞を發せしかば梁塵動き搖けり。物の妙を極むる時は自然の感を催す理にて。滿座涙を押へ諸人袂を絞りけり。まして神慮の御納受さこそは嬉しく覺すらめ。曉かけて吹く風は岸打つ波にや通ふらむ。五更の空の鳥の音も旅

寢の夢を驚かす。夜も漸う曙になり行けば月も西山に傾く。大臣御心を澄まして初には。

普合調中。花含ニ紛馥氣。流泉曲間。月舉ニ清明光。

と云ふ朗詠して重ねて。

願以ニ今生世俗文字業狂言綺言之誤ニ翻爲ニ當來世々讚佛乘之因轉法輪之緣。

詠せられて御祈念と覺しくて暫く物も仰せられず、良ありて御琵琶を掻き密せて。上立石像と云ふ秘曲を弾じ澄まし給へり。其の聲凄々切々として又諍々たり。嘈々竊々として錯り雜り弾くに。大絃小絃の金柱の操大珠小珠の玉盤に落つるに相似たり。御祈誓の驗にや御納受の至か。神明の感應と覺しくて寶殿大に動搖し。千早振玉の簾のさゞめきけり。靈驗に恐れて大臣暫く琵琶を閑き給ひけり。明神白狸に乗り給ひ示して曰く。我天上にしては文曲星と顯れて一切衆生の本命元辰として是を化益し、此の國に天降つては赤青童子と示して一切衆生に珍寶を與へ。今此の社壇に垂跡して年久し。而るを汝が秘曲に堪へず我今影向せり。君配所に下り給はずば争でか此の秘曲を聞くべき。歸京の所願疑なし。必ず後本位給ふべしと御託宣あつて明神上らせ給ひたり

しかば。諸人身の毛よだちて奇異の信心を發す。大臣も平家斯る惡所を致さずば。今此の瑞相を拜み奉るべしや。災は幸と云ふことは斯様の事にやと。感涙を流し給ひても亦未頼もしくぞ覺しける。

此の師長公保元の昔西國へ流され給ひしに。年十二計と見えて優なる童一人御身に參りて朝夕に仕へけり。彼の國(土佐)近くなりて童暇を申して罷去らむとしければ。大臣之を怪んで汝は何の國の如何なる者ぞと問ひ給へば。京都に侍る者なり。君の流罪の由を承つて路の程の御徒然に參りたりと申す。都にても御覽じたりとも覺えず。京は何の所ぞと尋ぬ給ひければ。大内裏に常に出入り侍るなりと申す。我内裏に奉公して年久し。されども斯る童在りとも覺えざるものをやとて能く能く尋ね給ひければ。清涼殿の御節の箱に立上と申す琵琶なりとて搔消すやうに失せにけり。されば師長流罪の後は立上の甲離れ絃切れて天下の騒にぞありける。理や西國までましましたりければなり。此の大臣配所の徒然を慰まむとて。宮路山へ分け入り給ひつゝ木々の紅葉を遊覽あり。比は十月二十日餘の事なれば。梢疎にして落葉道を埋み。白霧山を阻て鳥聲幽なり。山又山の奥なれば旅寢の里も見えざりけり。後は松山峨々として白石

瀧の水流れ出で。苔石面に生ひて風尾上に冷まじ。眞に石上珍泉の便を得たる勝地なり。御心の澄みければ上立の曲を調べつべくぞ覺しける。岩の上に虎の皮の御敷皮を打ち敷き。紫藤の甲の御琵琶一面を搔き居ゑて撥を取り絃を打ち鳴し給へり。四絃彈の中には宮商彈を宗とし。五絃彈の中には玉しやう彈を先とす。軽く搦し慢く撚りて撥ひ後挑け。初めて霓裳を爲す後には六么す。大絃は嘈々として急雨の如し。小絃は竊々として私語の如し。第一第二の絃の聲は索々たり。春の鶯關々として花の本に滑なり。第三第四の絃の聲は竊々たり。閑泉幽咽して氷の下に眠れ。鳳凰鶯鶯の和鳴の聲を添へずと雖も。事の體山祇感を垂れ給ふらむと覺えたり。寂しき梢なれども萩花啄木は空に玲瓏の響を送る。其の時水の底より青黒色の鬼神出現して。膝拍子を打つて和に嚴しき音を以つて御琵琶につきて唱歌せり。何者の仕業なるらむと覺束なし。曲終り撥を納め給ふ時。我は是此の水の底に多くの年月を経しかども。未だ是程の面白く感でたき御事をば承り及ばず。此の御悅には今十日の内に歸洛せさせ奉らむと申しも終らず搔消すやうにぞ失せにける。水神の所業と著し。此等の事を思し召し合するにも惡縁は即ち善縁の始なりけりと今更思ひ知り給ふ。されば明神の御詫宣水神の悦

申の驗にや。第五箇日と申すに歸洛の奉書を下されたり。管絃の音曲を極めて當代までも妙音院の大相國と申すは此の大臣の御事なり。

此の大臣歸洛の後御參内あり。御前にて琵琶を調べ給ひければ。月卿雲客頭を低れ簾中堂上目を文にして。如何なる秘曲をか弾じ給はんすらむと思されけるに。珍しからぬ還城樂をぞ弾じ給ふ皆人思はずに思へりけり。されども大臣御心には深き所存おはしけり。還城樂とは都に歸つて樂むと云ふ訓のあれば。昨日は東關の外に遷され草庵に懶き住まひなりしかども、今日は北關の内に仕へて槐門に樂み榮えておはしければ。此の曲を奏し給ふも道理なりと後にぞ思ひ合せられける。
(源平盛衰記)

藤原長方

顯長の子。清盛の都を福原に遷すや。長方復舊の可なるを陳ぶ。清盛之に従ふ。建久三年薨す。年五十三。

兩京の定……

作者不詳

六波羅の太政入道(清盛)福原の京建て、皆渡り居て後。殊の外に程經て。古京と新京と孰か勝れると云ふ定をせむとて。古京に残りて居たるさもある人ども皆呼び下しけるに。人皆入道の心を怖れて思ふばかりも言ひ開かざりけり。長方卿獨少しも所を置かず。此の京を誘りて詞も惜まず散々に言ひけり。さて舊の京の善きやうを言ひて。終に其の日の事彼の人の定によりて古京へ還るべき儀になりけり。後に其の座に在りける上達部の長方卿に逢ひて。さても淺ましかりし事かな。さばかりの悪人のいみじと思ひて建てたる京を。さ程には如何に言はれしぞ。言ひ趣けて歸京の儀あればこそあれ。云ふ效なく腹立ちなば如何し給はしと云ひければ。此の事我が思にはさる義あり。入道の心に適はむとてこそさは言ひしか。其の故は。廣く漢家本朝を考ふるに。よからぬ新儀行ひたる者初に思ひ立つ折は中中人に云ひ合する事なし。其の所業少しば。早此の事悔しうなりにけりと云ふ事を知りにき。さればなじかは言葉を惜むべきとぞ言はれける。實に其の後に人に超えられむとしける時も。此の入道よきやうに申して。長方卿は殊の外に物覺えたる人なり。容易く人に超越せしむべからずとて後ま

でも方人をせられけるなり。梅小路中納言の兩京の定とて其の時の人の口にあり。

(續古事談)

曾我五郎時致

河津祐泰の子。小字宮王丸。父祐泰工藤祐經の爲に殺され。建久四年時致
兄と共に鎌倉富士野に復す。五郎丸の爲に捕へられ。遂に斬らる。

其の明日

作者不詳

さても仰を承つて小平次罷り出で。御厩の下部總追國光五郎を預り。既に御厩の柱に縛り付けて其の夜は守り明しける。大將殿(頼朝)より尋ね聞し召さるべき事あり。曾我の五郎連れて参れとの御使ありければ。小平次繩取にて参りけるを。母方の叔父伊豆國の住人に小川の三郎祐定申しけるは。如何に小平次侍程の者に繩つけすとも具して参れかし。山賊海賊の輩にあらざれば逃げ失ふべきにも非ず。事により人にこそよれ。無下に情なしと言ひければ。五郎聞きて誰一言の情を残す者のなきに。御分の

芳志の嬉しさよ。さりながら御分時致に親しきこと皆人知れり。斯やうになりて親類入るべからず。詮なき沙汰して人に聞かれ加擔人したりと言はれ給ふな。人の上を善く言ふ者はなきぞとよ。時致は盜強盜せざれば千條の繩は付くとも恥ならず。是は父の爲に誦み奉りし法華經の紐よとて。事とも思はざる氣色して御坪の内へぞ引き入れられける。其の上敵の爲に捕はるゝ者時致一人にも限らず。般湯は夏臺に囚はれ女王は菱里に捕はる。更に恥辱に非ずとてうち笑ひてぞ居たりける。哀と言はぬ者ぞなき。五郎御前に参りければ。君御覽じて是が曾我の五郎と云ふ者か。某が事候ふよとて立ち上り。繩取中に引き立てければ。警護の者共狼藉なりとて引き据ゑたり。其の時相模國の住人新開の荒四郎實光。伊豆國の住人鹿野の助宗持座敷を立つて。申し上ぐべき事あらば急ぎ申し候へと言ふ。時致聞きて大の眼を見出して彼等を礎と睨みて。見苦しき人々。御前遠くばさもありなむ。近ければ直に申すべし。さやうなれば問はれて申す白狀に似たり。問はるゝによつて申すまじき事申すに非ず。面々骨折に退き候へとて嘲笑ひてぞ居たりける。君聞し召され。神妙に申したり。各退き候へ。頼朝直に聞くべしと仰せ下されけり。扱五郎居直り。顔振上げて高らかに申しけるは。兄にて

候ふ十郎が最期に申し置きて候ふ。我等が父を祐經に討たせ候ひしより以來。年月狙ひし心の中いかばかりとか思し召され候ふ。それにつきかひては一年君御上洛の時。酒匂の宿より附き奉り。祐經が御供して候ひしを泊々に徘徊し。便宜を窺ひ候ひしかども適はで。京に上り。四條の町にて鐵カネよき太刀を買ひ取り。昨夕ユラベの夜半に御前にて本意を遂げ候ひぬ。今は何をか思ひ残して命惜しく候ふべき。御恩には今一時も疾く頭を刎ねられ候へとぞ申しける。彼は京へは上らざりしかども。稍根の別當に契約せし故。太刀の出所をも隠し。又は別當の罪科もやと思ひて斯やうにぞ申したりける。君聞し召され。此の太刀の出所隠さむ爲にこそ申すらむ。更に別當の咎にあらず。先祖重代の太刀。箱根の御山に籠めし由豫てより傳へ聞く。如何にもして取り出さばやと思ひしを。神物になる間力及ばざりつるに。唯今頼朝が手に渡る事。偏に正八幡大菩薩の御計らひと覺えたり。かやうの事無くては如何にして再主になるべきとて。自御頂戴ありて錦の袋に入れ深く納め給ふ。御重寶の其の一つなり。代々傳はりけるとかや。稍ありて君仰せられけるは。此の事會我の父母に知らせけるか。五郎承つて。日本の大將軍の仰とも存じ候はぬ者かな。當代ならず孰の世にか繼子が惡事企てむとて暇乞ひ

候はむに。神妙なり急ぎ僻事して我惑者になせとて喜ぶ父や候ふべき。又母の慈悲は山野の獸物江河の魚族ウナギまでも子を思ふ志の深き事は。父には母勝れたりとこそ申し候へ。況や人界に生を受けて二十歳餘の子供が命死なむとて母に知らせ候はむに。急ぎ死にて物思はせよとて喜び出し立つる母や候ふべき。御けいしやくとぞ申しける。扱親しき者共には如何に。身貧にして世にある人々に斯くと申し候はむは。唯手を捧げて之を縛らせ。首を伸べて之を斬れとこそ申し候はむすれ。誰かは頼まれ候ふべき。愚なる御説かなとぞ申しける。君實にもとや思し召しけむ。父母親類に至る迄は仔細なし。又祐經は伊豆より鎌倉へ繁く通ひしに。道にては狙はざりつるか。さん候ふ。此の四五箇年の間。足柄。箱根。湯本。國府津。酒匂。大磯。小磯。とがみが原。もろこし。相模川。懷島。やつまとが原。腰越。稻村。由井の濱。深澤邊に徘徊し。野路山路宿々泊々にて狙ひしかども。敵の連るゝ時は四五十騎。連れざる時も二三十騎。我々は連るる時は兄弟二人。連れざる時は唯一人。思ひながらも空しく今まで延び候ひぬ。又祐經は敵なれば限あり。何とて頼朝がそゞろなる侍共をば多く斬りけるぞ。其こそ道理コトワリにて候へ。御所中に参りて斯る狼藉を仕る程にては。千萬騎にて候ふとも

餘さじと存する所に。小賢しく敵は何處にあるぞと尋ね候ふ間。公には忠を盡し。忠には命を捨つる習神妙に存じて。是にありと申す聲に驚きて足の立所も知らず逃げ延びし間。罪造と存じて追うて斬殺すに及ばず。戦ふばかりの側太刀形の如く當てたるまでに候ふ。表傳はよも候はじ。唯今召し出して御覽候へと申しければ。頓て御使して聞し召されけるに。申す如く表傷はなかりけり。面目なうぞ聞えける。又往藤内を何とて討ちけるぞ。恐れ入つて候へども。年頃の傍輩の討たれ候ふを見捨て、逃ぐる不覺人や候ふべき。實に健氣に振舞ひ候ひつる者をや。人富みて故郷に歸らざるは錦を著て夜行くが如しと言ふ古き語コトバをやりたりけむ。所領安堵の印本國に下りしが。祐經に暇乞とて途より歸りての討死不便なりとぞ申しける。此の言葉により。神妙なり。是も頼朝が先途に立ちけるよとて。本領子孫に於て仔細なしと重ねて御判下されけり。是も兄の十郎が館を出でし時。往藤内が妻子さこそ歎かむ。無慚なりしと言ひし言葉の末にぞ申しける。偏に時致が情によつて所領安堵す。有り難しとぞ感じける。稍ありて頼朝をも敵と思ひけるかと御尋ねありければ。五郎承つて。さん候ふ。身に思の候ひし時は木も萱も怖しく命も惜しく存じ候ひしが。敵討つての後は如何なる天魔疫神

なりともと存じ候ふ。まして其の外は活きたる者とも思ひ候はず。されば千萬人の侍よりも君一人をこそ思ひ掛け奉りしかども。御果報めでたき御事にて渡らせ給へば。御運に抑されて斯やうに罷りなりて候ふと申したりければ。君聞しめし。敵討つての後身を軽く思ふは道理なり。頼朝を何とて敵と思ひけるぞ。自業自得果とは存じ候へども。伊東入道が謀叛により我等が本領永く絶えぬ。先祖の敵にては渡らせ給はずや。又は閻魔王の前にて日本の大將軍鎌倉殿を手に掛け奉りぬと申さば。一の罪や赦さるべきと。随分窺ひ申しつれどもと申す。さて五郎丸には如何にして抱かれけるぞ。其は彼の童を女と見做し。何事か候はむと存じて不慮に捕られて候ふ。斯様なるべしと存ずるものならば。唯一太刀の勝負にて候はむする者をとて。後悔益なし。是偏に宿根の盡きぬる故なり。實にや羅網の鳥は高く飛ばざるを恨み。吞鉤の魚は鱗を忍ばざるを歎くとはようらの語コトバなるをや。今こそ知られたり。君の御佩刀の鐵の程をも見奉り。時致が腐太刀の刃の程をも試し候はむ者をと。言葉を放ちてぞ申しける。君聞しめされ。猛將勇士も運の盡きぬる上はと仰せられ。雙眼より御涙を流させ給ひて。これ聞き候へ人々。日比は思はぬ事なれども唯今頼朝に捕はれて當座の構の言葉なり。適は

ぬまでも遁れむとこそ言ふべきに。露ほども命を惜まね者かな。世に在りなば思ひ留まる事もありぬべし。餘の侍千萬人よりも斯様の者をこそ一人なりとも召し使ひたけれ。無慙の者の心やな。惜しき武士かなとて御袖を顔に當てさせ給ひければ。御前祇候の侍共心あるも無きも皆涙流さぬはなかりけり。稍ありて君御涙を抑へさせ給ひて。扱十郎が舉動を聞き召すに。孰を分きて言ひ難し。眞實に討たれたるやらむと仰せられければ。新田に御尋ね候へ。黒鞘卷に赤銅作の太刀村千鳥の直垂ならば眞實にて候ふと申す。さらば實檢あるべしとて。新田の四郎を召されければ。黒鞘卷に赤銅作の折太刀。村千鳥の直垂に頸を包みて童に持たせ。五郎が弓手の方を間近く頸を見せてぞ通りける。五郎は今まで思ふ事なく高言してあるけるが。兄が頸を一目見て膽魂も失ひ涙に咽ぶ有様は。盛なる朝顔の日影に萎るゝ如くにて。無慙とも云ふも餘あり。稍ありて申しけるは。羨ましくも先立ち給ふものかな。同じ兄弟と言ひながら幼少より親の敵に志深くして一所とこそ契りしに。祐成は昨夜夜半に討たれ給ふに。時致は心ならず今迄長らふる事の無念さよ。誰か此の世に長らへて候ふべき。死出の山にて待ち給へ。頓て追ひ付き奉り。三途の川をば手に手を取り組み渡り。閻魔王宮へは諸共

にと言ひも果てず涙に咽ひけり。袖にて顔をも押へけれども高手小手に縛められければ。左手へ傾き右手へ俯き。尙しも溢るゝ涙をば膝に顔を持たせつゝ。唯潸々と泣き居たり。和田島山を始として皆袖をぞ濡されける。斯る所に十郎が太刀を御侍に取り渡し。善きぞ悪しきぞと申し合ひける。中にも昨夜追立てられ柴垣を破り逃げたりし新開の荒四郎實光進み出で、申しけるは。曾我の者共は敵討つて高名はしたれども。太刀こそ悪き太刀を持ちたれ。是程のえせ太刀を持ちて君の御前にて斯る大軍しける不思議さよと言ひければ。時致聞きて眼を見出し荒四郎を礎と睨んで。吾殿は河處を見てえせ太刀とは申すぞ。唯今御前にて申して無用の事なれども。男の悪き太刀持ちたるは恥なる間申すなり。それこそや殿よく聞け。平家に聞えし新中納言(知盛)の太刀よ。屋島の合戦に如何し給ひけむ船中に取り忘れ給ひしを。曾我の太郎取つて九郎判官へ参らせしを。義經。神妙なり。さりながら御分高名して取りたる太刀なれば。汝に取らするとて賜はりたる太刀なり。奥州丸と云ふ太刀是なり。祐成が元服せし時。曾我殿の賜ひたるぞとよ。其に就きては思の任に敵を討ち取りぬ。兄弟して斬り留むる者一二百人こそあるらむ。是程耐へたる太刀を如何でえせ太刀なるべき。實光尙も止

まらで。既に太刀折れぬる上はと言ひければ。五郎阿々かうかうとうち笑ひ。人の太刀悪しと言ふ人定めて善き太刀は持ちぬらむ。但彼のえせ太刀に追はれて小柴垣を破りて逃げしは如何に。御分の善き太刀も心憎からずと言ひければ。聞く人皆汗を流さぬはなかりけり。

(曾我物語)

曾我十郎祐成

五郎時致の兄。小字一萬。父の讎を裾野に復し。仁田忠常の爲に殺さる。時に建久四年。年二十二。

小袖乞

作者 不詳

十郎御前に畏り扇笏に執り申しけるは。奉公を致し御恩被るべき身にては候はねども。末代の物語に富士野の御狩の御供に思ひ立ちて候ふ。恐入りたる申事にて候へども御小袖一つ貸し給はり候へと申しければ。母聞きて。君臣を使ふに禮を以てし臣君に仕ふるに忠を以てすと論語の中に候ふぞや。何の忠によつてか御感もあるべき。御

恩なくば無益なり。あはれ此の度の御供思ひ留まり給へかし。其を如何にと云ふに。伊東殿の父奥野の狩場より病づきて歸り幾程なくて死に給ひぬ。御分の父河津殿狩場にて討たれ給ひぬ。斯る事共を思ひ續くるに、狩場程憂き所なし。而も謀叛の者の末上にも御許なきぞかし。又馬鞍見苦しくて物を見れば却つて人に見らるゝものを。思ひ留りて親しき人々の方にて慰み給へ。斯やうに申せば小袖惜むに似たり。善くはなけれども紋柄面白ければとて。秋の野に草盡縫うたる練貫の小袖一つ取り出して賜ひにけり。十郎畏つて障子の中にて著更へ。我が小袖をばうち置きて出でぬ。亡き跡の形見にとぞ思ひ置きたりける。

(曾我物語)

弟思ひ

同

十郎は我が所にて五郎を待てども見えざりけり。餘に遅ければ又母の方へ行きて見たれば。五郎内までは入り得ず廣縁に泣き萎れて居たり。餘りに無慙に覺えて障子を引き明け畏つて。五郎が理をつくづくと聞き居たり。稍ありて。某兄弟數多候へども身の貧なるに由つて處々の住まひ仕る。唯彼の者一人こそ連れ添ひて候へ。祐成を不

便に思しめされ候はゞ御慈悲を以て御赦し候へかし。御子とても御身に添ふ者我等二人ならでは候はぬかし。母聞きて。心に合ふ時は吳越も昆弟たり。合はざる時は骨肉も敵徒たり。智者の敵とはなるとも愚者の伴とはなるべからず。位の高からぬをば歎かざれ。智慧の深からぬをば歎くべしとは漢書の語ならずや。十郎承りて。其はさる事にて候へども。觀經の文を見るに。諸佛念衆生衆生不念佛父母常念子子不念父母と説かれて候ふ。此の文を釋すれば。佛は衆生を思しめさるれども衆生佛を思ひ奉らぬところ見えて候へ。親として子を思はぬはなきものをや。祐成重ねて申しけるは。一旦の御心を背き法師にならざるは不孝には似て候へども。父母に志の深き事は法師によるべからず。僧俗の形にもよらず。時致箱根に候ひし時法華經一部讀み覺え。父の御爲に早二百六十部讀誦す。毎日六萬遍の念佛怠らずして父に回向申すと承り候へば。大地を戴き給ふ堅牢地神も地の重き事は候ふまじ。不孝の者の蹈む跡骨髓に徹りて悲み給ふなり。一つは彼の御跡をも弔ひ。一つは御慈悲を以つて祐成に御宥し候へかし。父に幼少より後れ。親しき者は身貧に候へば目も懸けず。母ならずして誰か憐み給ふべきに。かやうに御心強くましませば。立ち寄る蔭もなきまゝに乞食とならむ事不便

に覺え候ふぞや。あはれ實に今を限と申すならば如何易かるべきに、申すべき事ならねば忍の涙に目も昏れて。暫しは物をも言はざりけり。尙も宥すと宣はねば。十郎忿りて見ばやと思ひて。持ちたる扇さつと開き大に目を見出し。とても斯くても生効なき冠者。ありても何か益あらむ。御前に召し出し細首打ち落して見參に入れむと。大聲を出して座敷を立つ。女房達驚き。いかにやとて取り附く袖にひかれて。板敷荒く踏み鳴し忿りければ。母も驚き縄りつき。物に狂ふかや殿。身貧にして思ふ事適はねどとて現在の弟の首を斬ることやある。其程までは思はぬぞ。暫しや殿とて取りつき給ふ。事こそ善けれと思ひければ。助け候はむ御宥し候へと言ふ。母さらば宥す留まり候へと宣へば。其の時十郎忿を止めて。聲を柔にし座敷に直り畏り居たりける。されども忍の涙の進みければ。とかく物をば言はざりけり。五郎も恨の涙を引きかへて嬉しさの忍の涙顔にして。前後を更に辨へず。唯慎んでぞ居たりける。

稍ありて十郎座敷を立ち。御宥あるぞ時致。此方へ參り候へ。五郎は萎るゝ袖に忍びかね。暫しは出でこそ兼ねたりけれ。暫ありて時致袖打ち拂ひ顔押し拭ひ出でければ。十郎も嬉しく哀にてうち傾き居たり。兄弟共に物をも言はず。唯潜々と泣き居た

り。母此の有様を見て。實にや親子の中程哀なる事なし。年若い身貧にして人数ならぬ妾が詞一つを重くして泣き萎るゝ無慙さよ。不具なる子をだにも親は悲む習ぞかし。いかでか憎かるべき唯善かれと思ふ故なりと言ひも分かで母も涙を流しけり。其の後兄弟の者共畏り居たるを母熱々と視り。いつしかの心地して。汝白を愚にや思ひけむ。十郎がある處を見るに五郎ありと云ふ時は心安し。無しと聞けば心元なくて妾も立ちて見るぞとよ。此の三年が程うち添はで怨めしく悔しく思はれて熱々と見るに。直垂の衣紋袴の著際烏帽子の座敷に至るまで。父の思ひ出でられて昔に袖ぞ萎れける。さても五郎は箱根にても聞きつらむ。十郎はいかにして經文をば知りけるぞや。祐成承り、馬瘡せては毛長く嘶ゆるに力なし。人貧にして智短く言葉賤し。何によつてか尊くも候ふべき。女房達聞きて勸學院の雀とかや申しければ。母うち笑みてそれぞれ酒飲ませよとありければ。種々の肴盃取り添へて二人の前にぞ置きたりける。斯くて酒も過ぎければ。十郎畏つて。今度御狩に罷り出で。兄弟が中に如何なる功名をも仕り思はずの御恩にも預り候はゞ。卒塔婆の一本をも心安く刻み。父聖靈に供へ奉らばやと存じ候ふ。母聞きて。などやらむ此の度の御狩の御供心元なく覺ゆるぞや。よき程に

候はゞ思ひ留り給へかし。さりながら衣裳の望もあれば小袖惜むに似たり。それぞれ女房達と宣へば。白き唐綾に鶴の丸所々に縫ひたる小袖一つ取り出し。十郎にも取らせぬぞ。失はずして返し候へ。十郎は常に小袖を借りて返さず。是は曾我殿見知りたる小袖なり。一度とも見えすば又例の子供に取らせたりと思はれむも恥かし。小袖を認めて置くべし。構へて構へて疾く歸り給へとありければ。承り候ふとて練貫の著損じたるに脱ぎ更へ。見苦しく候へども人に賜ひ候へとぞ置きにける。小袖の欲しきにはあらねども。互の形見の哀衣袖懐かしくうち置きけり。 (曾我物語)

後の世の形身……………同

さて兄弟の人々は我が方様に歸り。小袖を中に置き。嬉しくも推參しつるものかな。唯今宥されずしては多生劫を経るとも適ふまじ。生きて二度歸るべきやうに小袖返せと仰せられつるこそ愚なれ。何しに返せとは言ひつらむ。神ならぬ身の悲しさよと後悔し給はむ事今のやうに覺えたりとて。うち傾きてぞ泣き居たる。我等世にありて心のまゝに親の孝養をも致さば。是程まで思はぬ事もありぬべし。此の三年こそ不興の

身にては候へ。其さへ戀しく思ひ奉りし折は。或時は物越にも見奉りて慰みしに。唯今御宥を被り一日だにもなくして出でむことこそ悲しけれ。死に給へる父を思ひて孝養せむとすれば。生き給へる母に物を思はせ奉る。されば我等程親に縁なき者はなし。後の世まで盡きせぬ物は唯手跡に過ぎたる形見はなし。今や我等一筆づつ忘形見を殘さむとて。墨磨り流しかくばかり。

今日出でゝめぐり逢はずは小車のこのわのうちに無しと知れ君
祐成生年二十二歳後の世の形見

とぞ書きける。

ちゝぶ山おろす嵐の烈しきに枝散り果てゝはゝいかにせむ

五郎時致生年二十歳 親子は一世の契とは申せども必浄土にては参り逢ふべし
とこそ書きたりけれ。各は此處にて我等討たれぬと聞き給はゞ。此の所に轉び入りて伏し沈み給ふべし。いざや拵へせむとて疊敷き直し馬道の塵打ち拂ひ。先づ見給ふやうにとて差入の障子の際にぞ置きたりける。空しき人をば常の所よりは出さず。我等死人に同じとて厭の明間より出でたりける。最後の文にこそかやうの事まで書きにけ

れ。斯くて出でけるが。いざや今一度母を見奉らむとて暇乞にぞ出でたりける。

(曾我物語)

重源法師

源空上人の弟子。重源字は俊乘。紀季重が子。仁安二年入宋。治承中事を幹して東大寺を再建す。建久六年寂す。年七十餘。

古履舊杖

師

鍊

釋重源は。黒谷源空の徒なり。仁安二年。海に跨つて宋に入る。適明菴西公と四明に遇ふ。相伴うて台山に上り。蒸餅峯の阿羅漢を拜す。又明州に返りて。鄞嶺の舍利の瑞光を見る。三年秋。明菴と偕に歸る。治承四年。東大寺寇火に罹る。朝廷源をして幹事を領せしむ。源以爲へらく。昔聖武大帝斯の役を擧げ。王者の威福を以て猶幹縁を天下に募る。蓋し勝利を馬姓に分つなり。故に聖跡に曰はく。一針一草各人各佛と。況んや近世王室多故にして。官司の獨有に非ざるなり。我蓋んぞ最負して官造を

重源法師

裨タスけざらんや。源巧思有り。乃ち一輪車を作る。大き身を容るべし。車の左に詔書。右には幹疏を貼し。州縣を巡行して萬民を勸勵す。其巨楹碩梁。長さ二百尺。大き數十圍。源巧畫妙計。運轉すること神の如し。梓人皆附いて指授を乞ふ。十餘歳。建久六年春三月落慶す。上太上皇百司を従へて寺に幸し。大將軍源頼朝監護宿衛す。法事の壯觀たり。源没し。遺像を寺に置く。予東大寺に遊ぶ。衆人一所に聚る。予怪みて往く。古屐舊杖。人争うて頂戴す。予故を問ふ。對者曰はく。源上人の遺具なり。寺に詣する者。必ず先捧戴摩持すと。予其の杖屐を見るに。光瑩如たり。蓋し把玩の爲なり。是を以て源の遺愛を知る。

(元亨釋書)

源 頼 朝

義朝の第三子。治承四年。以仁王の令を奉じて兵を起し。府を鎌倉に定めて天下に令す。正治元年正月十三日薨す。年五十三。

石橋山合戦……

作者不詳

二十三日癸卯。陰。夜に入りて甚雨沃ぐが如し。今日寅尅。武衛北條殿父子。盛長。茂光。實平以下三百餘騎を相率る。相模國石橋山に陣し給ふ。此の間。件の令旨を以て御旗の横の上に付けられ。中四郎惟重之を持ち。父頼隆白幣を上箭に付け。御後に候す。爰に同國の住人大庭三郎景親。俣野五郎景久。河村三郎義秀。澁谷庄司重國。糟屋權守盛久。海老名源三季貞。曾我太郎助信。瀧口三郎經俊。毛利太郎景行。長尾新五爲宗。同新六定景。原宗三郎景房。同四郎義行。竝に熊谷二郎直實以下。平家被官の輩。三千餘騎の精兵を率る。同じく石橋山の邊に在り。兩陣の際一谷を隔つ。景親の士率の中。飯田五郎家義。志を武衛に通じ奉るに依り。馳せ參ぜん擬すると雖も。景親の從軍道路に列るの間。意はずも彼の陣に在り。亦伊東二郎祐親法師。三百餘騎を率ひて武衛の陣の後山に宿し。之を襲ひ奉らんと欲す。三浦の輩は曉天に及ぶに依り。丸子河の邊に宿し。郎從等を遣り。景親の黨類家屋を焼失す。其の煙半天に聳ゆ。景親等遙に之を見て。三浦の輩の所爲たるの由を知り訖り。相議して云く。今日既に黄昏に臨むと雖も。合戦を遂ぐ可し。明日を期すれば。三浦衆馳せ加り。定めて喪敗し難からんかの由。群議事訖り。數千の強兵。武衛の陣を襲ひ攻む。而るに源家の從

兵を計るに。彼の大軍に比し難きも。皆朋好を重んずるに依り。只死を效さんと乞ふ。然る間。佐那田余一義忠。竝に武藤三郎。及び郎從豊三家康等命を殞す。景親彌勝に乘る。曉天に至つて武衛梶山の中に逃れしめ給ふ。時に疾風心を惱まし。暴雨身を勞す。景親之を追ひ奉り。矢石を發するの處。家義景親の陣中に相交りながら。武衛を遁し奉らん爲に。我が衆六騎を引き分け。景親と戦ふ。此の隙を以て梶山に入らしめ給ふ云々。

二十四日甲辰。武衛梶山内堀口の邊に陣し給ふ。大庭三郎景親三千餘騎を相率ひ。重ねて競ひ走る。武衛後峯に逃れしめ給ふ。此の間加藤次景廉。大見平治實政。御後に留り。景親を防禦す。而して景廉の父加藤五景員。實政の兄大見平太政光。各子を思ひ弟を憐むに依り。前路に進まず。駕を控へて矢を發す。此の外加藤太光員。佐々木四郎高綱。天野藤内遠景。同平内光家。堀藤治親家。同四郎助政。同じく轡を並せて攻め戦ふ。景員以下の乗馬。多く矢に中りて斃る。武衛又駕を廻し。百發百中の藝を振ひ。相戦はるゝこと度々に及ぶ。其の矢必ず羽を飲まざるは莫く。射殺す所の者多々なり。箭既に窮るの間。景廉御駕の轡を取り。深山に引き奉るの處。景親の群兵

四五段の際に近づき來る。仍りて高綱。遠景。景廉等。數々反還り合せて矢を發す。北條殿父子三人。亦景親等と攻め戦はしめ給ふに依り。筋力漸く疲れ。峯嶺に登る能はざるの間。武衛に従ひ奉らず。茲に景員。光員。景廉。祐茂。親家。實政等御共に候す可きの由を申す。北條殿敢へて以て然る可からず。早く武衛を尋ね奉る可き旨命ぜらるゝ間。各走つて數町の險阻に攀ち登るの處。武衛は臥木の上に立たしめ給ひ。實平其の傍に候す。武衛此の輩の參著を待ち悦ばしめ給ふ。實平云はく。各無爲に參上。喜ぶ可しと雖も。人數を率るしめ給へば。此の山に御隠居。定めて遂げ難からんか。御一身に於ては。縦へ旬月を涉ると雖も。實平計略を加へば。隠し奉る可し云々。而も此の輩。皆御共に候す可きの由を申し。又御許容の氣有り。實平重ねて申して云く。今の別離は。後の大幸なり。公私命を全し。計を外に廻さば。蓋ぞ會稽の恥を雪がざらんや云々。之に依りて皆分散し。悲涙眼に遮り。行歩道を失せり云々。(東鑑)

人主の體……………同

十九日戊辰(治承四年九月)。上總權介廣常。當國周東。周西。伊南。伊北。廳南。

應北の輩等を催し具し。二萬騎を率ゐる。隅田河の邊に參上す。武衛頗る彼の遲參を瞋り。敢へて以て許容の氣無し。廣常潛に以爲らく。當時は率土皆平相國禪閣の管領に非ざるは無し。茲に武衛は流人なり。輒ち義兵を擧げらるゝの間。其の形勢高喚の相無ければ。直ちに之を討ち取りて。平家に獻す可き者なりと。仍りて内に二圖の存念を抱くと雖も。外歸伏の儀を備へて參る。然れば此の數萬の合力を得ば。感悅せらる可きかの由思ひ儲くるの處。遲參を咎めらるゝの景色あり。殆んど人主の體に叶へ。之に依りて忽ち實心を變じ。和順し奉る云々。

(東鑑)

報

恩

………藥室時長(俗傳)

同じき(元暦元)正月十五日。前大納言頼盛卿上洛し給へり。關東にて賞翫せられ給ひける事。心も詞も及び難し。此の人鎌倉へ下り給ひける事は。平家都を落ち給ひしに共に。うち具して下り給ふ程に。兵衛佐(頼朝)兼ての狀を憑みて。道より返し給へり。彼の狀には。遁れ難き命を寛して生けられ奉りし事。偏に池の尼御前の芳恩に侍り。其の御志。生々に忘れ難し。頼朝世に經廻せば御方に奉公仕りて。彼の御恩に報じ奉るべし。

此の條矯飭の作言にはあらず。且は二所八幡の御知見を仰ぐと度々申し上げられたりければ。深く其の狀を憑みて落ち残り給ひたれども。頼朝こそ斯くは思ふとも。木曾冠者。十郎藏人我に情を置くべきにあらず。如何なり行かむすらむ。波にも著かず磯にも著かぬ風情して。肝心を碎きて過ぎ給ひける程に。行家は木曾に恐れて都の外に落ちぬ。義仲は九郎冠者に討たれければ。聊安堵し給へるに。兵衛佐より重ねて狀を上せ給へり。上洛を企て參り申すべきの處。其の條當時難治に侍り。急ぎ御下向あらば畏り存すべし。且は故尼御前を見奉ると思ひ侍るべし。宗清左衛門尉同じく召し具せらるべしと申されたりけるに依つて。下向し給ひけり。彌平左衛門尉宗清と云ふは。本は平家の一門なりけり。當時侍振舞にて池殿には相傳專一の者なり。頼朝の命に任せて召し具すべき由。仰せられけるに。宗清辭し申しけり。(申略)大納言鎌倉に下著し給ひたりければ。兵衛佐急ぎ見參し給ひけるに。先宗清左衛門尉は御伴かと尋ね申され。勞はる事ありて下向なしと宣ひければ。世にも本意なけにて。頼朝召人にて宗清が許に預け置かれたりしに。事に觸れて情深く當り申しゝかば。忘れ難く戀しくも覺えて。必ず召し具せらるべき由兼て申し上せて侍れば。御伴には定めて下り候ふらむ

と相存じて候へば。返す返す遺恨に候ひき。平家都を落ちぬ。今更頼朝に面を合せむ事よなど云ふ意趣も残り侍るにやとまで宣ひて。誠に本意なしと思へる氣色なり。宗清が料とて所領の宛文までなし儲け。馬鞍絹染物等様々の引出物用意あり。其の上大名三十人に仰せて。一人別の結構には。鞍置馬。裸物各一匹長櫃一合。其の中には宿物一領小袖十領直垂五具絹十匹入るべし。此の外。分に過ぐべからずと下知せられければ。三十人面々に我劣らじと。馬は六鈴沛艾を選び。鞍は金銀を鏤めたりけれども。下らざりければ。是も面々に本意なき事にぞ思ひ申しける。大納言殿をば。暫く鎌倉にもおはしまし候へかすと宣ひけれども。京都にも覺束なく思ふらむとて。急ぎ上洛せられければ。大納言殿になし返し奉るべき由。申され。内奏しける上。本の知行庄園は一所も相違なく。其の外所領八箇所の下文等書き副えて奉る。鞍置馬二十四裸馬二十四長持二十合。中には衣染物砂金鷲羽など入れられたり。其の直十萬餘貫に及べりと云ふ。兵衛佐かやうにもてなし給ひければ。大名小名我も我もと引出物を奉る。宗清が料の用意も皆此の殿にぞ奉りける。されば上り給ひけるには馬も三百匹に餘りけり。命を生け給へるだにも有り難きに。剩徳つき所知得給へりと披露ありければ。入の口様々

なり。或は家の疵を顧みず。一門を引き分け。永く名望を失ひて。今に存命を全うする事。然るべからずと誇る者もあり。又池尼公頼朝を宥し生けすば。頼盛いかでか虎口を遁れて鳳城に還らむ。積善の家には必ず餘慶ありと云ふ。誠なるかなと羨み嘆むる者もあり。其の口何れも理なり。

(源平盛衰記)

截齋訓儉

作者不詳

二十一日丙午。(元暦元年十一月)今朝。武衛(頼朝)御要有りて。筑前守俊兼を召さる。俊兼御前に参り進す。而るに本自から花美を事とする者なり。只今殊に行粧ツクリを刷ツクリひ。小袖十餘領を著け。其の袖袂は色を重ねたり。武衛之を覽そなはし。俊兼の刀を召す。即ち之を進らす。自から彼の刀を取りて。俊兼の小袖の袂を切らしめ給ひて後。仰せられて曰く。汝は才翰に富めり。蓋ぞ儉約を存ぜざる。常胤(千葉)實平(土肥)の如きは。清濁を分たざるの武士なり。所領と謂つば。又俊兼に雙ぶ可からず。而るに各衣服以下蠶品を用ひ。美麗を好まず。故に其の家富有の聞あり。數輩の郎従を扶持せしめ。勳功を勵まんと欲す。汝産財の費ゆる所を知らず。太はだ過分なりと。俊兼

述べ申すに。所無く。面を垂れて敬屈す。武衛向後華美を停止すべきや否やの由を仰せらる。俊兼停止す可きの旨を申す。廣元。邦通。折節傍に候して。皆魂を消す。

(東鑑)

橋本の君……………一條冬良(俗傳。非)

猛き武士モウシクの起を尋ねれば。往古田村など云ひける將軍どもの事は耳遠ければ。差し措きぬ。其のかみより今まで源平の二つ流ぞ時により折に随ひて。公の御守とはなりにける。(中略)又源氏武者と云ふも。清和の帝或は宇多の院などの御後どもなり。二條の院の御時。平治の亂に伊豆の國。蛭が小島へ流されし兵衛佐頼朝は。清和の帝より八代の流に六條の判官爲義と云ひし者の孫なり。左馬頭義朝が三男になむありける。西八條の入道大臣(清盛)漸う榮華衰へむとて後白川院を惱まし奉りしかば。安からず思されて。彼の頼朝を召し出で、軍を起し給ひしに。然るべき時や到りけむ。平家の人々は壽永の秋の木枯に散り果て、遂にわたつ海の底の藻屑と沈みにし後。頼朝彌權を施して更に君の御後見を仕うまつる。相模の國鎌倉の里と云ふ所に居りながら。世

をば掌の中に思ひき。皆人知り給へることなれば。今更に申すも中々なれど。院の上位に即かせ給ひし始より。世の警固カガとなりて。文治元年四月二の階を昇りしも。八島の内大臣宗盛を生捕の賞と聞ゆ。建久の初めつかた都に上る。其の勢の嚴めしき事云へば更なり。道すがら遊君ども參る。遠江の國。橋本の宿に著きたるに。例の遊女多くえも云はず装束サツゾクきて參れり。頼朝うちほ、笑みて。

橋本の君に何をか渡すべき

と言へば。梶原平三景時と云ふ武士取り敢へず。

たゞ杉山のくれであればや

最あいだてなしや。馬鞍こんく、り物など運び出で、引けば。喜び騒ぐ事限なし。其の年の十一月九日。權大納言になされて右近大將を兼ねたり。師走の朔日頃悦び申して。同じき四日頓ツカサて官をば返し奉る。此の時ぞ諸國の總追捕便と云ふ事承りて。地頭職に我が家の兵者どもをなし集めけり。此の日本國の衰ふる始は是よりなるべし。さて吾妻に歸り下る頃。上下色々の幣多かりし中に。年頃も祈などし給ひにし吉水僧正彼の長歌の座主宣ひ遣しける。

東路の方になこそその關の名は君を都に住めとなりけり御返し。頼朝。

都には君も逢坂近ければなこそその關は遠きとを恐れ

この後も亦上りて東大寺の供養にも詣でたりき。斯くて新院の御位の始めつ方。正治元年正月吾妻にて頭おろして。同じき十三日に年五十三にて薨れにけり。治承四年より天の下に用ゐられて。二十年ばかりや過ぎぬらむ。

(増鏡)

文 覺

俗稱遠藤武者盛遠。上西院の北面武士となり。渡邊渡の妻袈裟を戀ひて之を殺し。悔悟して出家す。院宣を伊豆の頼朝に傳へ。頼朝をして奮起せしむ。頼朝薨後亂を圖り。佐渡に流されて死す。時に年八十。

荒

行

信濃前司行具(俗傳)

仰この文覺と申すは。渡邊の遠藤左近の將監持遠が子に。遠藤武者盛遠とて上西門

院の衆なり。然るを十九の年。道心起し。髻切り。修行に出でんとしけるが。修行といふはいか程の事やらん。ためして見んとて。六月の日の草もゆるがす照りたるに。或片山里の藪の中へはいり。はだかになり仰のけに伏す。蟲ぞ蚊ぞ蜂蟻などいふ毒蟲どもが身にひしと取りつきて。刺し喰ひなどしけれども。些とも身をも動かさず。七日までは起き上らず。八日といふに起き上りて。修行といふは是程の大事やらんと人に問へば。それ程ならんには。いかでか命も生くべきといふ間。さては安平ござんなれとて。やがて修行にこそ出でにけれ。熊野へ參り。那智籠りせんとしけるが。先づ行の誠に。聞ゆる瀧に暫く打たれて見んとて。瀧本へこそ參りけれ。頃は十二月十日餘りことなれば。雪ふり積り。氷柱ゐて。谷の小河も音もせず。峯の嵐吹き氷り。瀧の白絲垂氷となりて皆白妙におしなべて。四方の梢も見えわかず。然るに文覺。瀧壺におりひたる。首際つかりて慈救の咒を滿てけるが。二三日こそ有りけれ。四五日にも成りしかば。文覺堪へずして。浮き上りぬ。數千丈漲り落つる瀧なれば。何かは堪るべき。さつと推し落され。刀の刃の如くに。さしも厳しき岩角の中を浮き沈みぬ。五六町こそ流れけれ。時に嚴しき童子一人來て。文覺が手を把つて引き上げ給ふ。人奇特の思を

成し。火を焼き炙りなどしければ。定業ならぬ命ではあり。文覺ほどなく氣息出でぬ。大の眼を見睜らし。大音聲を揚げて。我此瀧に三七日打たれて。慈救の三浴叉を満てうと思ふ大願あり。今日は纔か五日にこそなれ。未だ七日だにも過ぎざるに。何者が是まで把つて來れるぞといひければ。聞く人身の毛豎つてものいはず。又瀧壺に歸り立つてぞ打たれける。第二日と申すに。八人の童子來て。文覺が左右の手を把つて引き上げんとし給へば。散々に抓み合うて上らず。第三日と申すに。終にはかなくなりぬ。時に瀧壺を穢さじとや。鬚結うたる天童二人。瀧の上より降り下らせ給ひて。よに煖き香しき御手を以て。文覺が頂上より始めて。手足の爪先蹠に至まで。撫で下させ給へば。文覺夢の心地していき出でぬ。抑、如何なる人にて坐せば。斯くは憐み給ふやらんと問ひ奉れば。童子答へて曰く。我は是れ。大聖不動明王の御使に。金迦羅制多伽といふ二童子なり。文覺無上の願を發し。勇猛の行を企つ。行いて力を併せよと。明王の勅に依りて來れるなりとぞ答へ給ふ。文覺聲を嗔らいて。さて明王は何所に坐すぞ。都率天にと答へて。雲井遙に上り給ひぬ。文覺掌を合せて。さては我行をば。大聖不動明王迄も知し召されたるにこそと。彌々頼もしく思ひ。猶瀧壺に歸り立

つてぞ打たれける。其後は。誠に目出度き瑞相共多かりければ。吹き來る風も身にします。落ち來る水も湯の如し。かくて三七日の大願終に遂けしかば。那智に千日籠りけり。大峯二度。葛城二度。高野。粉川。金峯山。白山。立山。富士嶽。伊豆。箱根。信濃の戸隠。出羽の羽黒。惣じて日本國殘る所なく行ひ廻り。流石猶故郷や戀しかりけん。都へ歸り上りたりければ。凡そ飛ぶ鳥をも祈り落す程の驗者とぞ聞えし。

(平家物語)

梶原景時

鎌倉景政の後。平三と稱す。頼朝に重用せらる。後諸將の惡む所となり。駿河に走りて敗死し。其の首を梟せらる。

二度の菟……………葉室時長(俗傳)

梶原平三景時が二男に平次景高一陣に進んで攻め入る。大將軍(範頼)宣ひけるは。是は大事の城戸の口。上には高檜に四國九國の精兵共を集め置きたるなるぞ。過失す

梶原景時

五四三

な。楯を重ね馬に冑を著すべし。無勢にしては悪しかりなむ。後陣の大勢を待ち揃えて寄すべしと下知し給へば。人々承り繼ぎて。大將軍の仰なり。勢を待ち設けて寄せ給へと云へば。梶原はきと見返りて。

武士のとりつたへたる梓弓引きては人の返るものかは

と詠じて。城戸口近く押し寄せて散々に戦ふ。(中略)梶原は。今は軍庭平なり。寄せよ者共とて。子息の源太(景季)相具して五百餘騎喚きて中へぞ入りにける。其の手には新中納言父子。本三位中將大將としておはしましけるが。敵内に亂れ入ると見給ひて。二千餘騎を指し向けて梶原が五百餘騎を中に取り籠めて。餘すな漏すなとて一時許ぞ戦ひける。孰も互に引かざりけるが。流石無勢なれば梶原下手に廻りて。さと引いてぞ出でたりける。源太は如何にと問へば。御方を離れて敵の中に取り籠められ給ひぬと云ふ。あな心憂さては討たれぬるにや。景時生きて何かせむ。景季が敵に組んで死なむとて二百餘騎を相具して。平家の大勢蒐散して内に入り聲を揚げて。相模國の侍人鎌倉權五郎平景政が末葉梶原平三景時ぞ。彼の景政は八幡殿の一の郎等。奥州の合戦の時右の目を射られながら其の矢を抜かずして當の矢を射返して敵を討ち。名を後代

に留めし末葉なれば一人當千の兵ぞ。子息景季が向後奮く返し入れり。我と思はむ大將も侍も組めや組めやと名のり懸けて。轡を並べて攻め入りければ。名にや實に恐れけむ左右へさとぞ引き退く。源太尋ねよと攻め入り見れば。景季未討たれず。初は菊地の者共と射合ひけるが。後には太刀を抜き合せて名のりけり。和君は誰ぞ。菊地三郎高望。和君は誰ぞ。梶原源太景季と名對面して切り合ひたり。源太は甲を打ち落され大童にて三十餘騎に取り籠められて切り合ひけるが。菊地三郎に押並へて引組んで。馬の際に落ち重つて菊地が首を取り。太刀の切鋒に刺し貫きて馬に乗り出でけるが。父の梶原に行き合つたり。平三景時源太を後になして矢面に進み禦ぎ戦ひつゝ。其の間源太に冑著せ暫し休めて寄つ返しつ戦ひけり。城戸口に眞鍋の四郎五郎と名乗つて出で合ひたりけるが。四郎は梶原に討たれぬ。五郎は手負ひて引き退く。平家の兵共も入れ替へ入れ替へ戦ひけれども。景時は源太が死なぬ嬉しさに猛く勇みて。堅さま横さま戦ひけり。暫し息をも繼ぎければ。父子相具して引いて城戸へぞ出でにける。儲こそ梶原が生田の杜の二度の墓とは云はれけれ。

詩歌管絃は公家仙洞の翫物。東夷いかでか磯城島難波津の言葉存すべきなれど

も。梶原は心の剛も人に勝れ數寄たる道も優なりけり。咲き亂れたる梅が枝を胡篔に割えてぞ挿したりける。かゝれば花は散りけれども匂は袖にぞ残りけり。

吹く風を何いとひけむ梅の花散り來る時ぞ香はまさりける

と云ふ古き言までも思ひ出でければ。平家の公達は。花簾とて優なり優しと口々にぞ感じ給ひける。此の梶原。右大將家(頼朝)の奥入し給ひける時。名取川にて。

我獨けふの軍に名とり川

と繰り返し繰り返し詠じ給ひければ。大名小名呻ウツきすめきけれども付くる者なかりけるに。梶原。

君もろともにかち渡りせむ

と付けたりけり。又京上の御伴に相模國毬子川を渡り給へりけるに。梶原少し用ありて片方に下り居たりけるが。御伴に下りぬと一鞭當て、打つ程に。此の川の中にて馳せ付き奉りたりけるに。沛艾の馬にて鎌倉殿に水をさゝと蹴懸り奉り。御氣色悪くて屹キと睨み返り給ひたりけるに。梶原。

圓子川ければぞ波はあがりける

と仕りて手綱を揺り居ゑければ。御氣色直り給ひてうち嘯き。ければぞ波はあがりけると二三返詠じ給ひて對の岸に打ち上り。馬の頭を梶原に引き向けて。

かゝりあしくも人や見るらむ

と付け給ひ。如何に發句脇句孰優れるとぞ仰せける。斯る優しき男なりければ。さしもの戰場思ひ寄るべきにあらねども。折知り貌の梅が枝を簾に挿して寄せたれば。源氏の手折れる花なれども平家の陣にぞ香ひける。

(源平盛衰記)

寂蓮法師

僧俊海の子。叔父俊成養ひて子となす。定家生るゝに及び。避けて僧となる。丹青を善くし。和歌に巧なり。建仁二年七月寂す。

歌

論

作者不詳

俗名中務少輔從五位下定長。俊成卿の舍弟醍醐俊海阿闍梨の子なり。俊成卿猶子とし給ふ。出家して寂蓮と云ひき。鶴本に云ふ。寂蓮はえも云はぬ秀人なり。毎に面白

寂蓮法師

くも幽玄にも心ありても聞ゆと云々。無名抄に云ふ。寂蓮が云はく。我等が詠まむやうに詠めと云はむに。季經顯昭法師など幾日案ずとも。えこそ詠まざらめ。我彼の人々の詠むやうには。只筆さしぬらして最よく書きてむと云々。八雲御抄に云ふ。顯昭法師寂蓮法師風情は無下に並び難く侍れど。稽古や久しく侍りけむ。頻に歌を争ひけるに。寂蓮が云はく。さらば寂蓮が詠み侍るやうなる歌を顯昭仕うまつりて。斯くは詠みつべし。されど其が悪しければ。顯昭が詠み侍るやうには詠むなりと申し侍らば。寂蓮閉口すべし。顯昭がやうなる歌は。寂蓮が讀み損じたる歌に甚多しとぞ云ひける。けにも其の器無下に劣れる上は更に云ふ所なしと云々。井蛙抄に云ふ。一條の法印云はく。左大將家六百番歌合の時。左右の人数日々に参りて評判を加へ。左右申す詞を書かれけり。自餘の人は不參の日あれども。寂蓮顯昭は毎日参りて論評ありけり。顯昭は聖にて獨鈷を持ちたりける。寂蓮は鎌首もたて、諍ひけり。殿中の女房。例の獨鈷鎌首と名づけりと云々。建仁二年七月二十日に逝去と云々。定家卿深く歎き給ひ。追悼の歌に云はく。

たまきはる世のことわりもたどられず思へばつらし住吉の神（歌道人物誌）

藤原俊成

俊忠の子。和歌を基俊に受け。古今集の秘旨を受く。安元中薙髮して釋阿といふ。嘗て千載和歌集を撰す。元久元年薨す。年九十一。

傳……………尾崎雅嘉

俊成卿若かりし時。母方の祖父藤原顯隆の養子となり給ひて名を顯廣と云ひしが。後に俊成と改名せられたるなり。一説には顯輔の養子と云へり。和歌は基俊を師として。古今集の傳も彼の人より受けられたり。其頃基俊と俊頼と兩人ながら世に名高き歌人なりけれど。中惡しくて其の弟子ども方々に流義を立て、譏り合へり。俊成猶素より基俊の弟子にてありけれど。一途に基俊の事を譽められず。俊頼に於ては其の歌の風體よき事を讚め。基俊に於ては其の學力の長じたる事を譽められたり。或人俊成卿に不審して云ふ。足下には師匠基俊の憎まるゝ俊頼の歌を好み給ふと聞く。是如何なる事に侍るやと云へりければ。俊成申さるゝは。下官は唯歌を見て慕ひ侍るのみな

り。其の人がらに由る事には侍らず。と申されければ。時の人。俊成卿の心に偏頗なきを尊べり。俊成卿自讃の歌の事は。俊惠法師の物語に曰はく。五條三位俊成の御許に参うでたりし序に。御詠の中には孰をか勝れたりとは思す。人は餘所にてさまさまに沙汰し侍れど。其をば用る侍らず。正しく承らむと思ひ侍ると申せしかば。俊成卿申さるゝは。

夕されば野べの秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里

是をなむ身に取りてのおもて歌とは思ひ侍ると云はれしかば。俊惠申すには。世に普く人の申し侍るは。

面影に花の姿をさきだてゝ幾重越え來ぬ峯の白雲

是を勝れたる御歌のやうに申し侍るは。如何と申しければ。俊成卿。いざ餘所にはさもや定め侍らむ。尙自は先に申せし歌には云ひ比ぶべからずとぞ言はれしと云々。又俊成卿常に歌を詠まるゝ時は。古き淨衣を着て正しく座し。桐火桶を抱きながら。心を凝して詠まるゝ事にて。聊も寛ぎたる姿をせられざりしが。歌の出來たる態何となく心正しくして。其の詞和かに調ひければ。世の人桐火桶の體スガダと云へり。此の卿老後に

至りても耳目共に衰へず健なりければ。禁裏の御會にも度々参られ。後鳥羽院の御師範たりければ。甚く御寵ありて。建仁三年此の卿九十歳なりければ。光孝天皇。遍照に賀を賜ひし例に倣はせ給ひ。禁中の和歌所に於て九十の賀を賜はり。屏風褥なども設けさせ給ひ。御製の歌と鳩の杖とを賜はりければ。子息達。俊成卿を扶けて殿上に昇られしとぞ。又俊成卿常に歌詠む心得を申さるゝには。歌は必ず才覺を揮ひて繪師の繪の具を盡し。作物ツクモノ司シの木の色を種々サマサマに割り居るたるやうにはあらざるべし。唯讀み上げ。うち詠むるに實サに覺えてをかしくも聞ゆる姿あるべしと言はれたり。又外より此の卿に題詠を乞ふ者あれば。稍其の讀み難き題なりと思はるれば。先家人子弟をして之を讀ましめ。其の詞と心との探るべきものを擇び。其を潤色して我が歌とせられたり。故に勝れたる歌多しと云へり。又定家卿若くして殿上人たりし時。後白河院の叡慮に逆ひて。勳氣を蒙り引き籠りておはせしが。其の年も暮れたれど赦させ給ふべき御氣色の見えざれば。父の俊成卿此の事を歎きて詠まれたる歌。

蘆たづの雲居に迷ふ年暮れて霞をさへや隔て果つべき

此の歌を主上叡覽ありて甚く感心し給ひ。此の卿の甥の定長朝臣に仰せて。御製の

御返しを下されけり。其の御製は。

蘆たづは雲唐をさして返るなり今日大空の晴るけしきに

斯くて帝の御氣色直らせ給ひ。定家卿の勘氣を赦させ給へり。又此卿最勝光院の花見られたる次に。御堂を明けさせて拜まむとて預を尋ねられしに。遅く來ければ如何にと言はれけるに。鎌を求め失ひてと答へけるを聞きて。何となく口吟に。

かぎあづかるもしやうの大事や

と言はれたりけるを。事もなき女房のありけるがうち聞きて。取り敢へず。

あけくればさせることなきもの故に

とぞ附けたりける。又俊成卿は此の道の長者にておはしけれども。或所にて富士の鳴澤と云ふ事をなるさと讀み誤られたる事ありければ。徳大寺殿と一つに番ひて。なるさの入道名なしの大將と云はれ給ひしこそ遺憾なれと長明は言はれたり。さて此の卿を五條の三位と云ふ事は。五條室町に住まれし故なり。家集を長秋詠藻と云ふ。此の長秋と云ふ事は。皇太后宮の御殿を唐土にて長秋宮と云ふによりてなり。著述の書は古來風體抄なり。

(百人一首一夕話)

靜

義經の妾。義經京を去るの日。從ひて吉野に匿れ。後鎌倉に召され。鶴ヶ岡社前に舞ふ。靜義經を慕ふの情を諠ふ。遂に京に放還せらる。

賤のをだまき……………作者不詳

さる程に鎌倉殿(頼朝)三島の御社參とぞ聞えける。八箇國の侍共御供申しける。御社參の御徒然に様様の物語をぞ申しける。其の中に川越の太郎靜が事を申し出したりければ。各斯様の序ならでは如何でか下り給ふべき。あはれ音に聞ゆる舞を一番御覽ぜられざらむは無念に候ふと申しければ。鎌倉殿仰せられけるは。靜は九郎に思はれて身を華族にするなる上。思ふ中を妨けられ其の形見にも見るべき子を失はれ。何のいみじきに頼朝の前にて舞ふべきと仰せられければ。人々は尤の御説なり。さりながら如何して見むぞと申しける。抑いか程の舞なれば。か程に人々念を懸けらるるぞと仰せられければ。梶原。舞に於ては日本一にて候ふとぞ申しける。鎌倉殿。こ

とごとしや何處にて舞ひて日本一とは申しけるぞ。梶原申しけるは。一年百日の旱の候ひけるに。賀茂川桂川みな瀬きれて流れず。筒井の水も絶えて國土の惱にて候ひけるに。次第久しきれいもん。比叡の山三井寺東大寺興福寺などの有驗の高僧貴僧百人。神泉苑の池にて仁王經を講じ奉らば。八大龍王も示現納受垂れ給ふべしと申しければ。百人の高僧貴僧を請じ。仁王經を講ぜられしかども其驗もなかりけり。又或人申しけるは。容顏美麗なる白拍子を百人召して。院御幸なりて神泉苑の池にて舞はせければ龍神納受し給はむと云へば。さらばとて御幸ありて百人の白拍子をして舞はせられしに。九十九人舞ひたりしに其の驗もなかりけり。靜一人舞ひたりとも龍神示現あるべきか。内侍所に召されて祿重きものにて候ふにと申したりければ。とても人数なれば唯舞はせよと仰せ下されければ。靜が舞ひたりけるに。しんむしやうの曲と云ふ白拍子を半ばかり舞ひたりしに。見越の嶽愛宕山の方より黒雲俄に出で來て洛中に懸ると見えければ。八大龍王鳴り渡りて電ひらめきしに。諸人目を驚かし三日の洪水を流し。國土安穩なりしかば。偕こそ靜が舞に示現ありけるとて。日本一と宣旨を給はりけると承り候ひしと申しければ。鎌倉殿是を聞きしめて。偕も一番見たしとぞ仰せられける。

(中略) 左衛門の女房心有様の物語などせられつゝ。今や云はまし今や云はましとぞ思ひける。昔の京をば難波の京とぞ申しけるに。愛宕の郡に都を立てられしより以來東海道を遙に下りて。由井の足利より東。相模の國小坂の郡由井の腰ひつめの小林。鶴が岡の籠に今の八幡を祝ひ奉る。鎌倉殿にも氏神なれば判官殿を盡か守り奉り給はざらむ。和光同塵は結縁の初。八相成道は利物の終。何事か御祈の感應なからむや。當國一の無雙にて渡らせ給へば。夕は參籠の輩門前に市をなす。朝には參詣の輩肩を並べて踵を接ぐ。然れば日中には適ひ候ふまじ。堀殿の妻女若宮の案内者にておはしまし候ふ。妾も此の所の巨細の者にて候へば。明日まだ夜こめて御參詣候ひて思しめす御宿願も遂げさせおはしまし。其の次に御かひなさし法樂し參らせ給ひ候ひなば。鎌倉殿と判官殿と御中も直らさせおはしまし候うて思しめす儘なるべし。奥州に渡らせ給ひ候ふ判官殿も聞きしめし傳へさせ給はゞ。我が爲に丹誠を致し參らせ給ふと聞きしめしては。如何ばかり嬉しとこそ思し召し候はむすれ。偶斯る次ならでは如何でかさる事候ふべき。理を枉けて御參詣候へ。餘りに見奉りてより最ど疎略に思ひ參らせず候へば。せめての事に申し候ふなり。御參詣候はゞ御供申し候はむとぞ賺しける。靜是を聞きて

實にとや思ひけむ。母の禪師を招きて如何あるべきと云ひ申れば。禪師もあはれさもあらま欲しく思ひければ。是は八幡の御詫宣にてこそ候へ。是程に深く思し召しける嬉しさよ。疾く疾く参らせ給へと云ひければ。さらば晝は適ふまじ。寅の時に参りて辰の時に形の如くに舞ひて歸らばやとぞ申しける。(中略)遙に日闇けて輿を昇きてぞ出で來る。左衛門尉藤次が女房諸共にうち連れて回廊にぞ詣でたりける。禪師さいはらそのこま其の日の役人なりければ。靜と連れ回廊の舞臺へ直る。左衛門の女房は同じ姿なる女房達三十餘人引き具して棧敷に入りける。靜は神前に向ひて念誦してぞ居たりける。先磯の禪師珍しからねども法樂の爲なれば。佐原に鼓打たせて好物のせうしやと云ふ白拍子を數へてぞ舞ひたりける心も言葉も及ばれず。さしも聞えぬ禪師が舞だにも是程面白きに。まして靜が名にし負うたる舞なれば。さこそ面白かるらむとぞ申し合ひける。靜人の舉動幕の引きやう如何さまにも鎌倉殿の御參詣と覺えたり。祐經が女房賺して鎌倉殿の御前にて舞はすると覺ゆる。あはれ何ともして今日の舞を舞はで歸らばやとぞ千種に案じ居たりける。左衛門尉を呼びて申しけるは。今日は鎌倉殿御參詣と覺え候ふ。都にて内侍所に召されし時は。内藏頭信光に囃されて舞ひたり

しぞかし。神泉苑の池の雨乞の時は四條のきすはらに囃されてより舞ひ候ひしが。此度は御不審の身にて召し下され候ひしかば。鼓打などを連れても下り候はず。母にて候ふ人の形の如くの腕さしを法樂せられ候はゞ。我々は都に登り又こそ鼓打用意して態と下りて法樂に舞ひ候はめとて。頓て立つ氣色に見えければ。大名小名是を見て興醒めてぞありける。鎌倉殿も閉しめして。世間狭き事かな。鎌倉にて舞はせむとしけるに。鼓打のなくて遂に舞はざりけりと聞えむ事こそ恥かしけれ。梶原。侍共の中に鼓打つべき者やある。尋ねて打たせよと仰せられければ。(中略)左衛門尉は紺葛の袴に木賊色の水干に立烏帽子。紫檀の胴羊の革にて張りたる鼓の六の緒の調を掻き合せて。左の脇にかい挟みて。袴のそば高らかに差挟み。上の松山廻廊の天井に響かせ。手色打ち鳴して殘の樂頭を待ちかけたり。梶原は紺葛の袴に山鳩色の水干立烏帽子。南鐮を以つて綴りたる黄金の菊形打つたる銅拍子に啄木の緒を入れて。祐經の右の座敷に直りて。鼓の手色に隨ひて鈴蟲などの鳴くやうに合せて島山を待ちけり。島山は幕の綻より座敷の體をさし覗きて。別して色々しくも出でたゝす。白き大口。白き直垂に紫革の紐付けて。折烏帽子の片方をきつと引き立てゝ。松風と名づけたる漢竹の横

笛セウを持ち。袴のそば高らかに引きあけて。幕ツツと引きあけつと出でたれば。大の男の重らかに歩みなして舞臺に昇り。祐經が左の方にぞ居直りける。名を得たる美男なりければ。あはれなりとぞ見えける。其の年二十三にぞなりける。鎌倉殿是を御覽じて。御簾ミスの内よりあはれ樂頭やとぞ賞めさせ給ひける。時に取つては奥深しとぞ見えける。靜是を見て。能くぞ辭退したりける。同じくは舞ふとも斯る樂頭にてこそ舞ふべけれ。心輕くも舞ひたりけり。いかに輕カル々しくあらむとぞ思ひける。禪師を呼びて舞の裝束をぞしたりける。松に懸れる藤の花。池の汀に咲き亂れ。空吹く風は山霞。初音床しき杜鵑の聲も折知り顔にぞ見えける。靜が其の日の裝束には。白き小袖一襲唐綾を上ウに引き襲ねて。白き袴蹈みしだき。割菱縫ひたる水干に。丈なる髪を高らかに結ひなして。此の程の悲嘆イナクに面瘦せて薄化粧眉細やかに粧ツクりなし。みな紅の扇を開き寶殿に向ひて立ちたり。さすが鎌倉殿の御前にての舞なれば。面映オモハユくや思ひけむ。舞ひかねてぞ休らひける。二位殿政子は之を御覽じて。去年の冬四國の波の上にて搖られ。吉野の雪に迷ひ。今年海道の長旅にてやせ衰へて見えたれども。靜を見るに我が朝に女ありとも知られたりとぞ仰せられける。靜其の日は。白拍子は多く知りたれども。

殊に心に染む物なれば。しんむしやうの曲と云ふ白拍子の上手なれば心も及ばぬ聲色にて。はたと揚げてぞ歌ひける。上下あと感じる聲雲に響くばかりなり。近きは聞いて感じけり。聲も聞えぬもさこそ有るらめとてぞ感じける。しんむしやうの曲ナガク半分ばかり數へたりける所に、祐經心なしとや思ひけむ。水干の袖を外して攻セをぞ打ちたりける。靜君が代を歌ひあけたりければ。人々是を聞き。情なき祐經かな。今一折舞はせよかしとぞ申しける。詮ずる所敵の前の舞ぞかし。思ふ事を歌はゞやと思ひて。

しつやしつしつのをだまき繰り返し昔を今になすよしもかな

吉野山峯の白雪ふみ分けて入りにし人の跡ぞこひしき

と歌ひたりければ。鎌倉殿御簾をさと下オロし給ひけり。鎌倉殿。白拍子は興醒めたる物にてありけるや。今の舞ひやう歌ひやう怪イしからず。賴朝田舎に住み馴れしかば聞き知らじとて歌ひける。しつのをだまき繰り返しとは賴朝が世盡きて九郎が世になれとや。あはれおほけなく覺えし人の跡たえにけりと歌ひたりければ。御簾を高らかに上げさせ給ひて。輕々しくも賞めさせ給ふものかな。二位殿より御引出物色々給はりしを。判官殿の御祈の爲に若宮の別當に参りて。堀の藤次の女房諸共にうち連れてぞ歸

りける。翌くれば都にとて上り北白川の宿所に歸りてあれども。物をも渉々しく見入れず。憂かりし事の忘れ難ければ。訪ひ來る人も物憂しとて唯思ひ入りてぞありける。母の禪師も慰め兼ねて。最と思深かりけり。明暮持佛堂に引き籠り。經を讀み佛の御名を唱へてありけるが。斯る浮世に長らへても何かせむとや思ひけむ。母にも知らせず髪を切りて剃りこほし。天龍寺の籠に草の庵を引き結び。禪師諸共に行ひ澄ましてぞありける。姿心人に優れたり。惜しかるべき年ぞかし。十九にて様を變へ。次の年の秋の暮には思や胸に積りけむ。念佛申し往生をぞ遂げにける。聞く人貞女の志感じけるとぞ聞えける。

(義經記)

畠山重忠

莊司重能の子。頼朝武藏に至るに及び。之に降り。屢々戦功あり。元久中其の子重保の事によりて。北條氏の惡む所となり。爲に死す。年四十二。

傳

樋口好運

畠山氏は桓武天皇の後胤。高見王の一男高望に始めて平姓を賜ふ。高望十五代秩父の太郎重弘一男。秩父の庄司重能の嫡男次郎重忠と號す。源頼朝義兵の時與せず。妻は北條時政の娘にて頼朝御臺所の姉なり。然りと云へども重忠の父重能上洛し六波羅の在番たる故なり。之に依つて一族三浦義盛と小坪に於て戦ひ。軍に討ち負け。翌日衣笠の城を攻め三浦大介義明を討ち捕る。義盛は重忠に阻てられ。石橋山の合戦に向はずして房州へ尋ね行きしとかや。畠山家白幡を重寶とす。其の故は昔日八幡太郎義家奥州に攻め下り。武衡家衝追討の時。重忠五代の祖秩父の十郎武綱。初參陣の賞として源氏の白幡を賜はる。其の後源太義平上野の國大藏の館にて多古先生を攻め給ふ時。重忠彼の白幡を押し立て戦ひしに軍忽ち勝利となる。中んづく重忠頼朝に降參して寵臣他に異なりき。元暦元年木曾義仲を追討の時。重忠五百餘騎宇治川を渡す。敵根井の大彌太行親が放つ矢。重忠の馬の吹荒^{フキアラシ}を射通しければ。馬の前足を肩に掛け。水底を潜りて向ふの岸に著く。水中にて武者一人流れ來つて助け給へと云ふ。時に重忠右の手にて馬の足を持ち。左の手に持ちたる弓箭に取り竹かせ。引き寄せ上帶を掴んで二間ばかり向ふの岸へ投げ揚げれば。鹽谷小三郎と名乗り一禮して走り行きけり。

又一谷の合戦にも義經に屬し。搦手に向つて岩石を落す。此の時嶮岨の所にて馬敢て進まざれば。又馬の兩足を肩に掛けて。今日は汝吾を扶く。明日は汝吾を助けよと戯れて岩石を落されける。是より重忠の大力を諸人知れり。又文明五年奥州厚樫山の合戦に先陣を奉り。殊に錦戸の太郎國衡が首を捕り。功名萬人に超えたり。斯の如きの勇將を北條時政の室女牧の御方の讒に依つて殺害しけるこそ無下の行跡なれ。最後の合戦にも自身敵三十餘騎討つて剛強の名を挙げにけり。
(本朝武家高名記)

池月の聲

橋本寧

島山重忠。幼名は氏王。源頼朝に従ひ。勇を以て顯る。宇治川の役。重忠手兵を以て流を渡りて進む。馬箭に中る。泗いで濟り。溺を溺者に授け。扶持して岸に達し。刀を揮ひて奮戦し。西軍辟易す。又義經に従つて平氏を一谷に攻めて功有り。壽永五年。頼朝に従つて藤原泰衡を陸奥に撃ち。功を以て葛岡郡を賜ふ。重忠資性忠厚。冲退自ら守る。然も威嚴有り。等輩重忠の傍に在るに値へば。夏月盛暑と雖も。肅然として容を改む。頼朝も亦其の人と爲りを重じ。引見する毎に。諸將と席を絶つ。薨す

るに及び。遺言して後事を委託す。是より先重忠平賀朝雅と。皆北條時政の女を娶る。而して朝雅娶る所。其の後妻の子なり。故に時政。朝雅を偏愛して。重忠を惡み。後誣ふるに謀反を以し。重忠父子を攻め殺す。天下之を冤とす。初頼朝に名馬有り。池月と曰ふ。義仲を討つに及び。諸將多く之を得んと欲す。頼朝斬んで與へず。之を佐々木高綱に賜ふ。軍進みて浮島原に陣す。重忠遙に大嘶聲を聞きて曰く。異なる哉池月の聲なり。何を以て之に至ると。衆嗤ひて曰く。諸將の馬多し。而して公池月と曰ふ。亦泛ならずやと。重忠曰く。我耳惑はず。卿等之を待てと。既にして高綱の僕池月を牽きて至る。諸將乃ち服しき。
(瓊矛餘滴)

千手

駿河手越の遊女。後頼朝の侍女たり。平重衡の鎌倉に檻致せらるゝや。日夜其の傍に侍す。重衡の死穢尼さなれり。

五常樂

信濃前司行長(俗傳)

中將(重衡)道すがらの汗鬱イナセかりければ。身を清めて失はれむにこそと思ひて待ち給ふ所に。良ありて年の齡二十許なる女房の色白う清けにて髪のかゝり實マコトに美しきが。目結メユキの帷に繪附の湯巻して湯殿の戸推し開けて参りたり。其の跡に十四五許なる女の童の髪は袖長なりけるが。小村濃の帷著て椽ハシザラ盥ハシザラに櫛入れて持て参りたり。此の女房介錯にて良久しく御湯引かせ奉り。髪洗ひなんどして暇申して出でけるが。男などは異なうもぞ思召す。女は中々苦しかるまじとて鎌倉殿(頼朝)より参らせられて候ふ。何事も思召す事あらば承つて申せとこそ兵衛佐殿は仰せ候ひつれ。中將今は斯る身となつて何事をか思ふべき。唯思ふ事とは出家ぞしたきと宣へば。彼の女房歸り参つて兵衛佐殿に此の由を申す。兵衛佐殿其思ひ寄らず。私の敵ならばこそ。朝敵として預り奉つたれば適ふまじとぞ宣ひける。彼の女参りて三位中將殿に此由を申し暇申して出でければ。中將守護の武士に宣ひけるは。諸も唯今の女房は優なりつる者かな。名をば何と云ふやらむと問ひ給へば。狩野介(宗茂)申しけるは。彼は手越カシの長者が娘で候ふが。眉目姿心様優にわりなき者として。此の二三箇年は佐殿に召し置かれて。名をば千手前と申し候ふとぞ申しける。其の夕雨少し降つて萬物閑しけなる折節。件の女

房琵琶を持たせて参りたり。狩野介も家子郎等十餘人引き具して中將殿の御前近う候ひけるが。酒を勧め奉る。千手前酌を執る。中將少し請けて最興なけにておはしければ。狩野介申しけるは。且聞し召されてもや候ふらむ。宗茂は本伊豆國の者にて候へば。鎌倉では旅にて候へども心の及ばむ程は奉公仕り候ふべし。何事も思し召す事あらば承つて申せと兵衛佐殿仰せ候ふ。其何事にて申して酒を勧め奉り給へと言ひければ。千手前酌を差置き。羅綺の重衣たる情なきを機婦に妬むと云ふ朗詠を一兩遍したりければ。三位中將此の朗詠をせむ人をば北野の天神毎日三度翔つて守らむと誓はせ給ふとなり。されども重衡は今生にては早捨てられ奉つたる身なれば。助音しても何かせむ。但罪障輕みぬべき事ならば隨ふべしと宣へば。千手前やがて。十惡と雖も猶引攝イシセツすと云ふ朗詠をして。極樂願はむ人は皆彌陀の名號を唱ふべしと云ふ今様を四五遍歌ひ澄したりければ。其の時中將盃を傾けらる。千手前賜はつて狩野介にさす。宗茂が飲む時に琴をぞ弾き澄したる。三位中將普通には此の樂をば五常樂と云へども。今重衡が爲には後生樂とこそ觀すべけれ。聽て往生の急を引かむと戯れ。琵琶を取り點手をねぢて皇慶ワウシヤウの急をぞ引かれける。斯くて夜も漸う更け萬心の澄む儘に。あな思はず

や。吾妻にも斯る優なる人の有りけるよ。それ何事にも今一聲と宣へば。千手前重ねて。一樹の蔭に宿り逢ひ。同じ流を掬ぶも皆是先世の契と云ふ白拍子を實に面白う數へたりければ。三位中將も燈闇うして數行虞氏が涙と云ふ。朗詠をぞせられける。三位中將今思出で、口吟び給ふにや。最優しうぞ聞えし。さる程に夜も明ければ狩野介暇申して罷り出づ。千手前も歸りけり。其の朝兵衛佐殿は持佛堂に法華經讀うでおはしける處へ千手前歸り參つたり。其の後中將南都へ渡されて斬られ給ひぬと聞えしかば。千手前は中々物思の種とやなりにけむ。やがて様を變へ濃き墨染に寢れ果て。信濃國善光寺に行ひ澄し彼の後世菩提を弔ひけるぞ哀なる。(平家物語)

佐々木高綱

秀義の第四子。四郎といふ。宇治河の戰。景季を欺きて先登し。備前安藝等七國の守護となり。左衛門尉に任ぜらる。後出家し。信濃松本正行寺に終る。

傳

宝 鳩 巢

治承四年頼朝兵を起す。時に高綱京の吉田に在り。之を聞きて間行東歸し。北條に詣つて頼朝を見。始めて命を奉じて山木判官を撃つて功あり。石橋の軍敗れ。頼朝杉山に走るに及び。大庭景親の兵之を追ふこと急なり。高綱兄弟之を險隘に要し。數々射て敵を却く。然も敵衆くして支ふる能はず。景親遂に頼朝を追ひて之に及び。幾と免れず。高綱矢盡きて以つて敵を射るなし。乃ち短兵相接し。七たび戰つて七たび之を御く。頼朝故を以つて山中に逃れて脱去し。高綱に謂つて曰く。吾の死なざるは子の力なり。他日天下を得ば。當に子と之を共にすべしと。元暦元年。頼朝其弟範頼義經をして諸將の兵に分ち將として木曾義仲を討たしむ。高綱前一年の冬。告を賜ひて近江に在り。之を聞きて日夜馳すること三日。鎌倉に至る。頼朝高綱を見。大に喜びて謂ひて曰く。吾謂らく子當に諸將と京に會すべしと。圖らざりき來つて我を見んとは。高綱曰く。臣近江より大軍に京に會せば。誠に便なりと爲す。然も士軍役に従ふ。生きて還るを謀らず。恐らくは身軍中に死なば。復た調すること無からん。且つ親ら方略を受けて以つて出でば。臣に於いて安しと爲す。故に來るのみ。但騎する所の馬疲れて乗る可からず。是を患と爲すのみと。頼朝之に生暖を賜ひて曰く。此の馬は我の

愛する所なり。今以つて子に賜ふ。子騎して以つて先登せよ。高綱拜謝し且つ出づ。頼朝復高綱を呼びて告げて曰く。諸將意を此の馬に屬する者多し。蒲の範頼亦た我に言あり。梶原景季も亦三四之を請へり。卒に賜はず。子此の意を得て可なり。高綱曰く。敬みて諾す。幕下他日宇治川を先登する者有るを聞かば。他人に非ざるなり。必らず高綱なり。若他人先登すと聞かば。當に高綱の敵に死するを知るべしと。即ち辭し去り。諸將に浮島が原に及ぶ。會富士川の水高くして渡る可からず。諸將皆馬を下つて其の次を分處し。以つて水の落るを俟つ。梶原景季。高綱の舍人生唆を牽きて來るを見。怒つて曰く。吾先に此の馬を請へるに。賜はずして以つて高綱に賜ふ。是れ我を愛すること高綱に如かざるなりと。乃ち馬に乗じて道に當り。高綱を要して之を撃たんと欲す。高綱馬上より望みて之を知り。左右に謂つて曰く。彼必らず我に異志有らん。嚮に鎌倉君我を警むる者此が爲なり。變ありとも。汝等先づ動かすして我が令を待てと。既に相近づく。景季生唆を指して高綱に謂つて曰く。四郎君久しく相見ず。夫の馬は鎌倉君の賜ふ所か。高綱笑つて曰く。高綱去年の冬より近江に在り。猝に軍の興る近に在るを聞き復善馬を求むるに暇あらず。唯家に有る所の驚馬。日夜騎して以

つて馳せて鎌倉に至るに。馬既に斃れたり。公家に請ひて一匹を賜はんと欲す。想ふに士軍に臨み先登するは。唯馬を主と爲すのみ。聞く公厩の駿馬は生唆。磨墨有るのみと。今請はざれば則ち已む。請はゞ此の兩馬に非れば可ならず。然るに磨墨は既に公に賜ふ。生唆は蒲君及び公之を請へども賜はずと。二君の寵を以つて之を請へども猶賜はず。況や高綱をや。謂らく此れ公事なり。若かず偷みて之を取らんには。鎌倉君之を怒るとも大咎に至らざらんと。乃ち意を公厩の卒に致し。竊に取つて以つて來らしむ。鎌倉君追ひて我を罪せば。幸に君之を救へと。景季之を聞いて大に笑つて曰く。公の策之を得たり。悔らくは吾人にして先づ之を偷まざりしことをと。範頼義經の軍進みて宇治勢田に至る。義仲の軍橋を絶ち。水を阻て。以つて陣す。鎌倉の兵渡らんと欲するに。水深ければ溺れんことを恐れ。水の落るを待たんと欲すれば。徒に以つて日を曠うす。義經兵を宇治川の上に駐め。諸將と議して未だ決せず。忽ち二人あり馬を馳せて先登す。其の一は佐々木高綱たり。其の一は梶原景季たり。景季高綱に先つこと纔に歩。高綱後より景季を呼び。給きて曰く。君の馬の鞅太だ垂れたり。解くること無きを得んや。中流にして鞍覆らば恐らくは危し。盍ぞ之を結ばざると。景季

曰く諾と。自ら馬を止め、俯して之を結ぶ。高綱急に馳せて景季の傍を過ぐ。景季給
 かれたるを知りて之れを追ふ。高綱の馬強く。遂に景季に先ちて渡る。既に岸に上り。
 先づ佐々木高綱先登する者と呼び。一に乃ち馳せて敵軍に入つて奮戦す。諸將高綱景
 季の先登するを見。相繼いで盡く渡り。卒に以つて義仲を撃つて之れを敗ることを得
 たり。義仲既に滅す。頼朝高綱を以つて北陸道を總管せしむ。天下既に定まるに及び。
 更に備前。安藝。周防。因幡。伯耆。日向。出雲七州の守護を授く。居ること何イッパツも
 なく。高綱猝に爵邑を棄て、高野に入り。髪を削つて僧となり。信龍と號す。建仁三
 年。叡山の僧徒京に叛き。兵を金子山に屯す。官軍に詔して之を討たしむ。兵士多く
 は山徒に殺さる。高綱の子重綱も亦死す。經高盛綱力戦して遂に山徒を撃つて之を敗
 走せしむ。初經高等詔を奉じて叡山に赴かんとす。高綱高野より緇衣檜笠にして來つ
 て二兄を見る。高綱經高等に請ひて重綱の軍容を見る。重綱介冑して弓矢を執り。父
 の前に進む。高綱目之に在ること久くし。一語を發せず。重綱出づ。經高等高綱の爲
 に言ふ。重綱健力人に絶す。此の戦必らず能く敵に克つて朝廷の賞を受けん。高綱曰
 く。凡そ敵に赴くの法。甲冑は輕薄を欲し。弓矢は短小を欲す。此の如くにして進退

意に従つて餘力あり善戦す。未だ重大身に在つて能く戦に堪ふる者あらず。況や叡山
 は乃ち上下歩戦の地なり。豈に重甲大弓宜しき所ならんや。今重綱を觀るに。甲冑は
 重きに過ぎ。弓矢は大に過ぐ。甚だ其の人と相稱はず。是れ自ら敗を取るなり。死な
 ずして何をか俟たんと。果して其の言の如し。又二兄に語るに敵を撃つの方略を以て
 す。經高等聞いて之を心に記す。戦に臨むに及びて。高綱の言一として合はざるは無
 し。經高等嘆息して以つて及ぶ可からずと爲せり。

(鳩巢文集)

巴

義仲の妾。中原兼遠の女。義仲に従ひて勇戦す。近江の役。内田家吉と搏
 して。首を獲たり。後尼さなる。或は云ふ。和田義盛に嫁すと。

勇

戦

葉室時長(俗傳)

其の中に。木曾方より萌黄絲威の鎧に射残したりける鷹羽の征矢負うて。滋藤の弓
 眞中取り。蘆毛の馬の太く逞しきに少き巴摺りたる鞍置きて乗りたりける武者。一陣

に進みて戦ひけるが。射るも強く切るも強く。馳せ合せ馳せ合せ責めけるに。さしも名高き畠山河原へさと引いて出づ。畠山半澤六郎を招きて。如何に成清。重忠十七の年小坪の軍に會ひ初めて。度々の戦に合ひたれども。是程軍立の峻しき事に合はず。木曾の内には今井。樋口。楯。根井此等こそ四天王と聞えしに。是は今井樋口にもなし。さて何なる者やらむと問ひければ。成清彼は木曾の御乳母に中三権頭が娘巴と云ふ女なり。強弓の手練荒馬乗の上手。乳母子ながら妾にして。内には童を仕ふやうにもてなし。軍には一方の大將軍して更に不覺の名を取らず。今井樋口と兄弟にて怖しき者にて候ふと申す。畠山は如何あるべき。女に追ひ立てられたるも甲斐なし。又責め寄せて女と軍せむ程に。不覺しては永代の疵。多き者共の中に巴女に合ひけるこそ不祥なれ。但木曾の妾と云へば懐しきぞ。重忠今日の得分に巴に組んで虜にせむ。返せ者共とて取つて返し。木曾を中に取り籠めて散々に蒐け。畠山は巴に目をぞ懸けたりける。進み退き廻り合はむ廻り合はむと廻りければ。木曾巴を組ませじと蒐け阻て蒐け阻て。二廻三廻が程廻りける處に。畠山巴強ちに近く廻り合ふ。是は得たる便宜と思ひ。馬を早めて馳せ寄りて巴女が弓手の鎧の袖に取り付きたり。巴叶はじと

や思ひけむ。乗りたる馬は春風とて信濃第一の強馬なり。一鞭當てゝ煽りたれば。背の袖ふつと引き切つて二段許ぞ延びにける。畠山是は女にはあらず鬼神の振舞にこそ。かやうの者に矢一つをも射こめられて。永代の恥を残すべからず。引くに過ぎたる事なしとて。河原を西へ引き退き。院の御所へぞ歸り参りける。

木曾は此彼を打ち破つて。東を指して落ち行きけり。龍華越に北國へ傳ふとも聞えけり。長坂にかゝり播磨へとも云ひけり。其の口様々なりけれども。大津へ向けて打たれけるが。四宮河原にて見給へば僅に七騎に残りたり。巴は七騎の内であり。生年二十八。身の盛なる女なり。さる剛の者なりければ。北國度々の合戦にも手をも負はず。百騎が中にも七騎になるまで付きたりけり。四宮河原。神無社。關清水。關明神うち過ぎて。關寺の前を粟津に向けてぞ進みける。巴は都を出でける時は。紺村濃に千鳥の冑直垂を著たりけるが。關寺の合戦には。紫隔子を織りつけたる直垂に菊綴滋くして。萌黄絲威の腹巻に袖つけて五枚甲の緒を締め。三尺五寸の太刀に二十四指いたる眞羽の矢の射残したるを負ひ。重籐の弓にせきづるかけ。連錢葦毛の馬に金覆輪の鞍置きてぞ乗りたりける。七騎が先陣に進みてうちけるが。何とか思ひけむ。甲を

脱ぎ長に餘る黒髪を後へさとうち越して。額に天冠を當て、白打出の笠を著て。眉目も形も優なりけり。歳は二十八とかや。爰に遠江國の住人内田三郎家吉と名のりて。三十五騎の勢にて巴女に行き逢うたり。内田敵を見て。天晴武者の形氣かな。但女か童かおほつかなしとぞ問ひける。郎等能く能く見て女なりと答ふ。内田聞き敢へず。さる事あらむ。木曾殿には葵巴とて二人の女將軍あり。葵は去年の春礪並山の合戦に討たれぬ。巴は未だ在りと聞く。是は強弓精兵あきまを數ふる上手。岩を疊み金を延べたる城なりとも。巴が向ふには落ちすと云ふことなし。さる癖者と聞き召して。鎌倉殿彼の女相構へて虜にして進らすべき由仰を蒙りたり。巴は荒馬乗の大力。尋常の者にあらずと聞く。如何すべきと思ひ煩ひけるか。郎等共に云ふやうは。女強しと云ふとも百人が力によも過ぎじ。家吉は六十人が力あり。殿ばら三十餘人既に百人に餘れり。殿ばら左右より寄せて左右の手を引き張れ。家吉中より寄りてなどか巴を取らざらむと云ひけるが。内田又思ひ返すやう。待て待て暫し。槿花の朝に咲きて夕に萎むだにも己が盛はあるものを。八十九にて死ぬる命も。二十三十にて亡びむ命も同じ事。女程の者に組むととかく謀を出しけるよと。殊に後陣に控へたる甲斐の一條

の思はん事こそ恥かしけれ。殿ばら一人も綺ふべからず。家吉一人うち向うて巴女が頸とらむと云ひければ。三十餘騎の郎等は。日本第一に聞えたる怖しき者に組むまじき事を悦びて。尤々と云ければ。内田唯一人駒を早めて進む處に。巴是を見て先敵を讀めたりけり。あつばれ武者の貌かな。東國には小山。宇都宮か。千葉。足利か。三浦。鎌倉か。おほつかなし誰人ぞ。斯く問ふは木曾殿の乳母子に。中三權頭兼遠が娘に巴と云ふ女なり。主の遺の惜しければ向後を見むとて御供に待ると云ふ。鎌倉殿の仰を蒙り勢多の手の先陣に進るは。遠江國の住人内田三郎家吉と名のりて進みけり。巴は一陣に進むは剛の者。大將軍にあらずとも物具毛の面白きに。押並べて組み。しや首ねぢ切つて軍神に祭らむと思ひけるこそおそかりけれ。手綱かい繰り歩ませ出す。されども内田が弓を引かざれば女も矢をば射ざりけり。互に情を立てたれば。内田太刀を抜かざれば女も太刀に手を懸けず。主は急ぎたり。馬は逸りたり。巴内田馬の頭を押並べ。鎧と鎧と蹴合はするかとする程に寄せ合せ。互に音を揚げ。鎧の袖を引き違へたり。やをうとぞ組んだりける。聞ゆる浦艾の名馬なれども。大力が組み合ひたれば。二疋の馬は中に留まつて働かず。内田勝負を人に見せむと思ひけるにや。弓箭

を後へ指し廻し。女が黒髪三匠にからまへて。腰刀を抜き出し中にて首を搔かむとす。女是を見て。汝は内田三郎左衛門とこそ名のりつれ。正なき今の舉動かな。内田にあらず其の手の郎等かと問ひければ。内田我が身こそ大將よ。郎等にはあらず。行跡何にと申せば。女答へて云はく。女に組む程の男が。中にて刀を抜き目に見するやうやあるべき。軍は敵に依て振舞ふべし。故實も知らぬ内田かなとて。拳を握り刀持ちたる臂のかゝりを強^{シツカ}に打つ。餘りに強く打たれて把る刀を打ち落され。やをれ家吉よ。日本一と聞えたる木曾の山里に住みたる者なり。我を軍の師と憑めとて。弓手の肘を指し出し。甲の眞籐取り詰めて鞍の前輪に攻め付けつ。内甲に手を入れて七寸五分の腰刀を抜き出し。引き仰のけて首を搔く。刀も究竟の刀なり。水を搔くよりも尙安し。馬に乗り直り一煽り煽りたれば。身質は下へぞ落ちにける。首を持ち木曾殿に見せ奉れば。あな無慙や。是は八箇國に聞えし男。美男の剛者にてありつるものを。討たれけるこそ無慙なれ。是も運盡きぬれば汝に討たれぬ。義仲も運盡きたれば。何者の手に懸り敢なく犬死せむすらむ。日來は何とも思はぬ薄金が肩を引いて思ふなり。我討たれて後に。木曾こそ幾程命を生きむとて。最後に女に先陣かけさせたりと云は

む事こそ恥かしけれ。汝には暇を給ふ。疾く疾く落ち下れとぞ宣ひける。巴申しけるは。我幼少の時より君の御内に召仕はれ進らせて。野の末山の奥までも一つ道と思ひ切り侍り。今斯る仰を承るこそ心うけれ。君の如何にもなり給はむ處にて首を一所に竝べむと。かき詢^トき云ひければ。木曾誠にさこそは思ふらめども。我去年の春信濃國を出でし時。妻子を捨て置き。又再び見ずして永き別の道に入らむ事こそ悲しけれ。されば無らむ跡までも。此の事を知らせて後の世を弔はどやと思へば。最後の伴よりも然るべきと存するなり。疾く疾く忍び落ちて信濃へ下り。此の有様を人々に語れ。敵も手繁く見ゆ。早々と宣ひければ。巴遺^コはさまざま惜しけれども。主命に随ひ落涙を拭ひつ。上の山へぞ忍びける。粟津の軍終りて後。物具脱ぎ捨て。小袖裝束して信濃へ下り。女房公達に斯と語り。互に袖をぞ絞^シりける。

(源平盛衰記)

板 額

城資國の女。族長茂の誓を復せむと欲し。經資盛と共に兵を擧ぐ。藤澤清親に擒へられ。刑を宥されて。淺利義遠の妻となる。捕へて甲斐に赴けり。